



彼と彼女の 千文字会話

吉日選集（初）

江見村元素

目次

【土手編】

1. アパレル
2. オシャレ
3. 連絡先交換
4. 中二病
5. 雲
6. アイス
7. 由来
8. 七夕
9. 河童
10. 恋愛小説
11. そうめん
12. 日記
13. トウモロコシ
14. 合成
15. 一線
16. 休日
17. 自由研究
18. 彼女の誕生日
19. 前後逆
20. 飲むヨーグルト
21. 漢字
22. 目の愛護デー
23. 小さな秋見つけた
24. 新規開店
25. 暖房
26. 早起き
27. 物音
28. 値上がり
29. 換気
30. 提案

【同棲編】

1. 掃除
2. ネット依存症
3. コン
4. 人類滅亡
5. ヒーロー
6. 初詣
7. お餅
8. しこう
9. ウィンタースポーツ
10. 社会正義
11. 友情
12. 間違い記念日
13. 確認
14. ご飯粒
15. 髪型
16. 宝くじ
17. 失せ物
18. なぞなぞ
19. どこでもドア
20. 転
21. 唯物論
22. 誤用
23. ベッド

24. 同棲終了

【遠恋編】

1. マヨネーズ
2. 変な名前
3. 花嫁修業
4. 幻
5. 爆弾低気圧
6. 新社会人
7. パスワード
8. 気
9. 威厳
10. ちんちんかかも
11. 衝動買い
12. プライド
13. ぐっすり
14. ヘそくり
15. 激辛
16. ちょっかい
17. ゴミ捨て
18. 誰かいた気が
19. 月が綺麗ですね
20. ストレス発散
21. 忘却
22. 労働のシステム

【新婚編】

1. 結婚報告
2. 残暑
3. クレッシェンド
4. ワープロ
5. 愛を囁く日
6. とどのつまり
7. 朝食
8. 処分
9. 仁義無き戦い
10. 幸せ太り
11. ダイエット
12. 湯水
13. お金の話
14. アルバイト
15. 世界トイレデー
16. 加湿器
17. 洗濯間違い
18. 静電気
19. 孫はまだか
20. アラーム
21. 喫茶店
22. 輪廻
23. 運命

「あ、こんにちは」

「どうも」

「怪しい影が私のテリトリーに座りこんでいると思ったら、あなたでしたか」

「なんだその言い方。いつからこの場所は君のものになったんだよ」

「休みの日だっていうのに来てたんですね」

「散歩だよ散歩。休日だからって家でごろごろしてたら不健康でしょ。君のほうこそ、いつも来てるよね」

「偵察ですよ偵察。私の縄張りを誰かが荒らしていないか見に来ただけです」

「君は僕と違う世界に生きてる気がする。夜な夜な田畑を荒らしたりとかしてない？」

「タヌキかなんかですか私は。そんな野性味のある生活してませんよ」

「普段何してるの？ 別に興味があるわけじゃないから答えなくてもいいけど」

「パラレルメーカーで仕事してます」

「アパレルメーカーね。一瞬何を並列製造してるのかと……。そっか、なんか予想外だけど、言われてみればアパレル関係って感じもするかも」

「ところでアパレルってなんですか？」

「知らないで使うな」

「白い粉を売りさばいたり、借金の取り立てをしたり、詐欺を裏で取り仕切ったりする自由業の」

「それは暴れる関係の人たちだ。アパレルは衣装って意味だよ。服とかアクセサリーをデザインしたり売ったりする仕事のこと」

「あーじゃあ私の職場と違いますね」

「違うのかよ」

「響きが良いので使ってみただけです。具体的な意味は今知りましたが、アパレル関係の仕事をしてますってだけで、どこかオシャレな女性って感じしませんか？」

「気取るくらいなら間違えるな。あとオシャレな女性は外出着にジャージなんて選ばない」

「ワンピースやフリルスカートじゃ走りにくいでしょう？」

「ここまで走ってきてるの？」

「もしかしたら走るかもしれないじゃないですか。野良犬とかあなたに追いかけられる可能性もなきにしもあらず」

「僕は野良犬と同じ扱いか。素直にオシャレはめんどくさいって言えばいいのに」

「あなたとお話するためだけにオシャレするのめんどくさいです」

「素直すぎる」

「こんにちは」

「はい……っと、え？」

「オシャレしてみましたけど、どうですか？」

「お、おう。顔見るまで誰か分からなかったよ。突然どうしたの？ 何か良いことでもあった？」

「……昨日あなたにもっと服装に気を使えと言われたので。気を使ってみたんです」

「いや僕はそんなこと一言も言ってないと思う」

「そういうニュアンスでした。オシャレしたら今よりもっと綺麗になれるのに、みたいな」

「なんか強烈なフィルターがかまされてる」

「あの、せっかくオシャレしたので今夜は外食しようと思うんですけど、美味しいお店知りませんか？ この街に来てからまだ日が浅いんです、私」

「橋渡ってすぐのところにそれなりな味のラーメン屋があるけど」

「……美味しくてオシャレなお店、知りませんか？」

「そんなの僕にきかないでくれ。普段そういうお店行かないから分からない」

「彼女とデートしないんですか？」

「彼女なんていないし、そもそもそんなのがいたら君とこうして話してない」

「やっぱり」

「やっぱりってなんだこら。なかば察してたならわざわざ質問するな」

「はっきり分かって安心しました」

「他人の不幸を喜ぶな。そういう君は彼氏いそうだね。僕なんかと話してていいの？」

「特定の人間を愛そうと思ったことはありません。私は世界の恋人ですから」

「変人の間違いじゃなくて？　ともかく、僕はオシャレなお店とか知らないから、ケータイのナビでも使って調べてくれ」

「こういうときは女の子の手を取って、美味しいお店を探してあげるのがセオリーでは？　そんなことだから彼女の一人もできないんですよ」

「巨大なお世話だ。君は僕のなんなの？　お母さんのの？」

「お母さんはさすがに無理ですが、一緒にお店を探してくれるなら今だけあなたの彼女になることもやぶさかではありません」

「なんだその上から目線」

「では、今だけ私の彼氏になってくれませんか？」

「会って一週間もしない人間と付き合えるか。お互いのこと何も知らないのに」

「今どき珍しいムッツリスケベさんですね」

「勝手に決めつけるな」

「この世にはスケベとムッツリスケベしかいないと母が言ってました」

「.....君もそう思うなら、そんな簡単に恋人作ろうとしちゃダメだよ」

「では案内だけでもお願いします。さっきも言った通り、最近この街に来たばかりで知り合いと呼べる知り合いがあなたしかいないんです。それにあなたが隣にいてくれたら、きっと私の存在が際立ちます」

「帰れ」

「すみません、遅くなりました。会議が予定より長引いてしまって……まさかずっと待っていてくれたんですか？」

「いや、いろいろ考え事してただけ。だから気にしないでいいよ。今日は来ないのかなとは思った」

「心配してくれたんですか？」

「そこまでじゃないって」

「足元の草全部抜けてますけど、それは……？」

「余計なことに気づかなくていい。無意識だ」

「ふふ、じゃあ連絡先交換しましょう。急な予定変更のとき以外でも、いざというとき頼りになる人がいれば困りませんし」

「それもそうだね。赤外線通信できる？」

「できます。じゃあ私は受信するので送信してください」

「了解」

「初めての共同作業ですね」

「変な言い方しないで」

「あ、そこじゃなくてここです」

「ここ？」

「もうちょっと右……そう、そこです。ゆっくり来てください」

「何をだ」

「ん……キてます、あなたのデータ……あと少しで全部――」

「ねえ赤外線通信してるんだよね？ さっきからセリフおかしくない？」

「そう感じるとしたら、それはあなた自身の煩悩に由来するものです」

「……釈然としない」

「はい、じゅせ……受信完了」

「なんか今言いかけなかった？」

「気のせいでしょう。では家族フォルダに登録しておきますね」

「いろいろと気が早い。そこは普通に友人フォルダとかにしとけ」

「新しく彼氏フォルダでも作りましょうか」

「それは存在すること自体間違ってる」

「早速メール送ります。後で電話もかけるので、私のはそれで登録してください」

「わかった」

「こういうとき変なメルアドだと恥ずかしいですよ。前の恋人の名前が入ってたりとかポエムっぽかったりとか妙に凝ってたりとか。その点あなたのは普通で安心しました」

「仕事でもよく使うから。君のは……おい、なんで僕の名前入ってるんだ」

「昨日変更しました」

「修正しろ。なんで親しくもない人間の名前埋め込むんだよ。勘違いされるだろ」

「私は別に構いません」

「僕が恥ずかしいの」

「安心してください。仕事ではフリーメール使ってますから。家族以外に私のメルアドを知ってる人なんていません」

「別の意味で不安だ」

「河川敷に変なハンドルの自転車がいっぱい止まっていますね。近所の中学生でしょうか」

「カマキリハンドルってやつか。中学のときみんなやってたな。ママチャリであれば正直見栄張ってるようにしか見えなかった」

「そういうあなたはどんな見栄の張り方してたんですか？」

「見栄張ってたことは確定なんだな」

「中学高校時代は誰しも背伸びしたくなるものです。で、どんな？」

「言わなきゃいけない流れなのか。うーん、まあ周りがやってないようなことしてたよ。周りと同じように」

「コーヒーをブラックで飲んだり洋楽を聞いたりですか」

「そういうのはなかったけど、元素周期表覚えたりやたら難しい言い回しを使おうとしたりは、したかな。女子はどんな感じなの？」

「女の子の場合は見栄を張るというより、目立ちたがりますね。霊が見えると言ったり、一人称を『僕』にしたり。目立つこととは別ですが、したこともない恋愛の詩を作ったりとか」

「ふーん、君もそういうことしてた？」

「靈感設定と詩作は……一時期」

「うわぁ」

「引かないでください。父の書斎にあった本をざっと読んで、読書家気分浸ったりとか、しましたねえ」

「そういうのは自分の中だけで完結させてればいいんだろうけど、人前で語ると」

「それはもうたくさん恥をかいています」

「恥だけなら今もかいてるけど」

「でも私にとって読書だけは中二病じゃないと思います」

「なんで？」

「今も続けているからですよ。例えばの話、コーヒーの味をわかったつもりで格好つけていた少年が、その後研鑽を積みコーヒー専門店を開いたとしたら？」

「ああ、そうなると中二病って一言で片付けられなくなる感じがするね。原点というかなんというか」

「洋楽を聞いて優越感に浸っていた少年が、その後研鑽を積み音楽評論家になったとしたら？」

「評論家かよ。バンド組むとかじゃなくて」

「元素周期表暗記にしても、あなたが今科学者になっていたとしたら、決して中二病ではないわけですよ」

「実際はしがない社会人だから」

「現在の力になっていない過去の虚栄になってしまうわけです。プロフェッショナルならば馬鹿にされないってことです、要するに」

「大雑把に言えばそうなるのか」

「右腕の悪魔を封じ込めるためという設定で包帯を巻いていた少年も、その後研鑽を積み新興宗教を立ち上げれば」

「それは中二病こじらせてるだけだ」

「いいえ、彼はプロになったのです。中二病のプロフェッショナルに」

「超馬鹿にされるってことか」

「入道雲が美味しそうです」

「ああ、もこもこしてるのを見るとそう思っちゃうよね。綿あめっぽいからかな」

「ソフトクリームっぽいからじゃないですか？」

「どっちでもいい」

「雲の形っていろんな見方ができて面白いですよ。あっちの雲は円いのが三つ重なっててミ
○キーみたいです。著作権侵害じゃないですか、あれ」

「地球訴えるのはさすがに無理だろ」

「あっちのは猫みたいです」

「ホントだ。あの出っ張りが足であれが尻尾で」

「いやそっちは尻尾ですよ」

「えー、足は普通あんなに長くないだろ」

「見方が違いますって。足がこうなって尻尾がこんな感じで」

「……うん、不毛な論争やめよう。指示語ばかりでわけわからん」

「それであの足の左側が手で」

「猫に手はない」

「猫の手も借りたいって言うじゃないですか」

「もういいよ。見え方や感想なんて人それぞれで」

「相対主義は甘えです。真理を求めようという姿勢がなによりも大切なんです」

「いきなりなんの説教だ。じゃあ君には雲の正しい見え方とかがわかるの？」

「もちろんです。私は雲検定三級持ってますから」

「適当言うな。どこの誰が何をどうやって評価して何の権限が与えられる資格なんだそれは」

「日本雲能力検定協会というのがあってですね」

「日本漢字能力検定協会みたいなやつ出てきたけども。そのまんま過ぎるだろ。なんだ雲能力って」

「霊能力みたいなものです」

「超常現象レベルなのか」

「雲検三級は雲の写真を見せられて何に見えるかを判断します」

「ただのロールシャッハテストじゃんか」

「その回答を分析することによって回答者の思考過程を明らかにします」

「ただのロールシャッハテストだった」

「三級ですから」

「精神分析してもらっただけだろ君。権威の欠片もない資格だな」

「実技が入るのは雲検準二級からです」

「雲に関する実技ってなんだ」

「雲の動きから三日後の天気を予測します」

「素直に気象予報士の資格を取れ」

「本物の雲能力者にとってはこの程度朝飯前ですよ。二級からはいよいよ雲の中に突っ込みます」

「いよいよ意味がわからなくなってきた」

「雲能力があれば雲から落ちることはありません。逆に言えば、雲から落ちて死んでしまう人間は本物の雲能力者ではありません」

「魔女裁判みたいな試験方法やめろ」

アイス

「アイスの美味しい季節ですね。甘いもの好きですか？」

「うん。コンビニ行くとついつい財布の紐ゆるめちゃうくらいには、好きかな。カップアイスをよく買う」

「私は棒つきアイスですね。ス〇カバーとかガ〇ガリくんとかうま〇棒とか。カップアイスも好きといえば好きなんですけど、フタの裏に付着したアイスがどうしても気になってしまって……。人前だと舐めにくいじゃないですか、あれ」

「舐めないよ普通」

「えっ、舐めますよ。あそこに付いてるのが一番美味しいんですが」

「誰に聞いたんだそんな話。品がないっていうか意地汚い」

「そうなんですよねえ。前からあれを上品に舐める方法の開発を進めてるんですが、いまいち良いのが思いつかなくて」

「フタ舐める時点で上品じゃないと思う」

「今まで試した中で一番上品なのは『隣にいる人に舐めさせる』でした」

「それ上品違う」

「指ですくうとか溶かして舌に垂らすとか他にもいろいろやってみるんですが、いまいちしっくりきません」

「その熱意をもっと別なところに向けろよ」

「舐め方っていうのはいろいろ応用が利くと思うんですけどねえ」

「何に？」

「言わせないでください、変態ですか」

「理不尽」

「ピースで分かれてるやつもありますよね。ピ○とか雪○大福とか」

「唐突に話題を戻された……。気分が向いたらたまに買う。購入目的が違うんだよ、あれらは」

「どういうことですか？」

「涼を得るために買うか、アイスそのものを食べたくて買うか違いだよ。暑い日に食べるなら安く涼しくなれるほうがいいじゃん」

「えー、なんだか考え方が貧乏くさいです」

「フタの裏舐めるやつに言われたくないよ」

「タマゴアイスとかチューチューアイスはどうです？」

「タマゴアイス？」

「知りません？ おっぱいみたいな形で、突起部分を切って吸うと中からミルクアイスが出てくるんです」

「わかった、あれか。でもその説明だとすごく変態的な商品に聞こえる」

「ゴム製の容器で出来てるので、最後のほうは気をつけないと溶けたミルクアイスが一気に放出されて、ムグウってなって飲みきれず咳き込んでしまうんですよね」

「すごく変態的な商品に聞こえる」

由来

「『デマ』って言葉があるじゃないですか」

「うん」

「私ずっとあれを『口から出任せ』のデマだと思ってたんですけど、本当はドイツ語のデマゴギーから来てたんですね」

「へえ、そうなんだ」

「私に『口から出任せ』説を教えた人は反省してほしいです。よくもこんなデマを！」

「意味的には通じてるから別にいいんじゃないか？」

「口から出任せは偶然当たってる可能性があるじゃないですか。デマゴギーは事実と反する流言ですから、全然違います」

「君に教えた人もデマを掴まされてたのかもしれないだろ」

「そうだとすると、他人に何か教えるときはちゃんと自分で調べるべきです」

「人のこと言えるのか君……。そういえばサボるとかも外国語由来だよね。サボタージュの略だっけ」

「あれは私、『惰眠をむさぼる』の略だと思ってました」

「勘違い多いなあ」

「高校時代、誰かがサボろうぜーとか言ったらお昼寝しに行くんだなあと」

「バカだったんだね」

「意外なところでバスですね。あれは乗り合い自動車って意味の、オムニバスの略なんです」

「乗り物のバスのこと？ それは初耳だ」

「私も調べるまではバスケットカーを縮めてバスだとばかり」

「無駄にそれっぽい誤解を……」

「バスってつくものはだいたいバスケットに由来すると思ってたんです。バスタブとかブラックバスとか」

「綴り違うし。ブラックバスケットってなんだよ。もはや魚じゃないだろ」

「バスケットボールとか」

「入れ子にするな。バスケットケットボールってなんだよ」

「本当は全てのバスはオムニバスの略だったんですね」

「なんでそうなる。オムニバス由来は乗り物だけだよ、たぶん」

「ブラックオムニバス、みたいな宝石あるじゃないですか」

「ブラックオニキスは関係ない。大して似てないし」

「オムニバスケットボールは面白そうです。ボール二つとか三つ使ってプレイする感じ？」

「疲れるよ」

「トロリーバスをトロリーオムニバスって言い換えると、ちょっと美味しそう」

「半熟オムライスみたいな……何の話してたんだっけ？」

七夕

「今日は七夕ですね」

「ああ、そういえば七月七日か」

「織姫と彦星がカササギの橋を渡って、一年に一度だけ会うことができるんですって」

「そんな話もあったね」

「しかし考えてみるとアルタイルとベガって、14.5光年くらい離れてるんですよね。つまり」

「光の速度で渡っても全然時間足りないとか言わないで。なんでもかんでも科学的に考えたら夢がなくなる」

「とは言っても二十一世紀ですし、織姫と彦星もたぶん科学の力に助けられてますよ。電話したりスカイプしたり」

「それはそれで夢がない」

「あ、そういえば14.5光年離れてるんです。相手の返事は十四年半待たないと」

「一年に一度だったのがさらに夢になるとか」

「彦星は待ってくれるかもしれませんが、織姫はさすがに本命乗り換えるでしょうね」

「いや織姫も待ってくれるって。さっきからなんで斜に構えたことばかり言うの？ 中学生なの？」

「あなたが夢見すぎなんです。女性の視点から見るとそう思っちゃうんです。男性だって浮気するでしょう？」

「.....しないとは言い切れないけどさ」

「ちなみに織姫星ベガのそばには小さな星が二つあります」

「おい」

「お供の星だなんて言われてますけど、実際どうだか」

「織姫になんか恨みでもあるの？」

「彦星アルタイルのそばにも小さな星が二つあります。でもこっちは牛って話ですから、ギリギリ浮気にはなりませんね」

「ギリギリなのか」

「彦星だって一年に一度じゃさすがに可哀想ですし。せめて牛くらいなら、ね」

「ね、じゃない。何を想像させてくれてんだ。七夕の美談がすごい勢いで汚されてくんだけど」

「元々そんな美談じゃないです。だって彦星、川で水浴びしてた織姫の服を隠して無理矢理ものにしちゃうんですよ？」

「え、そんな話だったの？ それは確かに良くないというか」

「ですから個人的には彦星のほうが嫌いです。織姫もなんでそんな最低野郎と一年に一度でも会いたいと思えるのか不思議でなりません」

「う、うん、そうだね」

「一年に一度は欲しくなるくらいよかったんですかね、彦星の彦星が」

「君の発想が最低だ」

「たぶん相当したたかな女ですよ織姫。まあ、ある意味お似合いのカップルかもしれません。今夜二人が無事に会えると良いですね」

「雨降らないかな」

「こうして川辺にいます思い出しますね」

「何を？」

「小さい頃、川で河童を見たことがあるんです」

「カッパ.....雨の日に着るビニールの？」

「そんなの今でも見ますよ。妖怪のほうです」

「河童？ 何かと見間違えたんだろ」

「あなたもそういう反応するんですね。まあ昔から誰に言っても最初は信じてもらえないんですが。でも説明すると最後はみんな信じてくれます」

「へえ。どんなやつだったの？」

「頭のとっぺんがツルツルで、お腹が出てました」

「それだとわりとどこにでもいるおっさんなんだけど。体の色は？ 甲羅背負ってた？」

「肌は人間と同じ色で甲羅は背負ってませんでした」

「おっさんだね、普通の」

「でもキュウリ食べてましたし、全裸でしたし」

「てっぺんハゲのおっさんが川で水浴びしてキュウリ食ってただけじゃないかな？」

「そこまで完璧に揃いますかね？ それに『おれは河童だ』って言ってましたよ」

「自称かよ。え、しゃべったの？」

「はい。あのとき初めてお父さん以外の大人の男性器というものを間近で見ました」

「あれ、君かなり危機的状況だったんじゃない？ 何歳の頃の話？」

「小学生の頃です。襲ってはこなかったの、たぶん紳士な河童さんだったんです」

「露出狂がアホな子供騙してただけじゃないか？」

「河童さんを変態みたいに言わないでください」

「いや変態みたいじゃなくて変態だろ、全裸の時点で。ホントに話しただけ？」

「話しただけです。今の私とあなたみたいに。内容は世の中の不条理と人生の難しさについてでしたが」

「借金取りに身ぐるみ剥がれたハゲのおっさんが近所の畑から盗んだキュウリ食って川で水浴びしてただけじゃないかな」

「あの河童さんとした会話が、私の現在の価値観のルーツとなっているのかもしれませんが」

「嫌なルーツだ……」

「そうですか？ 河童の教えを受けるなんて、なかなかない経験ですよ？」

「君が過去を美化してるだけな気がしてきた。それで、その河童とはそれ以来会わなかったの？」

「毎日川のそばを通るたびに話してましたけど、ある日台風が来てそれきり見なくなりました。でもあの人は河童ですから、台風くらいへっちゃらですよ」

「……うん、そうだね。河童なら大丈夫」

「なんかこの土手、だいぶ草が伸びてきましたね」

「そろそろ草刈りしてもらわないと周りがチクチクするね。それまで踏みならして我慢かな」

「私とあなたが毎日座ってるところだけは地面が露出してますね、ふふ」

「なんだよ」

「いえ、こういうのって良いなあと思ひまして。二人が毎日ここで話してる証拠です」

「.....」

「これであなたが死んだらより感動的なものに」

「勝手に殺すな。なんでそういう方向に妄想膨らますんだ」

「悲劇のヒロイン願望があるんです」

「いっそその妄想力を活かして恋愛小説でも書けば？」

「それは名案です。私ならベストセラー間違いなしですね」

「だといいね」

「――愛し合っているけれど互いに素直な気持ちを打ち明けられない二人の男女。しかしそんなある日、彼のほうが突然死んでしまうのです.....」

「なんかありきたりだな」

「悲しみに暮れる彼女は、偶然彼が残した日記を発見します。そこには彼女が知らなかった彼の気持ちが綴られていたのです」

「うーん、感動はするだろうけど、人の死をスパイスに使うってどうなの？」

「ノンフィクションなら問題ありません」

「問題あるよ。主に僕が」

「あなたが突然死んだりしたらそうやってネタにしてあげます」

「最低だ。日記のくだりとか明らかに捏造だし」

「愛し合っている部分は捏造ではない、と」

「.....捏造だ」

「まあ、それが嫌なら突然いなくなったりしないでくださいね」

「しないよ。君にだけおいしい思いさせたくないし」

「そうですね。そんないい思いができるほど人気が出たら続編を」

「ノンフィクションで続編を出すな」

「二巻では別の男性と付き合います。悲しみを乗り越えた彼女の幸せな日々が描かれることになるでしょう」

「一巻の感動が台無しだ。悲劇は悲劇のまま終わらないとダメじゃないかな？」

「大丈夫です。その男性も最後は死んじゃうので」

「もう確実に君が殺してるだろ。恋愛小説の皮を被ったミステリーだろ」

「ノンフィクションミステリーって新しいです。これも人気が出たら三巻を」

「今のうちに通報しといたほうがいいかな」

そうめん

「突然こんなことを言うとまた邪推されるかもしれませんが、夕ごはん、うちに食べに来ませんか？」

「え、ご馳走してくれるの？」

「そんな大盤振る舞いをするというわけではありませんが。夏なのでネット通販で安売りしてたそうめんを大量に買い込んだんです」

「ああ、安くていいよね。作るのに手間もかからないし、僕も最近よくお世話になる」

「でも予想外にまずくて」

「は？ そうめんが？」

「はい。もっとツルツルしてるのを食べたかったのに、クタクタでベタっとしてて……」

「それは安いのを買ったら仕方ない。美味しいのがよきゃ、高いけど手延べそうめん買いなよ」

「私はもっとシコシコしてる麺が食べたかったのに」

「そもそもそうめんにそんな歯ごたえ求めるな」

「私はもっとシコってるそうめんを食べたかったのに」

「わざわざ言い直すな。じゃあなに、それを早く消費するために僕を家に呼ぶと？」

「不服ですか、そうめん処理係」

「その係名やめろ。そうめんなんて僕んちでも有り余ってるし。しかも安いやつ」

「あなたなら私よりは美味しく作れるでしょう？」

「というか茹で加減さえ気をつければ、そこまで不味くなるような料理じゃないと思う」

「私にはそうめんを不味く作る才能があるようです」

「逆に稀有な才だな」

「指定されてる茹で時間ぴったりで作るといつもクタクタで」

「自分で調整しろよ」

「でも不味いそうめんも、誰かと話しながら食べたらおいしいかなあと」

「.....わかったよ。なら、せめてツユだけでも美味しくしよう。家で準備してくるから、先に帰って待ってて」

「わあい、じゃあせっかくですから流しそうめんしましょう」

「めんどくさいこと考えなくていい。だいいち竹のコースなきゃ無理だし、そんなの設置する場所もないだろ」

「牛乳パックを半分に切ってシンクからお風呂まで繋げれば」

「貧乏臭いってレベルじゃない」

「これがホントの流しそうめんですね、シンクだけに」

「うまくないよ」

「そういえばこの間あなたの家に行ったとき、日記帳を見つけたんですが」

「え、あれ読んだの？」

「読んでません。そんな勝手なことしませんよ。数ヶ月ほど前から止まってるみたいでしたし」

「読んだよね？」

「読んでません。パラッとめくっただけです。どうしてやめちゃったんですか？」

「君みたいなやつに見られたくないからだよ」

「あれですか、社会人生活が始まるときノリで日記をつけ始めてみたものの、忙しくなるにつれてだんだんやる気がなくなっていき、とうとう放置してしまったと」

「……そこまで予想つくなら訊くな」

「最初は毎日書いてたのに、後半に行くにつれて頻度が落ちていきましたから」

「読んだよね？」

「読んでません。チラッと見えただけです。それにしてももったいない。せっかくあなたの赤裸々な日々が覗けると思っていたのに……」

「やめてよかった。続けてたら一体どんな恥ずかしいこと書いてたか」

「読みたかったです。私のことが書いてある日記とか。また再開したらどうです？ 文章はそれっぽく書けてましたよ？」

「読んだよね？」

「読んでません。日記が嫌ならブログを開設してみるとか」

「不特定多数に見られるなんてもっと嫌だ」

「あなたが書かないなら、私が書きます。あなたの目線で」

「なりすましだそれは！」

「ペンネームでやるので、なりすましにはなりません。『女もすなるブログといふものを、男もしてみむとてするなり』」

「紀貫之か。ネナベするなよ」

「ちゃんとあなたの気持ちになって書きますから」

「嘘つけ。そもそも需要ないだろ。どこの誰とも知らない野郎の色恋沙汰とか」

「それが真なら世のラブコメはとっくに廃れてますよ。要はヒロインの可愛さをしっかりアピールできれば良いわけです」

「他人を装って自分を誉めまくるとか虚しいってレベルじゃないんだけど」

「『彼女と目が合った瞬間、僕の中で何かが狂ってしまいました。もしかしたら、あれが運命の出会いというやつだったのかもしれませんが』」

「確かに狂った。女性に対するイメージとか」

「『今日、初めて彼女が僕の部屋に訪ねてきました。絶対に手は出さないと堅く誓っていましたが、彼女の無防備な姿に別の部位が堅くなって』」

「唐突に下ネタを挟むな」

「『彼女のことが本当は好きで好きでたまりません。今すぐ僕のものにしたいけれど、嫌われるのが恐いです』」

「あらかじめ『このブログはフィクションです』って、ちゃんと断り入れといてね」

「『フィクションと取るかノンフィクションと取るかは読む方の自由です』」

「それっぽい逃げ方するな」

「純朴な青年が語る不器用な恋——絶対人気出ますよ。上手くいけばアフィリエイトでガッポガッポかもしれません」

「全然純朴じゃない」

トウモロコシ

「今日はなにやら美味しそうなものを携えてきましたね。なんですか？」

「実家で取れたトウモロコシ。お盆に帰省したときにもらったから、一緒に食べようと思ってね、茹でて持ってきた。はい」

「ほほー、トウモロコシってこんな良い色になるんですねえ。まさに陸の黄金。さっそくいただきます」

「うん、甘くて美味しい」

「あなたはかぶりつく派ですか」

「え、普通そうだろ……って、君の食べ方こそどうなってんの？」

「粒を一つ一つ手で剥いてるんです。これなら歯に挟まりませんし、上品でしょう？」

「どこが。トウモロコシに手垢付くじゃん」

「手の表面から出るアミノ酸が、トウモロコシの味を一層引き立ててくれるんです」

「その説明気持ち悪いだけなんだけど」

「気持ち悪いかどうかは剥く人次第でしょう。食べますか？　可愛い女の子の手から出たアミノ酸付きトウモロコシ」

「僕を性的倒錯の道に引きずり込もうとするな。あと君はもう女の子って歳じゃない。痛い」

「二十代前半はまだ女の子を名乗っていいはずですよ。ほら、かぶりつくより美味しくないですか？」

「……少しだけ君の手の味がするかもしれない」

「あ、そういえばさっきトイレ行って手洗いしてませんでした」

「おい！」

「冗談ですよ」

「その一言があれば万事解決だとでも思ってるのか。上品云々言ってたのはどこのどいつだ」

「そもそもトウモロコシ自体、あまり上品な食べ物じゃないですからねえ」

「は？　なんで？」

「だって消化悪いせいですごいトッピングされちゃいますもん、便が」

「やめろ」

「あれを見るとなぜかすごく後悔しません？　トウモロコシなんて食べなきゃ良かったと」

「じゃあ君もう食べなくていいよ。そして帰れ」

「でも美味しいので食べちゃいます。あなたも最初からそれが狙いだったのでは？」

「何が？」

「可愛い女の子にトウモロコシを食べさせて翌朝の糞便を想像するという」

「そんなに僕を性倒錯者にしたいのか」

「最低です」

「君の精神構造がね」

「出ました」

「何？ 出し抜けに」

「そこは昨日の会話から察してほしいんですけど……コーン入りの」

「報告しなくていい！ っていうかその話題引っ張るなよ！」

「でもお通じは健康管理の指標としてとても大切な情報なんですよ？」

「ＴＰＯ考えろって言ってるんだけど」

「いやいや、ご飯を食べてるときこそ考えてみるべきです。目の前の素材を合成することで一体どんなアイテムを得られるか」

「その比喩やめろ。どんなもくそもないだろうが」

「クソはあります」

「やかましい」

「でも言ってしまうえば人体って合成機械じゃないですか。ちゃんとトイレで生成されたアイテムを観察し、どの素材同士を混ぜ合わせれば良質なものが生み出せるか知ること、勇者として成長していくんです」

「……でもそう言う君は日頃カップラーメンとかレトルト食品しか食べてないんだよね？」

「はい、素材自体が手に入らないというのが問題なんですよねぇ」

「まず手に入れようって努力をしてないだろ」

「良い素材屋を見つけようという努力はしてます。あなた、私の素材屋になってくれませんか？
あなたとなら毎日良質なアイテムを合成できそうな気がするんです」

「毎日味噌汁作ってくれの最低バージョンか」

「そしたら毎日SNSにアップしましょう」

「.....素材をだよね？」

「素材とアイテム両方です。これらを合成したらこれが出たと」

「即ブロック即通報」

「えー、有用な情報じゃないですか。Wikiにまとめるのも良いかもしれません」

「何の攻略サイトだ」

「ただ問題は、アイテムの質を客観的に判断するのが難しいということ.....。TOTOさんあたりが作ってくれませんか？ 排泄物を分析してランク付けしてくれるシステム」

「要望出せば？ たぶん相手にされないけど」

「ネットランキングに参加できれば、健康や食事に対する意識が上がること間違いなしです。素材のみならず、合成機械の調子自体も良くする必要があるわけですから」

「.....案外ゲーム性はあるかもね」

「まあ結局、多くのオンラインゲームと同様にお金をかけられる人間が上位になるんですけどね」

「見も蓋もない結論」

「最近同僚の恋ばなをよく耳にするんですけど、それと比べると私たちっておかしいと思うんです」

「おかしい？ 関係がってこと？」

「はい。普通大人の男女が二人仲良くお泊まりするところまでいったら、肉体関係もいくところまで行って当然じゃないですか」

「そうかなあ。考えるより先に体が動いちゃうとか、ちょっとどうなのって思うよ」

「そんなことだからあなたは、いえ、なんでもないです」

「言いかけてやめるな」

「一目惚れで告白してキスってカップルもいるんですよ？」

「よそはよそだ」

「一目惚れでセックスしてから告白ってカップルもいるんですよ？」

「世も末だな」

「セミだって出会って即行ですよ」

「人間以外を引き合いに出すな。あいつら大人になって一週間しか生きられないんだから」

「ちなみに電話して聞いたところ、お母さんはお父さんと付き合って半年ほどでチョメチョメしていたそうです」

「なに聞いてんだ。だったら僕らはまだ半年も経ってないし」

「二人で話した時間は引けをとらないはずですよ。毎日手は繋いでるわけですし。なのにファーストキスもまだ先って、健全というより不自然では？」

「いいじゃん。いかにもほのぼのゆるふわな感じで」

「ほのぼのとへたれは違いますが」

「なかなかクリティカルな一撃を放ってくれるね。でも別にへたれてるわけじゃないから。いろんなことを考えた末の結論だから」

「チョメチョメとはいかないまでも、キスくらいならしてくれたってバチ当たらないと思いませんか？」

「一線越えたらトントン拍子に進展しそうで嫌だ。自分の中で抑圧してたりミッターが外れるとうか」

「ふ、それが大人になるってことですよ」

「君に知った風な口叩かれるとすげえ腹立つ」

「ではあまり恥ずかしくないところから始めましょう。頬っぺたにキスならどうですか？」

「恥ずかしさ以前にそういう雰囲気にならないからなあ。最近なんてウンコのことしか話してないし」

「ああ、そういうときこそ私の唇を塞げばいいんですよ。少し怒りながら壁をドンと叩いて、『俺の前でウンコの話するな！』って」

「本当にやめてくれ」

休日

「休日って何してます？」

「え、なんでそんなこと聞くの？」

「質問に質問で返さないでください。答えられないなんて、いったいどんな恥ずかしい趣味をお持ちで？」

「持ってないよ。勝手に決めつけるな」

「休日の過ごし方を訊かれて答えられない人間は、オタクか変態か犯罪者か、周囲に内緒で小説を書いているネクラと相場が決まっています」

「どこの相場だ。そして最後のやつに自虐を感じた」

「違うというなら、何してるんですか？」

「一般的な過ごし方だと思うけど。本読んだりテレビ見たりネットしたり……考えてみるとあんまり外へ出かけないな。特定の趣味もないし。そういう君は？」

「私はショッピングしたり、本屋に行ったり、スイーツ専門店に行ったり、スポーツセンターに行ったり、街を練り歩きます」

「え、なんか予想外にアクティブ。見栄はってない？ 君って家でゴロゴロしてる系女子じゃなかったっけ？」

「私は活発人間、あなたはインドア人間だったでしょう？ 起きてネットして昼食食べて昼寝してネットして夕飯食べてネットして寝る感じの」

「うーん、だいたい間違っていないから言い返せない。こうしてみると墮落を極めてるな。これが庶民とブルジョワの格差か」

「お財布のせいにしないでください。私だってお金持ちなわけじゃありません。むしろケチです」

「そうなんだ」

「ショッピングも基本は見て歩くだけです。本屋もめぼしいものを探す程度」

「なるほど、それならお金もかからないか」

「スイーツも店頭のサンプルを見つめる程度」

「ひもじいよ。周りは何事かと思うだろ」

「スポーツセンターも運動器具を見て歩く程度」

「何が楽しいんだそれ」

「汗を流すナイスミドルの筋肉を見て歩く程度」

「そういう趣味なの？ ごめんね、僕筋肉とかあんまりなくて」

「運動しましょうよ。一週間に一度、一時間くらいやるだけで今よりは体力つくと思います。別にスポーツセンターに行く必要はないです」

「確かに。自宅でも近くの公園でもいいしね」

「ホテルでだってできます」

「その運動は違う」

自由研究

「早いもので、そろそろ八月も終わりですね。小中学生の皆さんは宿題全部終わったんでしょうか」

「さすがにこの時期終わってない子はマズイよね。そういえば僕、生まれて初めて徹夜したのは『夏休みの自由研究を終わらせるため』だった気がする」

「案外だらしなかったんですね」

「昔の話だ」

「自由研究なんて一番楽しい宿題じゃないですか。嫌々やるからいつまでも手をつけられないんですよ。ちなみにどんなこと研究しました？」

「海水を蒸留して真水を作った」

「なるほど。で、その水の中で海水魚が生きられるかどうか実験」

「悪魔か。実験動物の扱いってかなり厳格な倫理規定に縛られてるんだぞ」

「えー、せっかく自由に研究できるのに、なんでそんな追試実験みたいなことだけで済ませちゃうんですか。もっと子供らしく無邪気な研究を」

「自由って倫理的な束縛から解放されてるって意味じゃないから。小学生にどんなレベルの研究させる気だ」

「新規性のない研究なんて研究じゃありません」

「大学生でも難しいことを……。そういう君はどんな研究したの？」

「『自由の定義について』」

「そこを突き詰めるのかよ」

「いろいろな人が使う自由という言葉进行分析し、時代ごとの使われ方や歴史との関わりをまとめた大作でした。理科学研究じゃないとかいう些末な理由で受け付けてもらえませんでしたけどね」

「だろうな」

「今思えば『思春期における自我形成の段階的特性』とかにしとけばよかったです。これなら自分自身を研究対象にできます」

「そんなの得意気に提出してくる生徒がいたら面倒くさいだろうな……。思春期とか夏休み中に終わらないし」

「それでいいんです。研究に終わりなんてありませんから」

「ドヤ顔やめろ」

「私なんて未だに思春期なんじゃないかと思うフシがあります」

「早く脱してくれ」

「まあ、あまり結果を重視せず、自分が疑問に思ったことや発見したことを純粹に突き詰めていくべきだと思いますよ。そのあたり、学校の先生方にはあまり縛りをきつくしないでいただきたいものです」

「それは確かにね。興味を持ったことに取り組むのが一番いい」

「あ、今のを題材に『現代教育の問題点～我が校を例に～』とか面白そうです」

「呼び出される」

彼女の誕生日

「.....あの、まだですか？」

「まだって？」

「そんな焦らさないでくださいよ。主役から言ったら意味ないでしょう」

「そういえば昨日からずっとそわそわしてて、変だよ？　いつも変だけど」

「いや.....その、そろそろかなあと」

「だから何が？」

「もう、いつまで意地悪する気ですか。いい加減しつこいですよ」

「さっぱりわからない。明日までに考えてくるから、今日はもう帰ろっか」

「.....まさか本当に知らないんですか？　今日が何の日か」

「別に何の日でも関係ないだろ」

「.....私の誕生日でも、ですか」

「あ、あー、なるほどね。ごめん、全然知らなかった。っていうか教えてくれなきゃわかるわけないだろ」

「わかるでしょう！　普通彼氏として彼女の誕生日くらい把握しとくのは当たり前でしょう！」

「そ、そうなの？　じゃあ君は僕の誕生日知ってるんだ」

「もちろんです！　5月3日！」

「違うよ。なんで自信満々に間違えられるんだ」

「あれ、おかしいですね。私の誕生日と相性抜群なのはその日なんですけど。ちなみにいつですか？」

「6月5日」

「おいしい」

「掠りもしてない。占いなんてアテにするな」

「でもその日は私と相性最悪ですね」

「占いすごい。まあとにかくおめでとう。二十五歳になったの？」

「はい」

「ふうん、何気に僕より一つ年上だったんだね」

「そうですね」

「そっか」

「それだけですか？」

「え、何？ まだ何かあるの？」

「普通ここはプレゼント的な何かがあっていいと思うんですが」

「いや、プレゼントって言っても今まで知らなかったわけだし、そんな急には」

「ないなら体で」

「山賊か」

「では明日か明後日には用意できるんですね？」

「生け贄系の昔話みたいだな。じゃあ、明日」

「誕生会まで開いてくれるんですか!？」

「有無を言わず未来を切り拓かないでくれ」

「お願いします。あなたの誕生日も盛大にお祝いするので、明日は私を盛大に祝ってください」

「来年までこうして一緒にいるとは限らないじゃん。占いの的には相性最悪なんだし」

「確かにそうかもしれませんね」

「納得するな」

「じゃあ一緒にいると仮定しましょう」

「もしもの話で約束取り付けられても……」

「一緒にいたら絶対お祝いします。忘れません」

「今僕の誕生日答えられる？」

「5月3日です！」

「……………」

「今日一日下着が前後逆だったことにさっき気づきました」

「ああ、下着だと気づきにくいからね。でもどうせ見えないし、別にいいんじゃない？」

「ずっと肩甲骨にブラジャーをしてたなんて……」

「ないよ。よほど寝ぼけてなきゃそんな間違いしないよ。気づかないとしたらどんだけ貧乳だよ」

「まあそれは冗談で、逆だったのはむろんパンティです。お風呂に入ろうとして気づきました。一日中違和感はあったんですけどね。まるでパンティを前後逆に穿いているような違和感が」

「鈍感以前に馬鹿だったなんて。……あれ、でも気づいたのがさっきってことは、今日一日トイレに行ってなかったってこと？」

「う、ちょっと便秘気味でして……。そういうことは普通、思っても言わないのがマナーというものですよ。特に女性に対しては」

「ごめん、女だって意識自体なかった」

「……それも言わないのがマナーというものですよ。全くデリカシーのない人です」

「それだけ親しい間柄ってことだ」

「男の人はいいですね。パンツが逆だったら穿いたままウンチできます」

「できないし君がその行為のどこに魅力を感じているのか全くわからない」

「なんだか男もののパンティ穿いてみたくなってきました」

「なんだ男もののパンティって。普通にパンツって言え」

「それだとズボンと区別つかないんですよ。男のパンティ、略してオパンティと呼ぶべきかと」

「なんか生ぬるいからやめろその呼び方」

「フランス人っぽいですね。メルロ・パンティ」

「謝れ」

「とにかく今度あなたのパンツ貸してください。親しい間柄でしょう？」

「パンツ貸す間柄って親しいとかいうレベルじゃないぞ。なんか変態っぽい」

「代わりに私のを貸しますから」

「それ僕が穿いたら完全に変態だろ。そもそも下着って共有するもんじゃないし」

「別に身につけるだけが下着の用途じゃありません。知らないんですか？」

「ごめんそれ以外の使い方僕は知らないし知りたくもない」

「清純派ですね。あなたウンチとかするんですか？」

「アイドルがされる最低な質問ベスト3やめろ」

「私はしませんよ」

「便秘だからね」

飲むヨーグルト

「最近、飲むヨーグルトにハマってます」

「ああ、少し高いけど美味しいよね、あれ」

「ジュースやアルコールと混ぜて飲むと最高に美味しいです」

「糖分摂りすぎないように注意しなよ。元から結構砂糖入ってるやつもあるからね」

「しかもこないだまで絶賛便秘中だったのに、飲むヨーグルトを飲むようになってからお通じがすごくよくて」

「飲むヨーグルトを飲むって、別に間違っていないけどなんか引っ掛かる言い方だな」

「飲んでしばらくしたらトイレに超特急で腸特急です。もう出るわ出るわですよ」

「仮にも女の子があんまり露骨な表現使うんじゃない。あとそれ、通じがいいっていうか腹下してない？ 賞味期限大丈夫？」

「おかげで最近体重が二キロ落ちました。ヨーグルトダイエットってやつですね」

「元々細身なのにさらに落としてどうする。しまいに死ぬぞ」

「もしかかも、飲むヨーグルトってヨーグルトじゃないですか」

「何言ってんだコイツ。ホントに大丈夫？ 意識はしっかりしてる？」

「ちゃんと最後まで聞いてください。ヨーグルトってことは、量が少なくなっても牛乳を足して放置しておけば」

「発酵してまた飲むヨーグルトが出来上がるって言いたいのか」

「ザッツライト！ この永続繁殖によって私は無限のリソースを手に入れ、ヨーグルト菌の千年王国を築くのです！」

「無理だろ。市販のやつは味とか調整してあるだろうし、種だって殺菌されてるから増えないと

思う」

「え、そうなんですか？　じゃあ私が今まで飲んでいたあれは一体……」

「ただの腐った牛乳だよそれ！　っていうかももう実行してたのかよ！」

「そ、そんなはずありません！　味はちゃんと飲むヨーグルトです。ほら」

「食中毒者を増やそうとするな。君の味覚ほど信用できないものないんだから。貧乏性発揮しないで普通に販売してるやつ買えばいいのに」

「あれが腐った牛乳……？　ちゃんとヨーグルトみたいに酸っぱかったのに」

「発酵と腐敗の違いってね、人類に有益な菌が分解したか有害な菌が分解したかの差らしいよ。あと知らなかったなら教えてあげるけど、腐りかけのものは基本酸っぱい風味があるよ」

「……ま、まあ、このところ少し太っちゃってたので、ダイエットとしてちょうど良かったかもしれないね」

「強がりなのか超ポジティブなのか」

「あなたもどうです？　腐った牛乳ダイエット」

「殺す気か」

「最近漢字をよく忘れるんです」

「ああ、僕もよくある」

「もう歳ですかね」

「まだ脳が劣化し始めるほど老いてないだろ。今はパソコンとかケータイで書くことのほうが多いからね。変換を勝手にやってくれるのは便利だけど、そのせいで思い出せなくなるっていうのはあるかも」

「寝る前に日記を付けてるんですけど、書いてる途中で詰まると面倒なんです」

「確かに」

「『うつ』ってどう書いたかなーって」

「『鬱』は書ける人の方が少ないだろ。あと日記書いててそんな字が出てくるって何があったの？」

「『鬱』じゃなくて『打』です」

「なんだ良かった……いや良くないや。その漢字が思い出せないのは重症だね」

「使わない能力は無くなっていくってことですよきっと。逆に言えば使えなくても問題ないと脳が判断してるんです」

「パソコンさえあれば大抵の作業が事足りるからね。でもそう思い込んでしまうのはダメな気がする」

「いざというときに正しい漢字が書けないと困りますもんね。ダイイングメッセージを残すときとか」

「うん、そうだね。でもいざってレベルじゃないからそれ」

「ぐう、犯人の名前を伝えなければ……あれ？ 『だいすけ』の『すけ』ってどう書いたっけ？

みたいな」

「カタカナで書けばいいのに」

「それだと大輔さんなのか大介さんなのか大助さんなのかわかりません」

「めんどくさい人間関係だな。まず誰がどのディスクなのか覚えるのに苦労しそうだ」

「パソコンを立ち上げている暇はなく、ケータイでちまちま文字を打つのも無理です」

「もう諦めればいいんじゃないかな。どうせ自分は助からないし」

「そんなとき、犯人の顔を撮影してその場で自宅のパソコンと同期。ダイイングメッセージだってフリック入力ですぐ残せます。そう、iPhoneならね」

「やめろ」

目の愛護デー

「今日は目の愛護デーです」

「10月10日を横にすると目に見えるからだってね」

「ということで目に優しいことをしなければなりません」

「ブルーベリー食えるとか？ 緑色を見るとかもいいって聞くね。あくまで疲れを取る程度の効力なんだろうけど」

「ところで今日の私の下着は緑です。見ますか？」

「見ないよ」

「目の保養になりますけど」

「意味が違う。それに下着とかは偶然見えるのがいいんだと思うよ、うん」

「なんかそういうのに妙なこだわりがある人って変態くさくてキモいです」

「そこまで言う？ 自分から振っておいて」

「目の愛護方法、他には？」

「目薬を点すとか.....ミドリンってやつが有名だけど」

「なるほど、視界を緑色にする薬ですか」

「ああそういうこと.....いや絶対違うだろ」

「この際もっと直接的に労りましょう。眼球を舐め合うとか」

「直接的過ぎる。そして変態くさいってレベルじゃない。あと雑菌とか入って逆に目に悪そう」

「そもそも目の愛護って、なんだか私たちが日頃から目を虐待してるような言い方です」

「実際そうだと思うよ。パソコンの画面一日中見つめてる人だっているだろうし」

「それは誰に対する嫌味ですか？」

「邪推するな」

「しかし目を虐待してる人が多いとなると、目の愛護団体が出てきてもおかしくないですね」

「動物愛護団体じゃあるまいし。何をするんだよそいつらは」

「目に悪い行為をしていると高速船で体当たりしてきます」

「危ないし何がしたいんだ」

「SeaShepherdならぬSeeShepherdですね」

「それが言いたかっただけか」

小さな秋見つけた

「あ、焼き芋屋さん」

「もうそういう季節だね」

「小さい秋見つけたってやつですね。どんなときに秋がきたって感じますか？」

「玄関の戸が縮んで開きやすくなったときかな。あと秋刀魚がスーパーで推され始めると秋になった気がするよ」

「私は便座が冷たくなると秋の到来を感じます」

「いきなり何を言い出すのか」

「びっくりしますよね、温かいと思って座ったら逆に冷たかったとき。ひゃんっ、てなります」

「なんでちょっと可愛い感じにアピールしたの？ 便座に腰掛けた時の話だよな？」

「あと意図せずウォシュレットを発動させてしまったときとか、驚きますよね」

「うちウォシュレットとか高級なもの付いてないから、その恐れはないな」

「子供のとき間違ってやってしまって泣きました。妖怪垢舐めが出たかと」

「垢舐めって便所に出没するような妖怪だっけ？」

「妖怪糞舐めが出たかと」

「勝手に最低な亜種を生み出すな」

「あのときは貞操の危機すら覚えました」

「そんな危機を覚える子供ってなんかヤだな」

「今ではウォシュレットもやみつきになりましたけどな」

「それもなんか嫌だ。というか秋の話をしようとしてたんじゃなかったの？」

「そうでした。それで便座のヒーターを使うのは電気代が勿体ないと思って、便座カバーを買ったんです」

「うん、もう少し戻ってほしかったかな。どんだけトイレの話がしたいの？」

「驚きましたね。カバー一枚であんなに座り心地が違うとは。ただO型とU型があってですね、間違えて買ってしまったU型をあなたにあげます」

「このために秋の話をしたの？　ありがたいけど釈然としない。それにうちもたぶんO型なんだけど」

「じゃあ最近寒くなってきましたから、マフラーとして使ってください」

「使わないよ！　勝手に首に巻き付けるなよ！　構造的にも世間体的にもあり得ないよ！」

「仕方ないですね。じゃあこの便座カバーを一度ほどしてマフラーに編み直します」

「バレンタインデーか！」

新規開店

「家の近くに新しいお店ができるそうです」

「へえ、何の店なの？」

「薬局です」

「うわぁ微妙。まあ便利っちゃ便利だけど」

「開店したら一緒に行ってみましょうよ」

「開店セールとかするわけでもあるまいし、一人で行きなよ」

「二人なら会話も弾むじゃないですか。この睡眠薬よく眠れそう、みたいな」

「怖いよ。寝不足だったの？ 大丈夫？」

「今日はこの精力剤試してみようか、みたいな」

「突然の下ネタ。普段からそういうことしてるような言い方やめてくんない？」

「このコンドームあなたにぴったりじゃない？ みたいな」

「服屋みたいなノリで。君は僕の何を知ってるんだよ」

「まぁ調剤薬局なのでそんなのたぶん売ってませんけど」

「君との会話には中身というものが微塵も感じられないな」

「そういうのをお求めでしたら他所をあたってください。身近に新しいお店ができるとしたら、どんなお店がいいですか？」

「本屋ができたら嬉しいね。毎日通うかも」

「エロ本立ち読みし放題ですもんね」

「さっきから発想が幼いんだけど。中学生の霊か何かに憑かれてるの？」

「他には？」

「.....ファミレスとかがいいかな。夕飯作るの面倒くさいときとか、楽だし」

「そういうときは私の家に来ていいんですよ？」

「いや、それは悪いよさすがに」

「お茶づけくらいは出してあげます」

「それ帰ってほしいときに出すやつだよ。むしろ来てほしくないんじゃないか」

「いえ、お茶づけくらいしか作れないので」

「レパートリー少ないってレベルじゃないなそれ。普段何食べて生きてるんだ」

「カップ麺とかレトルト食品とか冷凍食品とか缶詰めとか、手間のかからないもので済ませます」

「不健康過ぎるっていうか寝不足の原因それだろ。料理覚えようよ」

「女の子は料理ができなくちゃいけないみたいな考えは古いですよ。あ、そうです！ あなたがうちに来て料理すれば――」

「アイデアが閃いた風を装って僕を使おうとするな。教えろっていうなら別にいいけど」

「はあ、別にあなたが一緒に暮らしてくれれば何の問題もないと思うんですが.....」

「こんなときだけデレるな」

「あなたが毎日料理してくれたら抱かれてもいいです」

「なにその最低な告白」

「寒くなってきたせいで、朝、布団からでるのが億劫です」

「分かる分かる。こう気温が低いと早く起きても二度寝しちゃうよね」

「昨夜とうとう毛布を出したんですが、失敗でした。毛布の吸引力は半端ないです」

「より出にくくなっちゃったか」

「かと言ってストーブをつけるほど寒くもない。節約のためならまだ我慢できる微妙な気温」

「そろそろストーブ使っても変じゃない季節だと思うけど」

「石油代がバカにならないんですよねえ。ガスストーブよりかは安いんですんけど」

「ケチケチしてるとまた風邪ひくよ。薬代とか診察代がかかるよりマシじゃないかな？」

「それはそうですけど。何より腹立たしいのが……うちってアパートの一階じゃないですか。暖かい空気って上にいくでしょう？ つまり、私のストーブが出した熱が二階の住人の部屋を意図せず暖めていることになるんです！」

「ケチ過ぎる。それくらい別にいいだろ」

「お金払ってくださいと怒鳴り込みたくなります」

「嫌なクレーマーだなおい」

「私の部屋の熱を勝手に盗んでるようなものですよ？ 受熱料を払っていただきたい」

「国営放送じゃないんだから……。窓から逃げる熱のほうが大きいよ絶対」

「窓には発泡スチロールを貼ってあるので問題ありません」

「怖っ。外から見たら何事かと思うだろ」

「こうなったら壁も床も天井も全て発泡スチロールの板で覆ってしまいませんか。熱の逃げ道

を完全シャットアウトです」

「一酸化炭素の逃げ道も完全シャットアウトするから死ぬぞ。絶対やっちゃダメだからね」

「じゃあもっといい方法を教えてください。暖まってお金がかからなくて、かつ他人に得させない方法を」

「最後のは許容しろよ。えっと……重ね着するとか」

「顔が寒いですし動きづらいです。お風呂入るときとか特に寒そうな」

「じゃあ運動すれば？」

「条件はクリアしてますけど、めんどくさいし疲れます」

「軽くだよ軽く。スクワット三十回もすれば暖まるでしょ？ それも嫌ならもう湯タンポでも抱えて生活しろ」

「あれはわりとすぐ冷めちゃうじゃないですか。あ、そうです！ あなたが私を抱えて生きれば！ 暖かいしお金かからないしいろいろお得です」

「重いよいろんな意味で」

「これまでの話を総合すると、抱き合って運動すればいいんですね」

「着地点がおかしい」

早起き

「今日は折り入ってお願いがあります」

「何？ そんな改まって」

「明日は事情があって早起きしなければなりません。起こしに来てください」

「え、目覚まし掛けとけば起きられるでしょ。用事があるなら二度寝の心配もなさそうだし」

「普段は遅寝遅起きなので早起きは自信ないんです。特別に寝込みを襲ってもいいのでお願いします。あ、でも手短に」

「手短にじゃないよ。前から疑問だったんだけど、君は僕をなんだと思ってるの？」

「全自動目覚まし炊事掃除買い物洗濯おしゃべり愛玩マシン」

「そっかじゃあそこに説教も加えてもらえる？」

「冗談ですよ。マシンではなく恋人です」

「重要な部分が何一つ撤回されてないんだけど」

「はぁ、真面目な相談なのに、これじゃ埒があきませんね」

「不真面目にしてるのは間違いなく君だ」

「起こしに来るのが無理なら、何か別の案を考えてください」

「なんで僕が……。いつも何時に起きてるの？」

「9時ですかね。そんなに遅くないでしょう？」

「十分遅いよ。で、明日は何時に起きなきゃいけないの？」

「4時です」

「早っ。徹夜すればいいんじゃない？ 今のうちに寝ておいてさ」

「その手がありましたか。わかりました。今夜はあなたの家に泊まります」

「えっと、何をわかればそうなるの？」

「徹夜なんてしたことないので怖いんです。もしおばけが出たらと思うと」

「昨日おばけの仮装してた人間が何言ってるんだ」

「丑三つ時まで起きてたことはありません。泊めてくれるだけでいいですから。あなたは寝ていいですから。何もしませんから」

「信用できないし、なんか立場が逆な気がする」

「先っちょだけですから」

「何の話だよ！ 君最近ホントに下ネタ酷いな！」

「テコ入れです」

「なんのだよ。そういう打算的な行動萎えるからやめなよ」

「むしろ勃つと思うんですが」

「何がだよ！ 気分の話をしてるんだよ僕は！」

「私だってそこまで計算してやってるわけじゃないです。ほとんどその場のノリです」

「それはそれで問題だ」

「昨日の夜はひどい思いをしました」

「何かあったの？」

「あれはお風呂からあがって、ココアを飲んでいた時のことです」

「語りに入るのか」

「あなたへの不満を日記につづり、明日はどうやってからかってやろうかと考えながら」

「いろいろ突っ込みどころはあるけどスルーしといてあげるよ」

「ふと手元を見ると、ココアに波紋ができてたんです。地震かと思って身構えたんですけどそうでもない。微かな揺れがずっと続いているんです」

「知らないうちに貧乏ゆすりでもしてたんじゃない？」

「いえ、なんだかアパートの部屋そのものがガタガタ揺れてる感じでしてね。おかしいな—おかしいな—と思って」

「なんで稲川淳二風」

「そしたらね、そのうち女の人のむせびなくような声が上から聞こえてきたんですよ」

「え、ホントに？ それはちょっと怖いな」

「あん……あん……あん……あん……」

「ああ、全然怖くなかった。しかも色っぽく言ったってことは君もわかってるよね？」

「それはまあ少し考えたらわかりましたけど……本当に最初はびっくりしたんですって。うわぁオバケがセックスしてる！って」

「直感でほぼわかってるじゃん」

「おかげで寝つき最悪です。そういうのはすべきところへ行っていていただきたい」

「まあ、普通に迷惑だからね。周りに住んでる人にとっては騒音以外の何物でもないし。誰かと一緒だと気まずいし」

「これが若い男女ならまだ、私とあなたに置き換えて妄想もできるってもののなのに……」

「僕のセリフが台無しだ」

「二階に住んでるの、中年のオジサマなんですよ。いや、オジサマというよりオッサンと言ったほうが正しい風貌なんですが」

「知らないよ。とにかく災難だったね。これからも続くようなら大家さんに連絡したら？」

「その人が大家さんなんです」

「お、おう、そっか、ごめん。じゃあ普通に文句言いにいけばいいんじゃない……」

「なんて言えばいいんですか？ 『喘ぎ声がうるさいのでホテル行ってください』とでも？」

「そんなストレートに言わなくても……いや、そうでも言わなきゃ伝わらないか。いっそ新しい物件探したら？」

「あなたの部屋に住めば万事解決なんですが」

「問題だらけだ」

「大丈夫ですよ。私は声出さないように我慢しますから」

「そこは問題にすらしてない」

値上がり

「いつもアホみたいな話ばかりなので、今日はまじめな話をしましょう」

「自覚あったんだ。まあ、たまにはいいんじゃない？」

「お菓子の値上がりについてです」

「たいしてまじめじゃなかった。そんなの今のご時世、お菓子に限った話じゃないだろ」

「私の生活には大きく関係してくることなので」

「文句言う前にまずそんなのが響いてくるような生活を正せ」

「小麦粉とか燃料費とかが高騰して、それでもなんとか利益を出すために値上げするしかないのは理解できます」

「仕方ないよね」

「ですが、それで売り上げが変わらなかったからといって、諸経費の値段が落ち着いた後でも値下げしないのはいかがなものか！」

「言いたいことは分かるけど、そんな声を大にして言うことでもないと思う」

「甘いですねお菓子だけに！　そういう消費者の妥協が生産者の墮落を招くんです」

「大げさな」

「内容量が減ってお値段据え置きな場合もあります。この場合はいつまでも内容量が戻りません」

「値段より量を変えるほうが気づきにくいし、慣れれば気にならなくなるからかな」

「私の目は誤魔化せませんよ。たとえ表示していなくても持っただけでわかります。内容量はもちろん原材料や成分まで」

「わかってたまるか」

「む、これはポリプロピレン」

「それはパッケージの材質だ」

「思いつきました。経費が上がったなら他の部分を削減すればいいじゃないですか。いっそラップで包んでおけば」

「おばあちゃんか。湿気るし衛生の面から見ても最悪だろ。そもそもパッケージにはそんなお金がかかってないよ、たぶん」

「じゃあ、卸売りのシステムを廃止しましょう。今はネットの時代ですから、みんな企業に直接注文すれば」

「配達料を計算に入れば変わらない、というか逆に高くなるよ。お徳用でも買えば？」

「くっ、企業の傲慢を正すことはならぬというのか……」

「誰だよ」

「人間も同じですよ。この人に対してはこんな感じでもいいかってなって、相手への対応がおざなりになります」

「いきなり心の闇を見せるな」

「でも私のあなたへの愛は据え置きなので安心してください」

「たまにそういうことを恥ずかしげもなく言うよね。嫌いじゃないけど」

「今日は換気の日です」

「いい（11）空（9）気だからだってね。季節が季節だし、ストーブ長時間使ったりしたときは換気しないと」

「そんなの寒くて無理です。一酸化炭素中毒になるからって、どうして暖めた空気をわざわざ外に逃がすんですか。本末転倒もいいところです」

「冬場はどうしても空気がこもるから。一酸化炭素に限らず湿気とか匂いとかもさ。中毒だけじゃなくて、シックハウス症候群になったりもするんだよ」

「実家にこないだ帰ったばかりなので大丈夫です」

「ホームシックじゃない」

「キッチンの換気扇回しとけば問題ないでしょう。狭い部屋ですし」

「やらないよりはマシだろうけど、たぶんそこまで排気能力は高くないぞ」

「そんなに匂いだの空気だのが気になるならガスマスクでも付けてればいいでしょう!？」

「逆ギレするなよ」

「あ、でも確かにガスボンベ背負って生きてればどんな場所でも清浄な空気が吸えますね」

「納得するなよ」

「それに部屋が汚いままならキノコとか収穫できたりして。自給自足ですよ」

「そんなもん食うな。部屋ダメにしたら大家さんに怒られるぞ」

「見たこともないキレイな植物とか生えてきたりして」

「キレイとか呑気なこと行ってる場合じゃないからそれ」

「いっそマスクを着けないと五分で肺が腐ってしまうくらいに」

「もう換気でどうこうできるレベルじゃなくなってきた」

「何事も慣れです。その道のプロになればへっちゃらですよ」

「どの道のプロだよ。そうになったら僕、二度と君の部屋に入らないからね？」

「空気が悪くなったなら、その中でも息ができるように工夫すればいいんですよ。雑菌や毒素との共生の道を選ぶんです。粹でしょう？ 息だけに」

「やかましい」

「粹な、つまりシックな生活をしているわけです。これがほんとのシックハウスって」

「やかましい」

提案

「同棲しましょう」

「.....突然なに言ってるの？」

「季節的に外でしゃべり続けるのが辛くなってきましたし、かと言ってあなたの部屋に毎日通うというのも面倒です」

「なら僕が君の部屋に行くけど」

「半端無く散らかってるので来ないでください」

「こないだ片付けたのにもう散らかしたのか。というか無理して毎日話さなくたっていいし」

「そういうところから二人の心が離れていくんです。ですからこのさい一緒に暮らしましょう。もちろん家賃等生活費は折半で」

「急にそんなこと言われても.....。二人で暮らすには狭いぞ僕の部屋。引っ越しとかはお金かかるし」

「あなたの住んでるとこの向かいのアパートがちょうど1LDKで五万円です。こっちと同じ大家さんみたいですから、契約も新規でするより簡単かと。今週末あたりにお引っ越ししましょう」

「わざわざ調べてきたのか。君ってこういうときだけ怖いくらい行動早いよね」

「悪い話じゃないでしょう？ 今より安い家賃で今より広い部屋と、いつでも可愛がれる女の子が手に入るんですから」

「呪われた喋る置物か何かの間違いだろ。まあいいけど、一応家族には連絡してね」

「そんなことしたら、うちのお父さんに背後から刺されると思いますが、あなた」

「この話はなかったことにしよう」

「ちょ、冗談ですって。そんないきなり刺されたりしませんよ」

「一拍おいてから刺されても同じなんだよ。辞世の句を詠む時間もらっても嬉しくない」

「でしたらもう黙っときましょう。だいたい二人ともいい大人なんですし、自分の人生の選択くらい自分でするべきです」

「礼儀として、ちゃんと言っとかなきゃいけないと思うよ」

「家族に内緒で同棲するって、なんだか興奮するじゃないですか」

「しないし普通にバレるよ。僕はめったにないけど、君は親が訪ねてくることもあるだろ？」

「もしそうなくても時空の歪みで部屋がつながってしまったことにすれば、じゃあ仕方ないなと」

「歪んでるのは君の常識だ」

掃除

「うーん、寒い日はコタツでじっとしているに限ります」

「朝からそこにいる姿しか見てないんだけど。アクティブとか言ってたのはどうなった」

「外、雪ですよ。さすがにこんな日までアクティブになれませんて。食料をちびちび消費しながらコタツでぬくぬくしてるのが一番です」

「冬眠寸前の熊か。それはそうと、引っ越してからだんだん部屋が汚くなってきたね。次の掃除当番は君だったっけ」

「平日の昼間は私もあなたもいませんし、まだそんなに汚れてないと思いますけど」

「いや、ペットボトルがあちこちに転がってる時点でそんなにしてレベルじゃないから」

「散らかしてるわけじゃありません。風水です」

「無造作過ぎる。どんな効果があるんだ」

「西側に配置した午後ティーは金運上昇」

「絶対嘘だろ」

「東側のコカ・コーラとポテチの袋は健康運上昇」

「その組み合わせはむしろ下降すると思う」

「南側のゴミ箱は、中身を変えなければゴミ出しの回数が減ります」

「それ風水じゃない」

「全て一ヶ所に集めてゴミ捨て場に持っていくと願いが一つ叶うので、やってみてください」

「じゃあ僕、マメで思いやりがあって素直な彼女が欲しい」

「叶えられる願いは性的なものに限られます」

「そういう下半身バカみたいな奴はいらない。自分で掃除しろ」

「コタツから出られません。私がこうして北側でじっとしていることで総合運が上がっているんです」

「効果ないんだけど。むしろどんどん幸福を吸いとられてる気がする。捨てていい？」

「捨てると三日以内にあなたとあなたの身内にあらゆる不幸がふりかかります」

「呪われた置物だった。もういいから早く掃除」

「このくらい汚れてたほうが私としては住みやすいんですが」

「ゴキブリか」

「ふっ、知らないんですか？ ゴキブリって実はキレイ好きなんですよ？」

「ゴキブリ以下だった。世界で一番汚い生き物は君なんじゃないかって気が」

「確かに、人間ほど汚く醜い生き物は他にいないかもしれませんね……」

「自身の性分を規格化して全人類を揶揄するな」

「もうすぐ年末の大掃除とかありますし、別にいいじゃないですか」

「それで年末になったら、先月引っ越したばかりだから大掃除なんて必要ないって言うんだろ？」

「な、なぜそれを。エスパーですか」

「ただの帰納法だ」

ネット依存症

「インターネット依存症が深刻化してるそうで。聞くところによると基準があるみたいなんですけど、当てはまりますかね？」

「ふうん、どんなの？」

「『ネットの利用時間がコントロールできない』」

「早く寝なきゃいけないのに、つつい延長しちゃったりか。最近は忙しいからそうでもないかな」

「『ネットのやり過ぎで日常生活に支障が出る』」

「それはないな。想像もできない」

「『インターネット接続への強い欲求がある』」

「なんだその言い回し。パソコン立ち上げると必ずブラウザ開いちゃったり？」

「そういうことでしょうね。ちなみに私はあなたに接続されたい強い欲求があります」

「ちなむな。他には？」

「『ネットを禁止にすると禁断症状が出る』」

「深刻すぎる。ネットしないと痙攣したり幻覚見たりするのか」

「『ネットにハマりすぎて家族間の関係が壊れる』」

「これはあり得るね。食事中にケータイ弄ったりとかはやめてほしいかも」

「その点うちは大丈夫ですね」

「まず家族じゃないからな」

「『ネット利用によって起こる奇異な行動がある』」

「これは何か別のものに依存してるんじゃないだろうか。思ったけどさ、ネット依存症って一口に言えない気がするんだよね」

「と言いますと？」

「ネットって使い道が一つじゃないだろ？ ソーシャルだったり、オンラインゲームだったり、動画だったり、物書きだったりさ。だったらそれはネット依存症なんて包括的な名前じゃなくて、ソーシャル依存症、ゲーム依存症って分けて呼ぶべきじゃないかな？」

「うーん、一概にそうとも言えないでしょう。インターネットにおける共通項は多くの人と繋がることです。ソーシャルもオンラインゲームも動画も物書きも、現実ではあり得ない大人数と、距離や時間に関係なく情報や感情を共有している点では同じ。そう考えれば、ネット依存症というものも別に変なネーミングじゃありません。共有依存症と言ったほうがより正確かもしれません」

「……お、おう」

「それにしても、誰しも何かに依存して生きてるものなのに、それが社会や周囲のためにならないと病気として扱われてしまうとは……」

「……………」

「あれ？ どうしたんです？ 私、何か変なこと言いました？」

「いや、軽いキャッチボールのつもりで発言したら豪速球が返ってきて受け止めきれなかったっただけ」

「明日の洗濯当番は私でしたね」

「君がそういうこと覚えてるなんて珍しいね。明日は大雪か」

「失敬な。一つ屋根の下に住んでいるのです。私だってたまにはしっかりやりますよ」

「じゃ、今のうちに洗濯機回しといて。明日の朝だと僕がやるはめになるだろうから。ポケットの中とかちゃんと確かめてね」

「はいはい。……………」

「あれ、どうしたの？ 顔赤くして」

「あなたのジーパンのポケットをまさぐってたらコンドームが出てきました。つまりいつでも準備オッケーということですか？」

「いや、期待を裏切るようで悪いけど、それはこないだ街で配ってたやつ。世界エイズデーだとか何とか」

「なるほど。クリスマスに先駆けて」

「その発想はなかったけどたぶん違う」

「クリスマスには穴の空いたコンドームを配るんでしたっけ？」

「どっから仕入れてきたんだその知識。タチの悪い悪戯だろ」

「それともコンドームをベッドのわきに吊るしておくとか、翌朝プレゼントが入ってるんでしたっけ？」

「靴下より無理があるよ」

「プレゼントを開けると赤ちゃんが入っているという」

「何かの隠喩？」

「コンドームと言えば、私ずっとコンビーフの親戚だと思ってました」

「コンビーフのコンは塩漬けて意味だ」

「コンドームは人名らしいですね。ラテン語とかイタリア語って説もあるみたいですが。性関連の名称に自分の名前をつける人って、一体どういう意図があってそんなことするんでしょう？」

「知るか。星や新種の生物の名前なんかより一般に定着しやすいからじゃないの？」

「なるほど。知名度もとい、痴名度狙いというわけで」

「うまくないよ」

「まあせっかく頂いたわけですし、早速今夜――」

「使わない」

「えー、さすがにそれはいけませんよ。物事には順番というものがありますから」

「そういう意味の使わないじゃない」

「袋から出してみてもいいですか？」

「勝手にどうぞ。ちゃんと捨てといてね」

「おー、実物は初めて見ました。この先端の突起部分に傷をつけて使うんですよね？」

「それは使い方として根本的に間違ってるから。世の中にはそういう悪い人もいるけども」

「なかなか膨らみますね」

「風船扱いするな」

「ごちそうさま……」

「あれ、どうしたの？　なんか元気ないね」

「ちょっと食欲がないんです」

「夕飯残さず食べ終えてからじゃ何の説得力もないけど……風邪でもひいた？」

「そういうわけじゃありません。今日で世界が滅亡だと思うと悲しくて」

「心配した僕がバカだった。え、もしかしてマヤの予言信じてるの？　さっきまで別にそんな素振りなかったのに」

「たった今思い出しました。そういえば今日世界滅亡じゃーんって」

「なんだその見たかったテレビ番組を放送直前で思い出した小学生みたいなテンション」

「どうしましょう。このアパートじゃ巨大隕石が落ちてきたら耐えられません」

「どのアパートでも無理だから。そもそも巨大隕石が落ちてくるんだっけ？　マヤの予言って」

「原因は知りません。重要なのは今日世界が終わるってことですよ」

「なるほど、君みたいな人種が大騒ぎしてるのか」

「今のうちに銀行から貯金を全額おろして、今日は美味しいものでも食べにいきましょう！　高いお酒を飲んで高いホテルに泊まりましょう！」

「それで明日が普通に始まったら後悔じゃ済まないと思う。だいたい今日はもうすぐ終わるぞ」

「日本時間じゃないでしょう。マヤは今のメキシコ辺りですから、向こうはまだ朝。ここからが本当の地獄です……」

「本当に滅亡する可能性があるならもっと深刻な気持ちにもなれるだろうけど、信憑性のない情報でよくそこまで騒げるね」

「騒ぐのが目的ですから」

「ぶっちゃけるな」

「でも本当に明日、世界が終わるとしたらどうします？」

「特に何もしないよ。実家に帰ってる暇は無さそうだから、ここで君と過ごすんじゃない？」

「繋がりながらですか」

「何かに繋がる予定はない」

「でもそれじゃ童貞のまま死ぬことに」

「僕がそうだと決めつけるな」

「私は処女のまま死ぬなんて嫌です。処女のまま死ぬなんて……」

「なんで繰り返した」

「世界が滅亡するというていで、今夜どうです？」

「どうですじゃないよ。なんやかんやで何も起こらないから安心しろ」

「ならいっそ私が滅ぼしてあげましょう」

「救えないのは君の頭だったか」

「滅亡しませんでしたね、人類……」

「残念そうに言うな。早まった真似しなくて良かったね」

「別に早まってくれても良かったんですが。実際に人類は滅亡しているけれど、私は一人だけ仮想現実世界で観察対象として生かされている、という展開はないんですか？」

「SFの読みすぎだ。どうとでも考えられてキリがないだろ」

「あなたは本物のあなたですか？」

「なにげに証明しようがない問題を投げかけてくるな」

「証明ならできます。本物のあなたなら身長178センチで痩せ身ながら筋肉質、お金持ちでよく気が利いてファッションセンスもあり、私のどんな要求も受け入れてくれるはず」

「鍵穴を歪めるな。鍵が入らなくなる」

「無理矢理ねじ曲げれば」

「鬼か。とにかく僕は本物だし世界は滅んでない」

「もしかしたらどこかのヒーローが、人知れず世界を守ってくれたのかもしれないね」

「まだ続くのかその下らない妄想」

「私は救世主たる彼もしくは彼女に心の中で感謝するのです。そしてそんなことは露知らず、今日も平和な日々をのうのうと享受しているあなたたち一般人を見下して優越感に浸ります」

「なるほど、宗教ってそうやって生まれるんだね」

「おそらく世界を救ったヒーローは自分の記憶すらも消去し、周りの人間と同じように世界滅亡をネタにしている……はっ！ 実は世界を救ったのは私だったという可能性が!？」

「ないよ。強引に自分を祭り上げようとするな。百歩譲ってそんなやつがいても、それが君って

ことはあり得ない」

「むう……普段の言動が言動ですから信じてもらえないかもしれませんが、あなたが知らないところで私は活躍しているのです」

「へえ、例えば？」

「あなたの外出中に掃除したり」

「帰ってきて部屋が片付いてたことなんて一度もないぞ」

「あなたのベッドの下にアダルトチックな本を突っ込んでおいたり」

「余計な真似するな。お母さんの逆バージョンか」

「あなたが寝ている間にこっそりおやつを食べたり」

「こっそりの意味ないよね。犯人は一人しか考えられないから」

「私を好きになるよう熟睡中のあなたに暗示をかけたり」

「最近疲れが取れないと思ったら君か。何の効果もないから安眠妨害はやめてくれ」

「私に突っ込みたくなーる。私に突っ込みたくなーる」

「あ、効果あるかもしれない。僕の脳は意味取り違えてるっぽいけど」

「お正月も終わったっていうのに人が多いですねえ」

「わりと有名なお寺だからね。三カ日はもっと凄かったらしいよ。たぶんそのとき来られなかった人が今日来たって感じじゃない？ 土日だし」

「これでも少ないほうですか。っと、お賽銭投げようと思ったら五円玉がありません。十円玉半分にちぎっちゃダメですかね？」

「そんなことができる時点で不動明王あたりの加護がついてるよ。貨幣を意図的に傷つけるのは犯罪だぞ」

「まさかおサイフケータイに対応してないとは思ってもみませんでした」

「電子貨幣で賽銭とか情緒もへったくれもないだろ。僕の五円玉あげるから早く済ませろ」

「ナンマンダブナンマンダブ……。何をお願いしましたか？」

「今年も無事暮らせますようにって」

「普通ですね。せっかくですから今年は冒険してみても良かったのでは？ 世界救済の旅に行けますようにとか」

「行けよ勝手に。無難に過ごせれば僕はそれでいいんだよ。君は何をお願いしたの？」

「あなたがもっと積極的になるようにと」

「悪かったな消極的で」

「あなたが童貞卒業できますようにと」

「大きなお世話っていうか周りに人いるからそういう発言やめてくんない？」

「それから既成事実が作れますようにと」

「僕もう一回参拝してきていいかな？」

「それから」

「多い！ 五円でどれだけ恩寵賜ろうとしてるんだ！」

「私は神に愛されている女ですから」

「ここお寺だから神はいないぞ。そういう自信だけは無駄にあるよね君」

「ではそれを証明するべく、くじ引きしましょう。と思ったら百円も五百円もありませんでした。あなただけでも引いてきてください」

「それじゃ証明にならないだろ。百円あげるから一緒に引こう」

「ではお言葉に甘えて……大吉！ 運氣これより大いに吉。悦び事多し。縁談吉。待ち人なし。望み事成就すべし。訴訟あらそい事すべて勝ち！」

「うわ、大凶……。運氣大いに悪し。悦び事なし。縁談悪し。待ち人来たらず……」

「さすが神に愛されている女といったところですか。あなたは残念でしたね。早く結びつけて祓っちゃいましょう」

「君のも一緒に結びつけさせてもらえないかな？ でないと祓えない気がする。むしろ君ごと祓う必要がある気がする」

「馬鹿なこと言ってないで、せっかくですから絵馬も二人で一枚買いましょう。と思ったらお財布がありませんね」

「仕方ないなあ……じゃないよ！ 五円ないとか百円ないとか以前に最初から金持ってきてなかったんじゃないか！」

「スーパーの五百円割引券ならあるので、代わりにあげます」

「……ありがとう」

「さて、なんと書きますか。さっきと同じお願い事だと芸がありませんね」

「僕は同じでいいや」

「そんなことだから大凶なんですよ。もっと神々を喜ばせないと」

「なんで願い事でボケかまसानきゃいけないんだ。他人も見ろんだぞこれ」

「あなたの性欲が回復しますように、と」

「祈願を装った中傷はやめろ」

お餅

「このところお餅ばかり食べてる気がするんですけど」

「実家からいっぱい貰っちゃったからね。早く食べないとカビちゃうし」

「しかしこうもお雑煮と磯辺焼きのヘビロテだと、さすがに飽きてきます。毎一日毎一日も一ちも一ちも一ちも一ちも一ちも一ちも一ちもうちもう恥毛」

「だんだんイントネーション変えるな」

「そろそろ別のものが食べたいです」

「じゃあ今日は少し手間かけて、お汁粉でも作ってみようかな」

「結局お餅ですか」

「そこは我慢しろ」

「だいたいお餅って、食べれば食べるだけ死亡率が上がる食べ物じゃないですか。おめでたいからって、なんでわざわざ死の危険を冒そうとするんです？」

「毒みたいに言うな。気をつけて食べれば大丈夫だよ。飲み物も用意してさ」

「その油断が命取りですよ。そうやって私も何度か詰まらせたことがあります」

「それは君が迂闊なおっちょこちょいってだけだ」

「いえ、それだけで何度も詰まらせるわけありません。お餅はそういう風にできてるんです。毒を用いず重要人物を暗殺するために発明された食べ物だという説もあるくらいですから」

「へえ、それは初耳だ。考えたやつは頭いいな」

「ふふん、私が今考えました」

「やっぱり頭悪い気がしてきた」

「実際これなら殺意があったとしてもバレませんよ？ 姑の執拗ないびりに耐えられなくなった主婦が」

「そういう笑えない冗談やめて」

「いえ冗談で言っているわけではなく。実際に凶器たりえる食べ物だから言っているのです。これを不謹慎と言うなら、そう言う前にお餅そのものを禁止にすべきです。可哀想なこんにゃくゼリーと同じようにね！」

「今一瞬私怨が見えた気が」

「そういうミステリーってないんでしょうか。餅で窒息死した被害者を前に探偵が『これは事故じゃない。殺人事件だ！』っていう感じの」

「うーん、本当に殺人事件だったとして、犯人が殺意を認めなければ逮捕は難しいかもね。過失致死と言えなくもないけど、みんな食べてればなんとも……」

「つまり、迷宮とは人の心なのです」

「なんかカッコいい感じだけど事件としては盛り上がり欠けるぞ」

「殺意とは言わずとも、これで厄介払いができればと思ってお餅料理を作っている人は今年何人いたんでしょうねえ？」

「エグいこと想像させないでお願いだから」

「お餅……真っ白な外見とは裏腹に、なんともブラックな食べ物です」

「ブラックなのは君の腹だ」

しこう

「ふうううう、寒い寒い寒い……」

「おかえり。今日は珍しく君のほうが遅かったか」

「電車が雪で遅れてたんです。大雪ですよ外。あなたの実家に行ったときと同じくらいあるんじゃないですか？」

「昨日から降ってたからね。道路も凄かったでしょ」

「はい。おかげで靴がびちょびちょです。こんなに濡らして、いけない子ですね」

「何言ってるんだコイツ」

「もう足が冷たくて冷たくて。はぁーコタツコタツ……って、ついてないじゃないですか！ ガッテン！」

「ガッデムね。納得してどうする」

「この寒いなか帰ってくる人間がいるというのに……。コタツくらいつけといてくださいよ。気が利かない人です」

「入る人間がいらないのにつけるわけないだろ。もったいない」

「エアコンも最低温度って……。これじゃただの送風と変わらないじゃないですか。節約して風邪ひいたら意味ないと思うんですけど。多少フトコロは寒くなっても、部屋は暖めるべきです」

「別に僕はこの気温で快適だから。君が寒がりなんだよ」

「女の子に冷えは禁物なんです……。あっ、あれでしょう？ 部屋を暖めなければ、寒がりの私が――こうやってくっついてくると期待して」

「料理の邪魔だから離れろ。僕はそんな低レベルな思考の持ち主じゃない」

「ほほう。ではこうしておっぱいで背中を摩擦してくると期待して」

「『嗜好』のレベルを上げるな。僕は『思考』って言ったんだよ」

「これは失礼。発音が同じなので間違えちゃいました。まさか房中術などという高い志をお持ちとは」

「日本語難しいけどネイティブなんだからさ、そこはわかるよ。『志向』じゃなくて『思考』だって」

「確かに、あれは男性にとってロマンの最高峰でしょうね」

「『至高』じゃなくて『思考』！ どうあっても僕を変態にしたいのか！」

「なるほど、一度試してみるのもいいかもしれません」

「『試行』じゃなくて……！ 『思考』だっつってんだろ！ 『し・こ・う』！ 『シンク』！」

「洗い場なら目の前にありますけど、どうかしましたか？」

「『sink』じゃねーよ！ 『think』だよ！ ニヶ国語使って通じないってどういうことだよ！ いい加減この親父ギャグみたいな鬱陶しいやり取りやめろ！」

「ただの言葉遊びがそんなに『辛苦』ですか？」

「……………」

ウィンタースポーツ

「おはようございます。おや、珍しく六時なんて早朝に起きてしまいましたね」

「今は夕方の方の六時だ。どれだけ寝てるんだよ」

「うえ？　じゃあもう一日終了ですか？」

「そうだよ。三連休だからって怠惰過ぎるぞ」

「そういうあなたは今日一日何をしてたんですか？」

「買い物行ったり掃除したり車の雪かきしたり。明日は久しぶりにゲレンデにでも行こうかと思って」

「ウィンタースポーツですか。最近身体動かしてませんでしたから、ここで広瀬香美の歌をバックにラブロマンスするのも悪くないですね」

「なにその微妙に懐かしい恋愛観。えっ、君も来るの？」

「もちろん。ゲレンデが溶けるほど恋したいです」

「その漢字だと大惨事だけど。そういうからには一応経験はあるんだよね？」

「なっ！　突然なに訊いてくるんですか……処女、です」

「知ってるっていうかごめん言葉が足りなかった。滑ることはできるんだよね？」

「まあいつも笑いを提供しようと努力しているつもりですが、たまには滑ってしまうことも」

「ウィンタースポーツできるんだよね!？」

「生まれてこの方やったことないです」

「ああそう。なんでこれだけの回答を得るのにこんな疲れなきゃいけないんだ……」

「教えてくださいよね？」

「正直自由に滑りたかったんだけど、まあいいや。最初からスノボは敷居高そうだからスキーでいいよね？」

「あなたもスキーですか？」

「君に教えるならそのほうがいいでしょ。スノボはまた今度でいい」

「ボード二枚借りてスキー板っぽく履けばいいんじゃない.....？」

「絶対悪目立ちする。なんの解決にもなってないどころかどうやって滑るんだそれ」

「じゃあスキー板とボードを両方借りて、スキー板を履き、ボードを手に嵌めれば」

「変形口ボか。それストック持てないしボードするとき逆立ちしないといけないだろうが。足のスキー板絶対邪魔だし」

「じゃあスキー板をストック代わりに」

「もういいって！ スキーにするから！ スキー好きだから！」

「.....」

「.....」

「.....っは！ 見事な滑りですね」

「そういうんじゃない。鼻で笑うな」

「スキー好きですか」

「やめて」

「今日は『世界社会正義の日』です」

「大仰な名前だけど、何をする日なの？」

「貧困の撲滅や公平な社会の実現を目指す日です。というわけで、私たちも今日は社会正義の味方になりましょう」

「なんだ社会正義の味方って。具体的に何と戦うんだ」

「説明しましょう！ 社会正義の味方は日々、世を害する社会的強者から社会的弱者を守っているのです！ 例えば不正が発覚した大企業を叩いたり」

「ああ、正義の味方って言ってもやっぱりフィジカルな活躍をするわけじゃないんだ」

「いえ、ちゃんと本社に火炎瓶を投げに行ったりもします」

「いきなり過激だな。ちゃんとしてなんだよ。ヒーローがそんなことしてるの見たことないよ」

「正義はフィクションほど美しいものではありません。それが社会のためなら、社会正義の味方はいくらでも手を汚すのです」

「鬱屈したヒーローだなあ。そもそもそういう行為が本当に社会のためになってるのか」

「社会が社会正義の味方を批判しない限り、社会正義の味方の正義は社会正義であり続けるのです」

「なんか社会正義がゲシュタルト崩壊してきた。他には何するの？」

「失言した芸能人のブログを炎上させたり」

「ちっさ！ 君のそれ絶対社会正義じゃないよ。貧困の撲滅はどうした」

「社会正義の味方自身が貧困側の人間なので、社会正義の味方の士気高揚が貧困の撲滅に繋がるのです」

「都合いいー」

「ツイッターやフェイスブックで軽犯罪自慢があれば拡散し、持ちうる限りの罵詈雑言で悪を貶す。本当は心苦しいですが、これも社会のため」

「いや、明らかにストレス発散してるだろ」

「社会正義の味方だって時には心を鬼にしなければなりません」

「さっきからずっと鬼なんだけど。他人を不幸にして喜ぶ鬼畜そのものなんだけど」

「いやいや、実際に社会のためになっているでしょう。どんな軽犯罪だろうと犯罪は犯罪。社会正義の味方の活躍がなければ、一体どれだけの社会的弱者たちの血が流れるか！」

「少なくとも失言で血が流れることはないと思う。君のは社会正義じゃないよ」

「ではどんな行為が社会正義だと言うんです？」

「えっと、献血に協力したり」

「社会正義の味方の血が流れるなんてゴメンです」

「もうお前は正義の味方を名乗るな。他にはボランティアに参加したりとか」

「そんなのつまんないじゃないですか」

「今とんでもない失言を聞いた気がする」

「今日は世界友情の日です」

「こないだは社会正義の日だったけど、最近好きだね、その世界〇〇の日ってやつ」

「ネタにしやすくて。さて、今日は友情を大切に……と言いたいところですが、そもそも男女間に友情って存在すると思いますか？」

「もちろん。君だって良い友達だと思ってるよ？」

「それははっきり言って全く喜べないですね……。でも友達とか言いつつキスはするじゃない……っ!? まさか友達となら男女問わずキスしてるんですか!？」

「物事を一元的にしか捉えられないのか。僕はそんな欧米みたいなフランクさ持ち合わせてない。君は信じてなさそうだね、男女間の友情」

「私は男女云々以前に友情自体信じてません」

「それでよく最初の質問ができたな。その姿勢が友達を遠ざけてるんじゃないの？」

「違います。思うに、男性には友情という概念がありますが、女性にはないんです。よって男女間の友情なんてものもありません。女性間に成立する正の感情は愛情だけです」

「いろんなところから異論が来そうな意見だ」

「あ、今『いろんな』と『異論』でかけました？ さっむ」

「もう友達でいるのもやめようかなコイツ。話の腰は折るわ人を小バカにしてくるわ」

「そのほうが私としては好都合です。改めて女として見てください」

「友達になれないやつを好きになれると思うか？」

「友達友達って、そんなに友情が大事ですか。実際友情パワーなんて、ユーフォーキャッチャーのアーム程度の力しかありませんよ」

「よわすぎ。どんだけ信じてないんだ」

「一見すごく頼り甲斐がありそうに見えても、いざ使ってみたら何も得られない。フラストレーションが溜まるばかりでてんで役に立ちません」

「友情を道具みたいに認識してる時点でお前に友達云々を語る資格はない」

「だって！ 私のことは良いように使うくせに！ いざこっちから頼み事しても何もしてくれせんし！」

「僕そういうやつ一人知ってるんだけど。え、自虐なの？」

「私とあなたの間にあるのは愛情だから良いんです。愛情は大好きです。友情よりずっと頼りになりますから」

「結局道具扱いに変わらないじゃないか」

「それはお互い様です。利用し利用されが理想的な人間関係。あなただって私に頼っていいんですよ？ できる限りのことはしますから」

「まず何ができるの？」

「.....」

「なんか言えよ」

間違い記念日

「重大な間違いが発覚しました。『世界社会正義の日』『世界友情の日』と話題にしてきましたが、なんと、日付を一ヶ月分間違えていたのです！」

「馬鹿だよね。散々ネタにしておいて間違いとか」

「知ってて教えてくれないなんて酷すぎます！」

「僕も知らなかったんだから教えようがないだろ。自分で気づけただけまだマシだと思え」

「うっかりしてました。まさかまだ一月だったとは」

「もう二月のつもりだったことにびっくりだ。一日間違えるならまだしも一ヶ月間違えるってどんな脳ミソしてるの？」

「ある意味時代を先取りしていたと言えなくも」

「言えないよ。ただの頭悪い勘違いだよ」

「でもひょっとするとですよ？ あなたが会社や学校で『昨日って世界社会正義の日だったんだぜー』と吹聴していたら」

「あやうく赤っ恥かくところだったよ。そんなキャラじゃなくて良かった」

「私はもう手遅れなんですが」

「だろうな。あと君の手遅れな部分は他にもたくさんある」

「でもそんなに知名度の高い記念日ではありませんから、誰も真実に気づかないまま広まっていて、本当に一月二十二日が世界社会正義の日になってしまうかも」

「そんなわけない」

「もっと言ってしまえば、嘘の記念日を知名度が低いものとしてでっち上げれば、それが本当に記念日として定着するかも。なんてエポックメイキングな私！」

「ただの捏造だ」

「今日の晩御飯は確か鯖味噌でしたよね。なら今日は鯖味噌記念日です」

「俵万智か」

「これから毎日記念日を作りましょう。私とあなたが初めてキスした十月三十一日はキスの日とします」

「そういうのがさらっと出てくる君が怖い」

「他にも『同居記念日』とか『手料理記念日』とか『同衾記念日』とか」

「恋人同士のそういうのって痛々しいとしか感じないんだけど」

「素敵だと思いませんか？ 『初体験記念日』とか」

「心の奥にしまっとけ」

「『出産記念日』とか」

「誕生日祝ってやれよ！」

「朝からお腹の調子が……」

「悪いの？ 落ちてるものでも拾って食べた？」

「いえ、すこぶる良いです。それでさっき思いついたことがありますて」

「どうせまた下らない話だろ」

「いえ、むしろ下ったからこそ思い付いた話でして」

「うるさいよ。もう下らない匂いがプンプンしてる」

「はい。ちょっと汚い話になるんですけど、してもいいですか？」

「全く予想を裏切らないなあ。ダメって言ってもするんだろ？ どうぞご自由に」

「えっと、トイレで大きいほうをした後って、お尻拭くじゃないですか」

「ゴメンやっぱダメ。予想を凌駕しそう」

「生理現象をそんな侮蔑しちゃいけませんよ。それで、お尻拭いた後、その拭いた紙って確認しますか？」

「……とうとう寒さでおかしくなっちゃったか」

「む、別にふざけて言ってるわけじゃありません。けっこう本質的な問題だと思うから話しているんです」

「どこが」

「ちゃんと確認しないと拭けてるかどうかわからない、というある種の観測問題ではないかと」

「絶対違うよ」

「で、見るんですか？ 見ないんですか？」

「……見る」

「ですよー！ 私を見る派です！ きゃー！」

「喜ぶな。なんでこんなことでテンション上がるんだ」

「そもそも見ない人っているんでしょうか？」

「いるでしょ。見なくて済むなら見たくないし」

「是非会社の同僚さんにも訊いてみてください」

「やだよ！ なんてわざわざ人間関係に亀裂入れなきゃいけないんだ」

「だって気になるじゃないですか。あのイケメンも、あのアイドルも、トイレでお尻拭いた後ペーパーについたモノをチラ見しているかもしれないと思うと、ね？」

「ね？ じゃない。知りたくもないからそんな現実」

「尻だけに」

「殴るぞ」

「見る派と見ない派、どっちが多いか気になりますね。街角でアンケート取ってみませんか？」

「一人でやれ。ねえ、この話まだ続けるの？」

「だってたぶんまだ未開拓の領域ですよ？ トイレメーカーに進言してみましようよ。お尻がちゃんと拭けてるかどうか確認してくれる機能を付けてくださいって」

「どういう機能だよ」

「ほら、カーナビのバックモニターみたいに、トイレにもお尻が見えるモニターがあれば」

「結局見るんじゃん！ 性犯罪者に悪用される未来しか思い描けない」

「アーナビと名付けましょう」

「最っ低なネーミング」

「今日の晩ご飯は梅干し茶漬けと味噌汁、秋刀魚ですか。なんか純和風って感じでいいですね」

「そう言いつつ梅干しを除けるなよ。お茶漬けの美味しさが半減するだろ」

「だってなんかグジュグジュしてて気持ち悪いじゃないですか。その秋刀魚と交換してくれませんか？」

「等価交換って知ってる？」

「あ.....ちょっと待って。動かないでください」

「え？　どうかした？」

「ほっぺにご飯粒がついてます」

「どこ？　左？　右？」

「取らないで！」

「い、いきなり大声出さないでくれ。びっくりするだろ」

「私が取ってあげますから、じっとしててください」

「いやいいよ、そういうことしなくて。なんか恥ずかしい」

「遠慮しないでください。たまには恋人らしいことしたいじゃないですか。今そっちにいきますから」

「は？　なんでわざわざこっちに来る必要が.....って、おい、腕押さえつけるな。おい、おい、何する気？」

「今取ってあげまふから」

「え、なんで舌つき出すの？　え!?　なんで顔近づけてくるの!?　うわっ、ちょっ！」

「ん、ふう。はい、とれました」

「別に舐めとる必要ないだろ！ デストロイアの幼体みたいな口しやがって！」

「こういうの前からやってみたくて。ドラマの恋人同士っぽくていいじゃないですか」

「いやどっちかって言うとブルー將軍を殺そうとする桃白白っぽかった」

「ちゅっぱちゅっぱ」

「気持ち悪い食べ方やめろ！ ドラマでそんなことしないだろ！」

「なんだか興奮します。なるべく味わって食べないといけませんね。あなたのほっぺについてたご飯.....あなたのほっぺについてたご飯.....」

「うわあ.....」

「どうしてそんな嫌そうな顔するんですか？」

「どうしてそんな意外そうな顔するんだよ。目の前に変態がいれば普通ドン引きするよ」

「別に変なことじゃないでしょう？ 愛し合っているカップルならみんな恋人のほっぺについたご飯粒舐めとってちゅっぱちゅっぱしたいと思ってます」

「お前の性癖を一般常識として広めようとするな」

「私のほっぺのご飯も舐め取らせてあげます。はい」

「食べ物で遊ぶんじゃない」

「むしろ数倍味わえるのに.....。そうです。この方法なら嫌いなものも気にせず食べられるかもしれません。ちょっとほっぺに梅干し貼りつけてみませんか？」

「かぶれる」

髪型

「今日、二月二日はツインテールの日です。というわけで、ツインテールにしてみました」

「うーん、髪が短いせいで全然ツインテールって感じがしない。どっちかと言うとゴモラだよね」

「殴りますよ。ウルトラ怪獣の話してるわけじゃないですし、そこは普通『どんな髪型でも可愛いよ』って耳元で囁いて押し倒すのが彼氏の務めでしょうが」

「そんな業務内容を承諾した記憶はない。実際、髪型で結構印象違うし、似合う髪型とそうでない髪型ってあるだろ。君はツインテール似合わないよ、たぶん」

「では何が似合うと？」

「いつものショートヘアが一番マシじゃない？ 無難だし」

「そこは『一番マシ』じゃなくて『一番可愛い』と言うべきです」

「同じじゃないか」

「極大値と最大値の違いもわからないんですかこの低脳男は」

「自分が極大値か最大値かもわからないのかこの傲慢女は」

「他の誰がなんと言おうと、あなたは私のことを最大値だと思うべきです」

「彼氏で承認欲求を満たそうとするな」

「それが恋愛ってものだと思うんですけど……。まあ話を戻しましょう。あなたにはどんな髪型が似合いますかね？」

「そんなにいろいろ試したことないからわかんないな。男の髪型って女ほどはっきりしたバリエーションないじゃん」

「アフロとかモヒカンとかちょんまげとか」

「似合う似合わない以前のものを引っ張り出してくるな。ある種の象徴的なスタイルだろそいつらは」

「ハゲとか」

「それは髪型というより終着点的な何かだ」

「どんな髪型でも私が可愛いのは変わらないように、どんな髪型でもあなたはあなたですよ……」

「若干ニュアンスが違う気がするしさりげなく自画自賛するな」

「髪型変えるなら今のうちですよ、男の人は。髪がなくなれば型も何もなくなりますからね」

「女も同じだろ、四五十になってツインテールは厳しいぞ」

「似合う似合わない以前の問題になってきますよね。今のうちに歳を取ってからの髪型を模索しておくのがいいかもしれません」

「歳取らないうちに似合う髪型探すのって難しいと思うけど」

「閃きました！ 十代はポニーテール、二十代はツインテールという具合に十年毎に尻尾の数を増やしていくんです」

「バケモノにでもなる気か」

「グリーンジャンボ宝くじの販売が始まりましたね。あなたは夢を買いますか？」

「買わないかな。いきなりそんなたくさんお金が降って湧いても扱いに困るし。君は？」

「気分によりますね。たまたま億万長者になりたいと思ったとき、ちょうどお財布が温かくて、偶然特に買いたいと思っているものがなく、幸いにも宝くじ売り場を見かけた際、店員が爽やかな青年で私に笑顔を向けてくれたら買います」

「うん、まずその条件が揃う確率が宝くじに当たるレベルだろうね」

「そういえばずっと前から不思議だったんですけど、『この売り場から一等が出ました！』みたいな煽り文句があるじゃないですか。一等が出たからって意味ありますか？」

「確率は均等だろうから、当たりやすいつて話でもないよね。やっぱり縁起じゃない？」

「『せっかくだから俺はこの一等が出た売り場を選ぶぜ』ってなるわけですか」

「どっかのコンバット越前みたいに言うな。確かにたくさん選択肢があるように見せかけて、実際は買うか買わないかの二択なわけだけど」

「売る側にとっても意味がない気がします。縁起の良い一ヶ所の収益を上げたところで、縁起良くない売り場の収益が下がるだけじゃないですか」

「普段宝くじを買ってる人を狙った宣伝じゃなくて、買わない人に向けた宣伝なんだよきっと。スーパーとかデパートとか、ふと立ち寄った店の前にそういうノボリが出てたら購買意欲が刺激されたりするんじゃない？」

「百パーセント運で決まるのに、そんなので購買意欲なんて高まるわけありません。それよりも『一億円あったら何ができるか』みたいなことを羅列してあるほうが、私は買いたくなりますね。『うまい棒が一千万本買える！』みたいに」

「うまい棒を作る機械を買え。他にもっと有益な使い道あるだろ。マイホーム購入とか、世界旅行とか」

「普通ですね。せっかくのアブク銭なんですから、もっと無駄使いしましょう」

「どんだけでかい泡だ。無駄使いって例えば？」

「一万枚の一万円札を空から撒いて街をパニックに陥れるとか」

「悪魔みたいな発想やめろ。冗談抜きで暴動が起こる」

「どうしてもお金を必要としてる人だって世の中には存在しますからね。眼下でお金を奪い合う方々を眺めつつ、ほどほどのお金があれば生きていける幸福な自分を再認識して悦に浸るのです」

「お前は本当に人間か」

「うーん、ここにもない。ここにもない」

「何してるの？」

「ちょっと失礼します。……ここにもないですか」

「おい、なんで今ズボンのポケット越しに僕の股間を握った」

「テレビのリモコン知りませんか？ さっきからずっと探してるのに見つからないんです」

「まず目のつけどころがおかしいから。まじめに探せよ」

「隅から隅まで探しましたよ。台所もお風呂もトイレも」

「風呂やらトイレでリモコンをどう使うと」

「そ、そんな恥ずかしいこと言わせないでください……」

「何に使ってるんだお前は」

「しかしこれだけ徹底的に探してないなんて、おかしいですねえ」

「無理矢理話を戻された」

「まさか……泥棒!？」

「なわけあるか。リモコンだけ盗んでいくってどんな泥棒だ。そいつもリモコン無くして困ったとでも？」

「……なるほど。謎は全て解けました」

「何か思い出したの？」

「ふふふ、とんでもない名推理を思いついてしまいました」

「『推理を思いつく』って時点でもういろいろと間違ってると思う」

「リモコンは未来からタイムマシンでやって来た私たちが持って行ってしまったんです！」

「ケータイにリモコンアプリってなかったっけかなー」

「ちょっと！ 私は至ってまじめですよ！ だってそうとしか考えられないじゃないですか！ どこを探しても見つからなくて、かつ今あのリモコンを必要としてる人間って私たちしかいませんもん」

「いつから盗まれたことが前提になったんだ。どっかに隠れてるだけだよ。案外、ポケットに突っ込んだまま洗濯しちゃったとかそういう感じじゃ……って、ホントに洗濯機の中に入ってるじゃん！」

「ええ!? 誰ですかそんなとこに隠したのは」

「君のジャージのポケットから出てきたぞ」

「あー……。いや、ええ、まあ、落ち着いてください。これはきっと、何かの罠です」

「なんでも陰謀論に持ってくんじゃない。案の定壊れてるね。テレビが全く反応しない」

「おお、水に濡れた程度で壊れてしまうとは情けない」

「こいつ洗濯機に放り込んでやろうか」

「仕方ないですね。修理しますか」

「そんな簡単に直せてたまるか。電気屋で取り寄せてもらったほうが早い」

「じゃあ今度は洗っても大丈夫なように、防水機能付きのやつにしましょう」

「残念ながらメーカー側もリモコンを洗濯するようなバカがいるとは考えてない」

「だったら発信器付きのやつに」

「少しは自分で気を付けようと思えよ！」

「今日は久しぶりに街の図書館へ寄ってみました。本でも借りて読もうかと思ひまして」

「ふーん。何か借りてきたの？」

「なぞなぞの本を一冊」

「なぞなぞ？ 予想外に低年齢向けだね」

「これか哲学系の本か迷ったんですけどね」

「どんな天秤でその二つを比較できるんだ」

「単純に今日はこれであなたと遊ぼうと思ったんです。では問題！ エッチになればなるほど硬くなるものな一んだ？」

「鉛筆の芯だろ。ビーが多いと軟らかくて、エッチが多いと硬いからな」

「むう、正解です。さすがに有名過ぎて引っ掛かりませんか。顔を赤らめて恥ずかしがるあなたを見てみたかったんですが」

「キモいわ」

「じゃあ次の問題。エッチをしたあと軟らかくなるものってな一んだ？」

「おいコラ。子供向けのなぞなぞ本にそんな問題載っててたまるか。まともな問題出さないならやめるからな」

「ちえ、わかりましたよ。まったく、なぞなぞくらい素直に楽しんでくれればいいのに……。ちなみに今の答えはちんこでした」

「なぞなぞでもなんでもない」

「では問題、パンはパンでも食べられないパンはな一んだ？」

「今度は簡単過ぎるな。フライパンだろ」

「ブッブー！ 正解はジーパン」

「おい、答えを都合よくすり替えるんじゃない。複数あったらなんとでも言えるだろ」

「甘いですね。人生には無数の答えがあるんですよ。私たちはその中から自分が本気で信じられるものだけを選びとり」

「やかましい。いきなり誰だお前は。別に僕の回答だって間違っていない」

「その安易に出した答えを、あなたは本当に信じられますか？ 端的に言ってしまうと、あなたには苦悩が足りないのです」

「なぞなぞごときにどれだけ精神削り取られなきゃいけないんだ」

「そもそもフライパンは本当に食べられませんかねえ？ 世の中にはフライパンを食べる人間もいるかもしれないじゃないですか。あなたが会ったことないだけで」

「なんだその小学生みたいな煽り。少なくともジーパンよりは食べにくいよ」

「フライパンやジーパン、ルパン、ピーターパン、サムライジャパン、腐ったパン……どれも本当は食べられるかもしれませんが。食べられないパンなんて、この世にはないかもしれないのです」

「そんなこと言い出したらなぞなぞが成立しないだろうが！」

「そう。ですから語り得ないことについては、沈黙するほかないのです」

「結局哲学書借りてきたのかよ！」

どこでもドア

「今日の晩御飯はなんでしょう？」

「カレー、にしようと思ってたけどカレールウがなかったから肉じゃが」

「そう聞くとカレーが食べたくなくなってきました。カレーパウダーとかでなんとか作れませんか？」

「カレー風味の肉じゃがなら。今からルウ買ってきてくれれば作るけど」

「嫌ですよ、外寒いのに。こういうとき一瞬でスーパーまで行けたら……」

「ワープか。小学生のとき登校しながらよく考えたよ」

「もしくはスーパーが歩いてきてくれたら……」

「そんな馬鹿なことはさすがに考えなかった」

「ドラえものの道具で一番欲しいのは断然どこでもドアでしたねえ。今はウソエイトオーオーですが」

「万能系の道具に乗り替えるな。僕はワープできるようになるだけで満足だ」

「どこでもドアがあったら、関税を無視して海外から商品を持ち込めますもんね」

「技術は凄いのになんて小市民っぷり」

「まあ確かにそんなことするなら銀行の金庫や大富豪の家に忍び込んだほうが楽ですが」

「大悪党になれとは言っていない」

「普通に使ったら便利な移動手段にしかないじゃないですか。あなただって女湯を覗いたり女子更衣室に入ったりしたいでしょう？」

「したくないしそれは普通にバレて終わりだ。馬鹿か」

「遊園地に入場料なしで入ったり、電車をただ乗りしたり、嫌いな人間を無人島に置き去りにしたり」

「こいつ今のうちに警察につき出しておいたほうがいいんだろうか」

「もちろん犯罪行為以外の使い方もありますよ」

「例えば？」

「富士山の頂上と麓を繋げば、気圧の差で風力発電できますよね、無限に」

「なるほど。でも永久機関ができちゃうってことは、やっぱり実現は難しいんだろうか」

「この応用で床と天井を繋げば、ドアを開けた瞬間無限の気圧が発生します。空気爆弾です」

「悪魔みたいな技術転用やめろ」

「宇宙とか深海とか、エネルギー的にギャップがある場所を繋げるのは禁忌ですね」

「肝に銘じておく。たぶん役に立たないけど」

「あ、閃きました。どこでもドアを出来杉くんの体内に出現させれば簡単に未来変えられますよ」

「そろそろF先生に謝ろうか」

「あ、おかえりなさい。今日は遅かったですね。メールで言われた通り夕飯済ませちゃいましたけど」

「いいよ。僕ももう食べてきたから。仕事仲間にいろいろ相談聞いてもらってたら遅くなっちゃった」

「自分の彼女が可愛くて可愛くて困っちゃうとか？」

「僕だったら殴るよそんな同僚。そういう相談じゃなくて……うん、君にも早めに知らせとこう。ちょっと、いやかなり大事な話なんだけど」

「え、なんですか改まって。ももももしかしてデキちゃったとか!？」

「何がどうデキるっていうんだ。真面目に聞いてほしいんだけど。……え、何その手。なんで薬指伸ばしてるの？」

「いやぁ、とうとうこの時が来てしまったかと」

「耳まで赤くして一体どの時を期待してるんだ。言っとくけど決して良い知らせじゃないからな。むしろ悪い」

「ま、まさか他に好きな男ができたとか!？」

「そんなわけ——なんで男なんだよ！」

「あなたが私以外の女の子を好きになるなんてあり得ないだろうなあと」

「その自信はどこから湧いてくるんだ。そして男を好きになる可能性は存在するのか」

「私は三人とか四人同時対戦でも問題ありませんよ？」

「君の適応力の高さはわかったから、いい加減本題に移らせてくれ」

「……嫌です。別れ話とか」

「さすがにそこまで悪い話じゃないよ。っていうか、別れ話なんて切り出されるような心当たりあるの？」

「わりとあります」

「だったら反省しろ」

「善処しますから、ずっと一緒に居てください」

「……うん、問題はそこなんだよね」

「はい？」

「実はさ、今日内示が出たんだけど、転勤することになりそうなんだ」

「ああ、痛いですよねぇアレ。でも事前に知れて良かったじゃないですか」

「転筋じゃない。人事課は僕の筋肉の何を知ってるんだ。転勤、職場が別の場所になるの」

「それはまた急な……。近場ですよネ？」

「いや、遠い。だから引っ越さなきゃいけない。君は君の職場があるから、また別々に暮らすことになる。でもって、気軽に会える距離じゃない」

「……………」

「でもほら、別に二度と会えないわけじゃないし、遠距離恋愛っていうのもロマンがあっ
ていいじゃん？」

「……………」

「フリーズしてる。コントロールオルトデリートすべきか。おーい」

「……新幹線って定期券売ってましたっけ？」

「落ち着け」

「退去日も決まりましたし、いよいよ二人で過ごせる時間もわずかになってきましたね」

「あと十日か。あっという間に過ぎそうだね」

「向こうに行っても、週末は顔を合わせましょう。どちらかがどちらかを訪ねる感じで」

「それは時間的にも金銭的にも厳しくないか？ たぶん一ヶ月に一回会えるくらいだと思うけど」

「.....話が変わるようですみませんが、人間の体は一日に二リットルくらいの水が入れ替わってるそうです」

「へえ、そうなんだ。何が言いたいかなんとなく分かったよ」

「つまり、一ヶ月もしないうちに体に含まれるほとんどの水分が入れ替わってしまうのです。一ヶ月会わなければ七十パーセント別人になってしまうんですよ！」

「いや、同一性ってそんな単純なものじゃないと思うけど.....」

「水だけならまだしも、他の有機物的な入れ替わりまでカウントしたら、九十パーセントは別人です。私に残り十パーセントのあなたを愛せとでも言うんですか!? 次の月には一パーセント、次の次の月には十分の一パーセントを愛せとでも!？」

「一回会っただけじゃリセットされないのか。なんか『江戸時代から代々受け継がれた秘伝のタレには創業当初の成分が何パーセント残ってるか』みたいな話になってきたなあ」

「クラスメートの雰囲気夏休み明けに豹変してる、あの気分を味わうのは嫌なんです。清純で引っ込み思案だったあの子は一体どこに！ あんなケバケバしい茶髪ピアス知らない！」

「あれは別に人体を構成してる元素が入れ替わったとかそういう理由じゃないと思うよ」

「周りが知らず知らずのうちに大人になっていくなか、私は一人おぼこのまま.....」

「そんなに生き急がなくていいっていうか入れ替わりの話はどこへ行った」

「おぼこのQ太郎……」

「ふと思いついたことをボソッと口に出すのやめよう。意味わかんないから」

「あなたも一ヶ月後にはまるで別人みたいになってるかも。無精髭生やして、目に生気がなくな
って」

「嫌な予想するなよ。新しい職場が酷いところだったら実際そうなることもあり得るから」

「右手がフックになって、頭に猫耳が付いて」

「僕に何があった」

「三月も半ばを越えて暖かくなってきましたね。雪もだいぶ融けましたし、桜も咲き始める頃でしょうか。そろそろコタツも仕舞ってよさそうです」

「三寒四温なんて言葉もあるから、あと一、二回は気温が冬並に戻る可能性もありえるよ。タイヤ交換はまだ少し早いかも」

「.....その三寒四温の使い方は間違っています」

「え？」

「寒い日と暖かい日が繰り返すって意味で使う人が多いですけど、本来の意味は三日寒い日が続いた後、四日暖かい日が続くって意味なんです」

「へえ、初めて知ったよ。ん？ でも暖かい日が四日続いた後は？」

「また寒くなります」

「結局繰り返してるじゃん。僕の使い方でもあってるじゃん」

「繰り返すだけなら二寒三温でも四寒五温でもいいでしょう」

「あー、確かに数字に意味を持たせるなら本来の使い方じゃないとダメっぽい.....」

「少し納得いかないところがあるのはわかります。『暖かくなる』なら三寒四暖と言うべきです」

「それはわりとどうでもいい」

「一つ賢くなりましたね。これで今後恥をかくこともないでしょう」

「けど三寒四温は僕が言った意味でも一般に通じるからなあ。一概に恥をかくとも言えないんじゃない？ 指摘が嫌味に取られることもあるだろうし」

「間違いをおざなりにしてはいけません」

「おい、おざなりの使い方間違ってるぞ。『間違いをその場しのぎにする』って意味わかんないだろ。正しくはなおざりじゃない？」

「.....」

「間違いをなおざりにしちゃダメだよね」

「.....とにかく、言葉というものはすべからく正しく使わなければならないのです」

「おい、すべからくの使い方間違ってるかい？ 『全て』って意味で使ったなら違うぞ」

「.....もちろんちゃんとした意味で使いましたよ」

「じゃあすべからくってどういう意味？」

「えっ？ えーっと、スベスベしてて辛い」

「未知の感覚を作るな。当然ナニナニするべきって時に使うんだよ」

「そ、そのくらい知ってます。ボケただけです。確信犯です」

「確信犯の使い方も間違ってるぞ」

「.....言語は日々変遷していくもの。私たちが間違っていると思っている使い方も、言語ゲームにおいては当たり前の現象です。その流れに棹をさすような真似は無意味かもしれませんね」

「流れに棹をさすの使い方.....もういいや」

ベッド

「せっかく春分の日でお休みだっているのに、忙しそうですね」

「引っ越しの荷造りが思ったより大変でさ。思ったより荷物ってあるもんだね」

「荷造りより子作りしましょうよ」

「手伝ってくれとは言わないから、せめて黙っててくれ。いらない家具も捨てなきゃいけないな。特にベッドとか」

「えっ、あの小綺麗なベッド捨てちゃうんですか？ もったいない……」

「社員寮に備え付けのやつがあるみたいだし、折り畳み式じゃないから引っ越しのとき邪魔になるんだよ。だったらもういっそ捨てたほうがいいかなって」

「いたずら書きみたいなのありましたけど、結構昔から使ってるんじゃないんですか？」

「うん、たぶん小学生のときからこれで寝てたね。二十年近く、よく使ったもんだよ」

「そんな長きに渡ってお世話になった家具をよく『邪魔になった』なんて理由でポンと捨てられますね。大量消費社会の麒麟児ですか」

「変な渾名つけるな。むしろ物持ちいいほうだろ」

「可哀想なベッド。私も他人事ではない気がしてきました。十年くらい一緒に過ごしたらある日突然捨てられるんじゃ……」

「物持ちいいほうだって言ってるだろ。ベッドだってもちろん愛着がないわけじゃないさ。でも結局いつかは捨てなきゃならないし、床板も傷んできてるみたいだから、怪我する前にね」

「では捨てる前に、あのベッドの上で」

「却下だ」

「まだ全部言ってませんけど」

「どうせろくでもない提案に決まってる」

「ほら、今ってちょうど卒業式の時期じゃないですか。ですから童貞卒業式しましょう」

「予想以上にろくでもなかった。ベッドの話はどこ行ったんだ」

「ですから、ベッドにあなたの童貞卒業姿を見せてあげるべきだと思うんです」

「ごめん、日本語で喋ってもらえるかな？」

「ベッドの気持ちになってみてください。あなたを子供の頃から、中学、高校、大学、社会人とずっと見守ってきた私——けれどもう家具としての寿命を迎えようとしている。ああ、せめてあの子が童貞を卒業するまで生きていたかった……」

「君の想像力が豊か過ぎてついていけない。ベッドがそんなことを考えてるなら一刻も早く捨てるべきだ」

「叶えてあげましょうよ、その願いを。小さい頃からずっと一緒に寝てきた男の子が、自分の上で男になるなんて、寝具冥利に尽きると思いませんか？」

「手伝えとは言わないからせめて黙ってろと」

「引っ越し屋さんが来たらなんだか一気に閑散としちゃいましたね」

「一人分の持ち物がなくなったわけだからね。１ＬＤＫだし、まあがらんとするだろう」

「これでしばらく会えなくなるわけですか」

「うん。いつまでかわからないけど……寂しい？」

「明日から私は誰に向かってボケればいいんですか」

「壁にでも向かってボケてろ。電話すればいいだろ。IP電話なら映像付きだし」

「それでも笑いの幅は狭まりますよ。ボディタッチ系は不可能ですし、パソコンの前ですからモノボケも難しいとききました」

「えっと、遠距離恋愛するんだよね？ 遠距離漫才じゃないよね？」

「恋愛についてはもう悩んでも仕方ないかなと。離れていても繋がってますよ、通信回線で」

「なんて物理的な絆」

「実際こんな時代でなければ二人ともさっさと別の恋人作っちゃいそうです」

「そんなことないよ！ 僕はないよ！」

「私もあり得ませんよ、たぶん」

「確約しろ」

「愛は約束の上ではなく、信頼の上に成り立つものです。あなたは私を信じてください。私はあなたを信じますから」

「お、おう、なんか良いこと聞いた気がする。――さて、この町ともお別れだし、せっかくだから外に美味しいものでも食べにいきましょうか。奢るよ」

「じゃあ私ブランド牛のしゃぶしゃぶで」

「やっぱ自腹切れ。そういうのが食べられるところにはいかない。普通にラーメン屋とか」

「は！ 美味しいもの食べに行こうっていったいてラーメンですか。低層民ですこと」

「置いてくぞコラ。ラーメン美味しいだろうが」

「確かに美味しいですけど、私はあなたの手料理が食べたいです」

「あー、別にいいけど、マイ調理セット送っちゃったから大したものできないよ。何食べたいの？」

「ブランド牛の……」

「結局素材次第じゃねえか！」

「あなたの料理ならどんなブランド牛でもおいしいですから」

「だろうな！」

マヨネーズ

「おお、ビデオ通話成功。1 日ぶりのご対面ですね」

<思ったより綺麗だね>

「離れて初めて気づくなんて、馬鹿な男です」

<映像の話だ馬鹿女>

「ところでなにやらおいしそうなもの食べてますが、なんですかそれ？」

<レバニラと麻婆春雨。君は晩御飯なに食べたの？>

「インスタントラーメンです」

<.....僕がいなくなった途端不摂生になるなよ。ちょっとは自分で料理しなって。ラーメンはおいしかった？>

「もちろんおいしかったですとも。さすがチョコボが宣伝してるだけあります」

<チキ○ラーメンのあいつは似てるけど関係ない>

「卵とマヨネーズ入れて食べると絶品ですね。とりあえずマヨネーズ入れとけばなんでもおいしくなります」

<君ってマヨラーだったの？>

「そのまま飲むようなことはしませんけどね。私の中のキングオブ調味料、ベストオブ調味料です。その麻婆春雨もマヨネーズを入れれば絶品になります」

<ならないよ。分離するよ>

「騙されたと思ってやってみてください。おいしかったら私も今度やってみます」

<前人未踏じゃんか。僕を実験台にする気満々じゃんか>

「おいしいと分かりきっているものばかり食べていたら進歩はありません。食の発展のためにはそういった冒険も必要なんです」

<必要ない。これで料理として完成してるんだから>

「確かにあなたの麻婆春雨はそれで完成かもしれません。でも実はそこに一味足すことで画竜点睛、新しい扉が開く可能性もあるわけじゃないですか」

<それで僕の料理が台無しになったらどうしてくれるんだ。むしろそのつもりだろ。僕だけ手の込んだ料理食べてるから羨ましいんだろ>

「とんだ被害妄想ですね。それと私を馬鹿にするのは構いませんが、マヨネーズを馬鹿にするのはやめてください」

<その唐突なマヨネーズへのこだわりはなんなんだよ。今までそんな描写なかっただろ>

「設定もマヨネーズも後付けが基本でしょう？」

<その説明でなにをどう納得しろと。うまいこと言ったみたいな顔するな>

「そもそもマヨネーズという名前はですね、『味付けに迷わねえず』から来てるんです」

<嘘だろ。なんで訛ってるんだ。フランス語だぞマヨネーズ>

「ああいや、もちろん別の説もあるんですけどね。元々はマヨという名前だったんですが、サラダにマヨがかかっていないことを怒ったフランス国王ルイ十四世が『おい、マヨ無えず！』と叫んだことから」

<だからなんで訛ってるんだよ！>

変な名前

「この前テレビを見てたらですね、面白い名前の動物が出てたんですよ」

＜ふうん。変な名前してる生き物ってわりとたくさんいるけど、どんなの？＞

「ネズミキツネザルです」

＜なんだ。わりと普通じゃん＞

「普通じゃありませんよ。例えば最近よく話題にあがるハダカデバネズミとかでしたら、毛がなくて出っ歯なネズミなんだなあとすぐに分かります。でもネズミキツネザルって……結局ネズミなんですか？ キツネなんですか？ ザルなんですか？」

＜少なくともザルではないだろう。ネズミみたいでキツネみたいなサルだからネズミキツネザルなんじゃないの？＞

「でも見た感じキツネ要素はどこにもありませんでしたよ。ネズミ七割サル二割ザル一割くらい」

＜無理矢理ザルを入れてくるな＞

「どうしてあんな名前なのか、納得できません」

＜たぶん遺伝子的にはサルだけど、どこかしらキツネっぽいキツネザルの親戚で、その小さいバージョンだからネズミキツネザルになったんだよ＞

「要するに、血縁的には山田さんの子供ですが、どこことなく佐藤さんっぽくて、その低身長は田中さん一家に特徴的な体格、みたいな感じですか」

＜要せてない。人間で例えたら逆に分かりにくいよ。田中佐藤山田ヒロシ、とはならないんだから＞

「私たちに子供ができて名前を付けるとしたら、そういう方法でもいいかもしれませんね」

＜よくないから。キラキラネームとか言って最近いろいろ個性的な名前増えてるけど、そのネーミングはさすがにない＞

「あなたの子供であるはずが何故かはす向かいに住んでいるお兄さんに瓜二つだった場合」

＜うん、それはネーミング以前に君が犯してはならない過ちに手を染めている可能性が高いんじゃないかな。笑えない展開やめてね？ 一部の特殊性癖を持つ人たち以外望んでないから＞

「ザビエルに似ていた場合」

＜中学校の教頭先生が同じ目にあってたのを思い出す。外見で名前つけるのやめろ＞

「顔が福山雅治さん似で胴体が速水もこみちさん似、手足が北島康介さん似だったら」

＜結局僕には欠片も似てないのか。なんだその遺伝子組み換えして意図的に作り出したような...
...産まれたばっかでそんなムキムキってありえない!?＞

「雅ち治康みもこ介、とでも命名しましょうか」

＜なんだガチハルヤスミモコスケって。無理矢理意味が通りそうなふうに合成するな＞

「キメラキメラネームですね」

＜黙れ＞

「画面の端からチラチラ見えるんですが、なんだか最近お部屋が汚れてませんか？　ちゃんと掃除してます？」

＜ああ、気づかれたか。実はこのところ忙しかったり、部屋があんまり広くないから物を移動できなかったり、夜に帰ってくると掃除機かけられなかったりで、しっかり掃除できてないんだよ＞

「ダメじゃないですか。私がそっちに行って掃除してあげましょうか？」

＜気持ちはありがたいけど、片道何万もかけてすることじゃない。暇を見つけてやるから大丈夫。そういう君の部屋は意外にもキレイだね。ちゃんと掃除してるんだ？＞

「いい大人なんですから、掃除くらいできて当たり前です」

＜ペットボトルとカップ麺の残骸の中で寝てたやつはどこのどいつだ＞

「昔の話です。私は今あなたとの結婚生活に向けて着々とスキルアップしているのですよ。まるで進研ゼミ花嫁講座でも受けているかのよう」

＜なんだその勉強も部活も恋愛も全て上手くいきそうな講座＞

「今入会すればもれなく『嫁入り道具一式スピードマスター』がもらえます。これであなたも家事の達人に」

＜それ絶対ショボくれたケータイゲーム機だろ。そんなので家事が上達できたら苦労しないよ＞

「もちろんこれらを有効活用するには『家事育児ニガテ克服ノート』を使いながら、実践する必要があります」

＜家事はともかく育児はどうやって実践するの？＞

「そんなときのための赤ちゃん先生です」

＜赤ペン先生っぽいの出てきた。赤ちゃんの心理に基づいた評価みたいなの？＞

「いえ、赤ちゃんがクール便で送られてきます」

<完全に警察沙汰だよ。なんでわざわざ冷やすんだ>

「仮死状態のほうが長持ちするので」

<君みたいなやつには実践云々の前に育児の資格自体がないよ>

「仮死状態にある乳児の蘇生……ふっ、昨日進研ゼミでやった問題ですね」

<なんかウザいんだけど>

「他にも結婚生活に関わるあらゆる知識が網羅されています。例えば炊飯器が初めて製品化・発売された年は1955年。『1955（いつくうごはん）炊飯器』と覚えてください」

<その知識が役に立つことはおそらく永遠にない>

「とっておきは『結婚生活要点まとめシート夜の部』。疲れにくい体位、男の人が喜ぶセリフ、自然な喘ぎ方など夜の花嫁知識を完全レクチャー」

<生々しいのはやめろ。怖いから。夢が壊れるから>

「そして驚くべきことに、一日十五分でいいんです」

<なんの時間だ>

「今日は久しぶりに映画館に行ってきました」

<映画？ 友達と？>

「いえ、見たい映画は一人で見えるタイプです。なので一人で」

<君ってそういうの平気だね。一人ラーメン屋とか一人カラオケとか>

「別に映画なら気にすることもないと思いますが、私ほどのレベルになるとあたかも隣にあなたがいるかのように振る舞うことができます」

<怖いよ。はたから見ても完全に変人だろうね>

「映画を見た後はスイーツを食べにファミレスへ。店員に二名ですと告げ、アイスを二人分頼みました」

<見栄をはるな。おしぼりもお冷やももったいない>

「そしてアイスをあなたにあーんしてあげるかと思いきや自分の口へ」

<一人フェイントはさすがに意味がわからない。なんであの女はいちいち大仰な動作でアイス食べてるんだってなる>

「デザートを終えたらそろそろ日が暮れ始めます。あなたの腕に手を回し、今日の夕食はなににするかなどを相談しつつ帰路につきました」

<不自然な体勢で虚空に向かって何事かを呟きながら歩いてくる人間がいたら僕は逃げるよ。警察呼ばれるぞ>

「私ほどのレベルになると周りの人たちにもあなたが見えるようになるので大丈夫です」

<もうパントマイマーを目指せ。本当にそれで食べていけるよ>

「道行く人々が私たち二人を『見て！ なんてベストカップルなの!?』とばかりに指差してきますからね」

<そんなポジティブな感想は持たれてないよ。ホントに大丈夫？ 寂しさのあまり壊れてきてない？>

「元からです」

<それはそれで問題だ>

「でもこれで何度かナンパを撃退してますから。あなたの幻影に抱きついて頬擦りし『彼とデート中なので邪魔しないでください。ほら、あなたも何か言ってあげてくださいよ』なんて言えばみんな逃げていきます」

<だろうね。僕もそんなやつとは絶対お近づきになりたくない。なっちゃってるけど>

「では、私はこれからあなたとベッドインするので」

<僕はここにいるぞ。病みすぎだろ>

「ああ、そうでした。まずいですね。早く一緒に暮らしに戻らないと、幻のあなたと幻の結婚をし幻の子供をもうけて幻の家庭を作り上げてしまいそうです」

<確かにそのうち想像妊娠とかしそうだな。まずその妄想癖をどうにかしないと>

「うう、あれは幻.....あれは幻.....。幻.....？ あれ？ 実は全てが幻かも.....？ このアパートも目の前の画面に映るあなたも、あなたと過ごしたあの日々すら全て、本当はなかった.....？」

<今度は疑い過ぎだ。限度ってものを知らないのか>

「そしてこの全てを幻かもしれないと疑っている私の思考だけは、幻じゃない.....!？」

<何かに覚醒するな>

爆弾低気圧

「今日はずっと雨でしたね。あなたのほうは昨日あたり凄かったんじゃないですか？」

<うん、春の嵐とか爆弾低気圧とかニュースでも言ってたけど、まさしくそんな感じだったよ。傘壊れちゃったし>

「ちょっと鼻声ですよ？ 大丈夫ですか？」

<ああ、びしょびしょになっちゃったせいか、風邪気味でね。鼻以外は別に具合悪くないから心配なくていいよ。薬も飲んだし>

「まったく……こじらせるのは童貞だけにしてくださいね」

<うるさい。童貞って言いたいだけだろ>

「……ツッコミにキレがありませんね。いつになく血圧が低そうです」

<そう？ 元々そんなキレのあるツッコミしてないと思うよ>

「うーん……やっぱりテンション低いですよ。爆弾低血圧ですか」

<なんだその高いのか低いのかはっきりしない血圧>

「何気ない日常の中で突然倦怠感や目眩や頭痛が発生する現象のことです」

<君が今考えただろ>

「特に嫌なことがあったわけでもないのに、『生きることになんの意味があるんだ……』とか『本当に自分は今のままでいいのか……？』とか考えて途方に暮れてしまったり、それが元で死にたくなったり、ペシミズムから抜け出せなくなったりしたら爆弾低血圧です」

<確かにそういうことたまにあるけど……ただの鬱とは違うの？>

「爆弾低血圧は外的な発生理由を持ちません。ふとしたネガティブ思考がさらなるネガティブ思考を呼ぶ負のスパイラル。思春期や人生の停滞期によく発生します。これを解決するには爆弾低血圧と相反する亜熱帯高血圧をぶつけるしかありません。つまり私ですね」

<どんどん新しい言葉を作るな。あと今さらだけどテンションは血圧の高低に比例しないと思う>

「ちっちちっ」

<ウザい。その指をふる動作ホントにやるやつ初めて見たよ>

「あなたの場合、低血圧の結果としてテンションが低くなっているのかもしれませんが。しかし私の場合その逆。ハイテンションの結果として高血圧になっているのです」

<なるほどね。塩分の取りすぎとか動脈硬化と違って健康とは無関係な高血圧か>

「むしろ身体が活性化されて健康にいいのでは？ 笑う門には福来ると言いますし。ハイテンションを保つことによって健康すら保ってしまう……これが受動的に生きている人間と能動的に生きている人間の差ですね！」

<ドヤ顔するな。……なんか頭痛くなってきた>

「大丈夫ですか？ なにかお手伝いできることがあれば、あなたと違って能動的に人生を歩む私になんでもお申しつけください！」

<とりあえず黙っててくれるかな>

「今日はうちの職場に新人ちゃんが配属されてきました」

<ああ、新人研修も終わってそろそろ配属か。懐かしいね>

「つい若かりし頃の私を思い出してしまいました。あの時の先輩にならって、私も社会の厳しさを彼女に教えてあげなければいけませんね。お昼ご飯にパシってもらいましょう」

<君みたいなのがいるから新入社員の離職率が上がるんだな>

「冗談ですよ冗談。そういえば、新しい職場ではもう名前覚えてもらいましたか？」

<ああ、名札付けてるから間違えられることも忘れられることもないよ。君は？ 新人の名前間違えずに言える？>

「うちは名札とかないので、自然と間違えたり忘れたりしちゃいます。顔と名前が一致しないのは日常茶飯事です」

<そういうときどうするの？ 会話してる相手の名前を忘れたときとか、周りの人に訊くわけにもいかないでしょ？>

「普通に本人に向かって訊きますよ。副社長って名字なんでしたっけ？ と」

<上司の名前忘れんな>

「間違える間違えない以前に、未だに名前を知らない人がいますね。ものぐさなもので……」

<ものぐさとか以前の問題だろ。社会人の自覚あるのか>

「いや、名前がわからなくても仕事上なんら支障がないんですよ。そもそもの話、名前って必要ですか？ この会話でだってあなたの本名、一度も呼んだことはありませんし。あなたも私の名前を呼んだことないでしょう？」

<二人で会話するなら区別しなくていいけど、仕事頼んだり頼まれたり、事務仕事とかなら絶対必要だよ>

「うちは役職で呼び合うんです。副社長は副社長、専務は専務、平社員は平社員」

<区別つかないだろ。平社員なんて一人しかいないわけじゃあるまいし>

「でも困ったことないです。むしろ人事の入れ替わりがあったときとか助かります。人間が変わっても副社長は副社長ですからね。いくらでも替えがきく歯車みたいな感じがしていいでしょう？」

<やだよ、なんだその病的な滅私奉公精神。まるで人間が会社のためにしか存在してないみたいじゃん>

「はあ、何を甘ったれたことを……。仕事というのは自分のためにすることじゃありませんよ。社会人の自覚あるんですか」

<……正論だけどなんだろうこの、こいつにだけは言われたくない感。自分のためって人もいいだろ。お金稼がなきゃ食べていけないんだから>

「そんなことだからあなたは左遷されるんです」

<左遷じゃねえよ>

パスワード

「昔使っていたSNSを久しぶりに再開しようとしたら、パスワードを忘れてました」

＜入れなかったの？＞

「まあ今回は登録してたアドレスにメールを送ってもらってことなきを得たんですが、あまり使わないウェブサービスなのでまた忘れそうです」

＜パスワードなんてどこかにメモしとくわけにもいかないもんね＞

「はい。そこでもっと忘れにくいパスワードにしようと思うんですけど、なにか良い案ありませんか？」

＜今までのやつはどんなのだったの？ もう使わないなら参考までに教えてよ＞

「aaaaaaaaa」

＜適当か。それでよく忘れられたな＞

「試しに登録してみて、後から変更すればいいと思ってたので……。それっきり忘れちゃってました」

＜気をつけなよ。乗っ取られて知らないうちに犯罪行為に使われたら大変だぞ＞

「悪用されるとは限りません。社会奉仕に使ってくれるかも」

＜クラッキングする時点でそいつに善意なんてないよ＞

「会話中に突然機嫌を損ねて不親切になる人とかいますけど、あれはアカウントを乗っ取られていたわけですか」

＜それは君がなにか粗相をしたんだと思う＞

「そのものズバリpasswordとか、誕生日とかもよくないって言いますよね」

＜うーん、やっぱり自分だけが知ってる忘れられない言葉がいいと思う。誕生日とかの数字をバ

ラバラに紛れ込ませれば結構セキュアな文字列になるんじゃない？＞

「なるほど。じゃあ『gachiharuyasumimokosuke』に」

＜なんでそれが出てきた。長すぎて登録できないだろ。あと僕にも教えちゃダメだから＞

「私たち二人の名前と各種記念日を組み合わせるとか」

＜パスワードだから別にいいけどさ、そういうのってメールアドレスを自分と恋人の名前組み合わせで作るのと同じバカップル感があるよね＞

「バカップルの自覚なかったんですか？」

＜えっ、あっ、うん＞

「よし、これで行きましょう。私に関することをキーワードにすると特定されそうですから、あなたに関する事で、かつ私しか知らないことを組み合わせればいいんです」

＜例えば？＞

「あなたの背中にあるホクロの数とか」

＜なんかマニアックだな……。確かに僕は知らないけど＞

「肛門のシワの数とか」

＜消え失せろ変態＞

「わっ、アカウント乗っ取られました？」

＜うるせえ黙れ＞

「つかぬことをお訊きしますが、あなた、冷蔵庫の上に電子レンジって置いてますか」

＜え？ ああ、部屋があんまり広くないからそこに置いてるよ。冷蔵庫の上って案外いろいろ置けて便利だよ＞

「あー、それはまずいですね。可綴的速やかにやめるべきです」

＜なんで？ ひょっとしてレンジの発熱で冷蔵庫が壊れるとか？＞

「いえ、運気がダウンするそうです、風水的に」

＜風水かよ。君、意外にそういう神秘的なこととか信じるほうなの？ 占星術とか血液型占いか＞

「お金払ってまでやってもらいたいとは思いませんし基本信じませんが、結果が良ければ信じます」

＜虫が良すぎる＞

「朝番組の占いコーナーはいい結果が出るまでいろんなチャンネルを回します」

＜それは何位で妥協するの？ 最後に悪い結果が出たら嫌だろ？＞

「そこが難しいんですよ。五位くらいまでならギリギリ許容範囲なんですけど、六位とか七位ですと裏番組ならもっといい順位かも……とか考えてしまって。それで良くなる場合もあれば悪くなる場合もありますから、一種の賭けですね。まあ悪くなった場合は信じません」

＜楽しそうな人生だね……＞

「で、風水によりますと、電子レンジは『火の気』、冷蔵庫は『水の気』を持つために、お互いに反発し合って気の流れを悪くするそうです。そのままの状態だとなにか悪いことが起きるかもしれません」

＜悪いことって例えば？＞

「冷蔵庫が壊れるとか」

<うん、それはつまり電子レンジの熱で冷蔵庫が壊れちゃうって言いたいんだよね。風水でもなんでもないよね>

「いえ、熱ではなくて『火の気』です。気の流れです」

<オッカムの剃刀振るいたくなるような言説やめろよ。よくわからない概念持ち出してくる必要ないだろ>

「説明しましょう。気とは目に見えない不思議な力の流れであり」

<論理的な説明は求めてない。さっきも言ったけど部屋が狭くて他に置く場所ないからさ。仕方ないんだって>

「その場合は水の気と火の気を遮断するために、電子レンジと冷蔵庫の間に木の板などを敷くといいそうです」

<だからそれ風水じゃないから！ 気とか関係ないから！>

「ちなみに金運も下がるそうです」

<そうそう、そういうのが風水だよ。って、なんで納得してるんだ僕は>

「冷蔵庫が壊れて余計な出費が発生するかも」

<結局唯物論じゃねえか！>

「新人ちゃんがなかなか会社に馴染んでくれません。どうすればいいと思いますか？」

<新人ちゃんって、いつだったか名前を覚えられないとか言ってた子？>

「はい。大卒で入ってきた子で、すごく大人しくて見た目は真面目な感じなんですけど、他の社員と全く会話しないんです」

<最初のうちは仕方ないよ。今は無理でも時間が解決してくれるんじゃないかな>

「まあコミュニケーションに関しては私も似たようなものなので、まだいいでしょう」

<よくない。君は先輩なんだからしっかりしろ>

「最初のうちは仕方ないですよ」

<君はもう最初じゃない>

「時間が解決してくれますよ」

<前言を撤回する>

「私の話は置いて、彼女、会話どころか打ち合わせとか雑務の当番とかも当然のようにサボるんです」

<うーん、それは会社に馴染むとか以前に社会に馴染んでないレベルだな。ちゃんと基礎から教えてあげないと>

「そうですね。まあ私もたまにサボるんでそれもまだいいでしょう」

<よくねーよ。その新人って君のことじゃないよね？ たちの悪い叙述トリックじゃないよね？>

「違いますよ。彼女、分からないことがあるときですらなにも訊いてこないくらいの無精者ですから。いくら私だって質問くらいはちゃんとしますよ」

<ああ、たまにいますねえそういう人。うちの場合は上司だけど、分からない作業を分からないままにして放っとくんだよね。それで後になってそこを直すために全員で右往左往するっていう。でも新人だったらまだ修正が利くからいいじゃん。上司は悲惨だよ、うん、ホントに>

「修正利くんですかねえ？ 放置というか、放棄しちゃうんですけど、仕事」

<君の手に終えないならもう上に相談したほうがいいと思うよ。それで彼女がどう転んでも仕方ない。冷たい言い方だけど自己責任だろ>

「私は他人のことも言えないので。軽い気持ちで相談なんてしたら『じゃああなたもついでにクビね』とか言われかねません」

<自己責任だろ>

「クビになったら養ってくれますか？」

<わざわざダンベル背負って歩きたくないよ。そんなに困ってるなら、まずは君が変わったら？ 彼女も先輩である君を見て『あんなんでもいいんだ』って思ってるのかもしれないし>

「実際こんなんでもやってこれましたから」

<お前は一度路頭に迷え>

「はあ、これからはこんなんじゃダメってことなのでしょうね。……わかりました。私、変わります！」

<いいぞ、その意気その意気>

「らい」

<来週からはナシ>

ちんちんかもかも

「明日からゴールデンウィークですね。ああ、早くあなたとちんちんかもかもしたいです」

<.....恋人同士の仲が良い様を表す言葉だとはわかってるけど、君が言うと卑猥にしか聞こえない>

「誰がどう言っても卑猥にしか聞こえませんよ、ちんちんかもかも。だってちんちんかもかもですよ？」

<うん、わかったからあんまり連呼しないで>

「ああ、早くあなたのちんちんかもかもしたいです」

<助詞を変えるな。『の』じゃなくて『と』だろ>

「ちんちん、かもかもしたいです」

<読点を入れるな。さっきから品がなさ過ぎるぞ>

「ではお上品に。おちんちんかもかもしたいです」

<むしろ下品>

「まったくどういった由来でこんな言葉が存在するんでしょうね。まあ、ちんちんはわかりますけど」

<わからないよ。そこで区切るって勝手に決めつけるなよ>

「かもかもは一体なんのことでしょう？ 字面からはこう、何かを口に入れてモゴモゴしてるような印象を受けますが.....」

<やめようこの話題。何かをって、先に答え言っというて白々しいにもほどがあるよ>

「ちんちんが男性器のことだなんて一言も言ってません」

<今言った>

「なんでもすぐ下ネタにもっていきたがる……これだから男の子は」

<その言葉は全力で打ち返す>

「本題に戻りましょう。かもかもとはなにか」

<戻らなくていい>

「かもかも……これはかもしれないの上にかもしれないが重なった、いわゆる二重推測文ともとれます」

<それっぽい用語をでっち上げるな。ないからそんな文法>

「つまりちんちんかもかもを略さず言うならば、『ちんちんである可能性がなきにしもあらず』」

<何の判断にそこまで慎重なんだ。それが恋人同士の仲の良さを表す言葉になるっておかしいだろ>

「この言葉を作った人は恋人とそういう状況に陥ったんです。『あれ……なんだろうこれ。ソーセージみたいな、ウインナーみたいな……ひょっとして、ちんちん……かも……かも?』みたいな」

<どんな状況だ。ちなみに今調べてみたら、ちんちんは『ヤカンがちんちんに沸いてる』とかのちんちん、熱々って意味で、かもかもは『かくも』を調子良く繰り返したらしい>

「何者かの手によってどこかで歴史が歪められたようですね。本当の由来はおそらく彼氏と目隠しプレイをしていたとき、いきなり口の中に侵入してきたビクビクと脈打ち匂い立つ熱々で棒状の」

<おやすみ>

衝動買い

「私としたことが、今日久々に衝動買いというやつをしてしまいました」

＜美味しそうなお菓子でもあったの？＞

「そんな小市民レベルの衝動じゃありません。あなたと一緒にしないでください」

＜いままさに君を殴りたい衝動に駆られた＞

「そうそう、そのくらいの衝動です。ことの始まりは、新しいマウスパッドが欲しいなあと思って、珍しく電気屋さんに行ったところからでして」

＜ああ、家電量販店はワクワクする店ベストスリーに入るよね。いろんなコーナー見て回るだけで楽しめる＞

「特にルンバをいじり回すの楽しかったです。ひっくり返して動けなくしたり」

＜悪魔か。店の商品に何してるんだ。もしかしてルンバ買ったの？ 1K住みのくせに？＞

「違いますよ。そんな無駄遣いしません。いくら衝動買いでも、役に立つかどうかくらいは計算します」

＜計算した上での衝動買いって、やっぱり大した衝動レベルじゃないじゃん＞

「そこは私が冷静だったと誉めてほしいところです」

＜もう何が評価基準なのかわからないよ。それで結局何買ったの？＞

「電動歯ブラシですね」

＜あれ、思ったより普通だった。いくら？＞

「一万円もしませんでした」

＜お前は歯を磨く前にまず金銭感覚を磨け＞

「だから衝動買って言ったじゃないですか。それだけの魅力がこの歯ブラシにはあって――超音波の力で汚れを根こそぎ落とすんです」

<思ったより普通だ。君が何に惹かれたのか分からない>

「磨いてみたくないですか？ 気持ちよさそうじゃないですか？」

<そこまででもないな。もっと他の売りは？>

「なんとこれ、プラズマイオンが放出されるんです」

<そんなもん口の中で発生したら大変なことになる>

「ああ、マイナスイオンの間違いでした」

<いい加減か。今どきマイナスイオンっていうのもズレてる感じがするけどなあ。科学的に実証されてもいないし>

「なんでもかんでも実証実証って、ウィーン学団ですか。プラシーボ効果が発揮されればいいんですよ」

<思い込みを積極的に活用するやつ初めて見た>

「それに歯ブラシだからって歯磨きだけに使う必要はないでしょうが」

<他にどんな用途があるのか教えてほしい>

「そ、そんなこと教えませんよ。この変態！」

<変態は紛れもなくお前だ>

プライド

「新人ちゃんに関する驚くべき事実が判明しました」

＜何をやってもお咎めなしの理由、わかったの？＞

「はい。今日とうとう何もしない新人ちゃんを社員の一人が怒鳴りつけまして、そしたらお昼休み、上司にドナドナされていきました。新人ちゃん、なんとうちのお偉いさんの姪っ子だったんです」

＜うわぁ、ベタだなぁ。そんな作り話みたいなこと本当にあるんだね＞

「怒鳴りつけたらドナられるなんて」

＜やかましい。言ってる場合か＞

「どうでしょう？ 今のうちに彼女に優しくして株を上げとけば出世できますかね？」

＜君って主人公には絶対なれないタイプの人間だよ。なんの恥ずかしげもなくよくそんなセコいことを……＞

「柔軟な態度と言ってください。世間の荒波に逆らおうとしても無駄に体力を消耗するだけです。こういうとき毅然とした態度を取る人って、要はプライドが高いだけでしょう？」

＜ものは言いようだな。っていうか君も十分プライド高いほうじゃん＞

「まさか、私ほど腰の低い人間も珍しいですよ。ヤンキー座りくらい腰低いです」

＜そのたとえば全然腰低く感じない＞

「私なんて正直ドラマだったら毎回チラッと出てきてチョコッと喋るモブキャラがいいところですよ。それで『いつもチラッと出てくるあのモブの娘可愛いよなレギュラー化すればいいのに』って視聴者の男子たちに噂されるのが関の山です」

＜その関の山、標高三千メートルくらいあるだろ。十分プライド高いよ＞

「あなたみたいなうだつの上がらない男で満足してる時点で大したプライドじゃないです」

<たまに人の心を移植鰻で挟むような発言するよね君って>

「さあ、明日から彼女にどう取り入ってあげましょうか。手始めにお茶とお菓子を差し入れてあげましょう」

<なんてあからさまな変わり身……。下心見え見えだ>

「人間関係に下心はつきものですよ。自己優先の精神から抜け出そうとしてもロクなことありません。利用し利用されるのが理想的な人間関係なのです」

<君に友達ができない理由がわかった気がする>

「失敬な。友達いないいいないって言いますけどね、表面上の友達ならたくさんいますよ！」

<何を豪語してるんだ。自慢にならないよ>

「でもなんとなくですけど、あの新人ちゃんは私と同類な気がするんです。もしかしたら、私の初めての友達になってくれるかも……」

<…………>

「気軽に晩御飯をご馳走になれる、そんな友達に……」

<君にとって友達ってなんだ>

ぐっすり

「おかえりなさい」

<ただいま。あー、今日も疲れた。ご飯食べて風呂入ってぐっすり寝たい>

「ん、ぐっすり……？」

<え？ 僕何か変なこと言った？>

「いえ、ふと『ぐっすり』ってどうしてぐっすりなのかなあと思ひまして」

<言葉の成り立ちってこと？>

「まあそうです。『すやすや眠る』とか、『ぐうぐう眠る』とかなら分かりますけど、『ぐっすり眠る』はちょっと意味が分かりませんよ。そんな寝息聞いたことないですもん」

<どう考えても寝息じゃないだろ。寝てるときにぐっすりぐっすり言ってるやつがいたら迷わず呼吸器系の医者連れてくよ>

「じゃあなんですか、ぐっすりって」

<どうでもいいこと気にするな。いちいち言葉の由来調べてたらキリがないだろ>

「ここまでわけのわからない言葉だと逆に知りたくなるじゃないですか。このままだと気になってぐっすり寝られません。いやそもそも、今まで私はぐっすり眠ったことがあったんでしょうか？　ぐっすりの由来もわからずして、その表現を使っていいんでしょうか？」

<めんどくさ……。つまり深い眠りってことだろ？>

「それはただの意味です。もっとちゃんとした由来を……あ、もしかして『良い眠りgood sleep』!?　これです！　間違いありません！」

<グッドスリープが略されてぐっすり？　確かにそれっぽいけど、それだと眠るが被ってないか？>

「ちっ、細かいことを気にする男はモテませんよ……」

<舌打ちするな。どうせモテないよ。――ほら、辞書で調べたら『物を突き刺す音』だってさ。そこから転じて深い眠りを表してるらしいよ。一つ賢くなったね>

「はあ？ 刺さる音？ 一体ナニがぐっすり刺さってるんです？ 事後に繋がったまま眠っちゃったってことですか？」

<予想が外れてたからって下ネタに飛躍するんじゃない。深く刺さってる擬音から深い眠りになったんだって言うてるだろ>

「刺さる音なら他にもいろいろあるでしょう。ぶすりとかぐさりとかざっくりとか」

<ざっくりだと眠りが浅そうだな。やっぱり深く刺さってる感じが大切なんだよ>

「でしたら『ずにゅうう』のほうが」

<それはなんか違う>

「ぐっすりなんて刺さる音に聞こえませんか！ マンガとかアニメでそんな効果音見たことありません」

<僕が知るか。昔の人が決めた擬音なんだから。ぐっすりからぐさりに変わったんじゃない？>

「死ねえ！（グッスリ!） こうですか？」

<うん違和感があるのはわかったから。包丁で遊ぶんじゃない>

「ある意味深い眠りに落ちられますけども」

<もういいよ>

「こんばんは一！　いとしの彼女さんですよー！」

<なんだよそれ。いつにも増して頭のネジがハジケ飛んでる感じだけど、どうしたの？>

「ふっふっふ、テンションが上がるのも無理はありません。見てくださいこれを」

<え、三万円……!?　どこで拾ったんだよそんな大金。ちゃんと交番に届けなきゃダメだろ>

「拾ったんじゃないよ。枕の中からジップロックに入れられた状態に出てきたんです！
仮に拾っていたとして交番になぞ届けませんが」

<おいこら。とりあえず落ち着け。得したように思えるけど、それは自分が過去に無くしたお金を再発見しただけで実質プラスマイナスゼロだ>

「無くなっていたものが出てきたんですからプラスです。落ち着けだなんて、今の私にそれはタタリ神に鎮まりたまえと諭すようなものですよ。そのくらいあげばよなのです」

<久しぶりに聞いたよその言葉。あとタタリ神は別にテンション上がってるわけじゃないから>

「とにもかくにも三万円！　いやぁ何に使いましょうか……。パーっと使いたいところですが、ここは自重して結婚資金に」

<ん？　ちょっと待って。さっきそれ枕の中から出てきたって言った？　確かその枕って引っ越すときに二人で交換し合ったやつじゃない？>

「……あっ、そういえば私明日の朝早いんです。それでは今日はこのあたりで」

<おい待てこら。それ僕のへそくりだろ！>

「は、はぁ？　何をおっしゃいますか。言いがかりも甚だしい。これは私がさっき見つけたものであり、見つけた時点で私のものです」

<ＲＰＧ世界の常識を現実を持ち込むな。枕の中なら、僕そこにお金入れた覚えあるもの。枕貯金してた時期があったんだよ。困ったときに使おうと思って>

「ふん、まあ返して欲しければうちまで取りに来てください。一日運転する時間と気力があればね！」

<最悪だコイツ>

「も一わかりましたよ。じゃあこれは拾得物ということで、交番に届けたことにしてあなたに返します」

<おろ、意外と素直に返してくれるんだ。ありがとう>

「ふはっ！　今ありがとうって言いましたね!?　私に感謝しましたね!?　遺失物報労金を頂きたい！」

<うわぁ抜け目ない……。でも報労金は所有者の道德心によって支払われるべきで、支払わなかったとして特に罰則はなかったはず>

「言葉なんかじゃ本当の気持ちは伝わりませんよ？」

<ニコニコしながら最低な発言をするな>

「どちらにしる結婚資金になるんですし」

<いや、僕のへそくりだから、僕が僕の好きなように使うに決まってるだろ>

「……道德心、ないんですか？」

<ない>

「この悪魔め！　金の亡者は地獄に堕ちろ！　……もうやめましょうよ、こんなこと」

<今の流れで君が事態を収めようとするのはおかしいだろ。なんで呪詛の言葉から一転目を潤ませてるんだよ>

「こんなお金のことで争っても仕方ないじゃないですか。私たち、お互いに愛し合う者同士でしょう？」

<いや、君が素直に返せばいいだけの話なんだけど>

「返します返します。返せばいいんでしょう返せば」

<全額ね>

「はいはい、三万円、耳を揃えて返しますって」

<本当は五万円だろ>

「.....ちっ！」

<この子とこのまま同じ道を歩いていいものだろうか>

「ほんはんあ」

<いきなり何語だ>

「あー、あー、くひのなかがふごいからされふ」

<なんか辛いもの食べたのか……。泣くくらいなら最初から食べるなよ>

「しゃっきまえはべはかつはんえす」

<全く伝わってこないよ。牛乳飲むと和らぐらしいぞ>

「ぷはーっ。あ、確かにちょっとマシですね。いやあ、久しぶりだったので激辛系スナック菓子の威力を忘れてました。なぜかたまにやたらと食べたくなるんですよね、辛いものって」

<チキンラーメンとかファーストフードと同じだろ。味が特徴的だから思い出すと食欲が刺激されるんだよ。喉元過ぎれば熱さ忘れるって言葉があるけど、あれと同じじゃない？>

「うーん、それだけじゃないはずです。熱いものなら喉元過ぎれば問題ありませんが、激辛成分って消化系を刺激して大変なことになるときがあるじゃないですか。それでも食べちゃうんですよ？ 論理的に考えたら辛いものを忌避するよう味覚が進化していてもおかしくないでしょう？」

<確かに、ある意味毒物と言えなくもないものを食べたくなるって不思議だな。怖いもの見たさと似たようなところがあるのかも。激辛って書いてあるとそれだけで挑戦してみたくなるし>

「腹痛もさることながら、それでトイレに駆け込んだあとも凄いことになりますよね。特にお尻の穴付近が」

<わかるけど恥ずかしげもなく尻の穴とか言うな>

「……特に、あの、その、おしりの……あなの……まわりが」

<恥じらえばいいわけじゃない。この流れ鉄板化したな>

「ぶっちゃけ肛門周辺が熱くなるじゃないですか」

<ミもフタもない>

「あれ凄いですよね。谷間が全体的に熱くなって、拭いても拭いてもまだ何かついてるんじゃないかと思っちゃいます」

<やめてくれる？ 僕が晩御飯食べてるの見える？ 目が悪いの？ それとも頭が悪いの？>

「喉元過ぎれば熱さ忘れるならぬ、肛門過ぎれば」

<言い換えなくていい。結局痛い目にあっても食べたいと思うほど美味しいってことだろ。脳が刺激を求めるようにできてるんだよ>

「後でああなるとわかっているのに……」

<そうだね>

「後でああなるとわかっていてなお……」

<……>

「ああなると」

<下らなすぎて反応しないんだって察しろよ！>

ちょっかい

「最近新人ちゃんに無視されます。前から愛想は悪かったんですけど、今や話しかけてもなんの反応もしません。ただの屍のようです」

<きっと構わないでほしいんだよ。みんながみんな君と同じ世界で生きてるわけじゃないんだから、あんまりちょっかい出し続けると本気で嫌われるぞ>

「前も言いましたけど、暇なときに話しかける程度ですよ。ちょっとウィットの効いた会話を」

<どんなの？>

「『さっき専務の部屋の蛍光灯がチカチカしてたので、設備管理課の人を呼んで交換してもらおうとしたんですけど、いざ交換する時になったら何の異常もなく点いたんです。それで私は言ってやったんですよ。蛍光灯もリストラされたくなくて必死ですね、って。H A H A H A』」

<なんでアメリカンジョークなんだ。反応しづらいよ>

「失敗でした。考えてみればアメリカンジョークってツッコミが必要ないので、スルーできちゃうんですよね。なので今日は路線変更し、昨日あなたと話した激辛系のスナックを食べると肛門が大変という」

<真っ昼間から女の子に下ネタを吹っ掛けるんじゃない。人によっては不愉快極まりないよ。男だったら間違いなくセクハラ認定されてるぞ>

「ちっちっち、わかってませんね。下ネタというのは人類ならば誰にでも通じる、言わば全世界の共通項、真理の一つなのです」

<君の持論はどうでもいい。他にもっと盛り上がるネタあるだろ。別に全世界共通でなくても、趣味とかかぶってたらさ>

「『私、読書が趣味なんですけど、新人ちゃんは南方熊楠とか柳田国男とか読みますか？』」

<うん、たぶん読んでないだろうね。趣味はやめて……恋に関する話とかどうだろう？>

「あなた、女の子がみんなそういう話題好きだと思ってるクチですか？」

<あくまで例えばの話だよ>

「まあ好きですけど」

<好きなのかよ>

「でも他の女性社員がそういう話してる時、あの子は全く興味なさそうですよ？ 女性同士の恋ばなって下ネタに発展するパターンが多くて、私も苦手です」

<さっき肛門うんぬん言ってたやつはどこのだいつだ>

「そういう小学生みたいな下ネタとは違うんです」

<自覚あったのか>

「あれはもっと生々しいんですよ。さながらエチケットボックスの中を覗き見てしまうような」

<例えなくていい>

「まあ、恋ばなは試してみる価値がありそうですね。明日はそれでいきましょう。『新人ちゃん は彼氏の一人や二人いないんですか？』」

<二人いたらダメだろ>

「『そんなに可愛い顔してるんですから、当然いますよねえ？』」

<煽るな>

ゴミ捨て

「今日はゴミ捨てに行こうとしたんですが、生憎の雨でやる気が霧散しました」

＜傘さしていけばいいだろ、別に。君の部屋からゴミステーションなんて目と鼻の先じゃんか＞

「だからこそです。近いんですから今すぐ捨てに行く必要なんてありません」

＜ダメだこいつ＞

「今ふと思ったんですが、ゴミ捨て場をゴミステーションと呼ぶのはなかなかのセンスですよね。全国的な呼び方ではないですけど」

＜そういう下らないことはよく気づくね＞

「これに倣ってゴミを家に溜め込んでしまうことをゴミステイと呼びましょう」

＜呼ぶな。そんなホームステイみたいに＞

「あなたはゴミステイ何泊まで許容しますか？」

＜変な質問やめろ。普通にどのくらい溜まったら捨てるかってきけよ。ゴミ箱の蓋が閉まらなくなったらさすがにまずいよね。時間的にもあんまり放置してると腐るし＞

「でもあんまりすぐ捨てるのも袋が勿体ないというか。押し込めばまだ入ったりしますけど」

＜穴が空いたり破裂したりするから無茶しないほうがいいぞ。一枚たかだか数十円だろ。僕は一週間くらいで捨てるよ。君は今ゴミステイ何泊目なの？＞

「ちょっと気に入ってるじゃないですかゴミステイ。えっと……今日で三週間くらい」

＜おい、それもうやばいだろ。最近暖かくなってきたし、古い生ゴミとかは底のほうで確実に腐ってるぞ＞

「だから今日捨てに行こうとしたんですって。臭いなら、最近ゴミ箱の蓋をなるべく開けないよう気をつけてるので大丈夫です」

<大丈夫じゃないよ。もはやゴミ箱として機能してないじゃんか>

「実は間違えて大きめのゴミ袋を買ってしまって、まだまだ入れられるんです」

<余裕があれば化学兵器の生成もやむなしなのか。貧乏性発揮してないで今すぐ捨ててこい>

「いやです！ あの子たちはごみじゃありません！ 元々はみんな人の役に立っていたんです！
それを人間のエゴで」

<茶番はいいから早く行け>

「収集日は明日なので、明日の朝お別れします」

<絶対起きろよ。寝坊したり忘れたりとかなしだからな>

「世話焼きさんですね。ホストファミリーとしての責務は全うしますよ。そもそも私の部屋がゴミ屋敷になろうが腐海になろうが、あなたには関係ない話でしょう」

<あるよ。彼女からごみの臭いがするとか最悪だ>

「宮本武蔵は女性との係わりを断つため、自ら身体に魚の内臓を擦り付けたそうです。私もそれに倣い、あなた以外の男性を近寄らせないために」

<僕も近寄らないから>

「会社で月曜日恒例のミーティングがあったんですけど、その最中に妙な違和感を感じたんです」

<妙な違和感を感じるという言葉に妙な違和感を感じるけど、それはそれとしてどうしたって？>

「あなたはありますか？ 仲間同士で集まってる時に、誰か一人足りないような気がするんです」

<なんだその恐怖体験。違和感じゃ済まないだろ>

「そんなはっきりした感覚じゃありません。現実以外でも、久しぶりに読んだマンガの登場人物が足りない気がしたりとかしません？」

<んー、なんとなく分かるような分からないような>

「とにかくそんな感じがしたんです。一体なんなんでしょう？ 別に本当に一人足りないわけでもないのに……」

<単に寝ぼけてたんじゃないの？>

「ミーティングの時くらいちゃんと起きてますよ」

<その言い方だとミーティングの時以外はうたた寝してるように聞こえる>

「はっ！ もしかして記憶を操作されている可能性が!？」

<ないよ。誰が何のためにそんなことするんだ>

「思い出せなくなっていますが、実は私には同じ高校、同じ大学、同じ会社へと進んできた恋人がいたのです」

<妄想スイッチ入ったか>

「妬きますか？」

<別に>

「でもある日、彼は私を守るためにただ一人異世界へと飛ばされてしまうのです。この世界の彼は存在しなかったことになり、人々の記憶からも抹消されてしまいました。恋人の私でも顔すら思い出せません」

<いないからね、元々>

「おかしいと思ってたんですよええ。私ほどのイイ女、本来ならば引く手あまたでもおかしくないのに……」

<戯れ言が聞こえた気がする>

「しかしこれで全て辻褄が合いました。社内みんなの記憶にはごくうっすら彼が残っていて、無意識的に私に言い寄って来ないのです」

<それだと自分から僕に近寄ってきた君は最低だな>

「たぶんあなたに彼の面影があったとかそんな感じで」

<じゃあ僕はそいつの代わりなのか。やだなそれ>

「実際そんな設定だったらどうします？ 私を彼と奪い合いますか？」

<いや、慎んでお譲りする。っていうか実際選ぶのは君だろ。こんなこと真面目に言うのも馬鹿らしいけど>

「だったら迷わずあなたを選びます」

<そっか。それはなんていうか……ありがとう>

「異世界帰りの男とか働き口探そうにも離職期間長くてロクな仕事つけそうにないじゃないですか。間違いなく将来不安定です」

<やっぱありがたくない。結局金か>

「お金というより安定です。あ、思い出しました！」

<え？ 生き別れの恋人ホントにいたの？>

「いえ、本当に一人足りなかったんです、ミーティング。そういえば今日新人ちゃん来てませんでした」

<お前.....>

月が綺麗ですね

「こんばんは。今日もいいお天気で、絶好のお洗濯日和でした」

<うん、最近晴れの日が多いけど、今夜も月が綺麗だね>

「っ！ そ、そんな、いきなり何言ってるんですかもう！」

<.....は？ 僕なんか変なこと言ったか？>

「なんと.....あなたの私に対する愛は、既に当然の域まで達しているということですか」

<言っていないしなんで赤面してるんだ。勝手に盛り上がるな>

「でもあなた今、月が綺麗ですねって」

<.....やっと理解できた。夏目漱石だか誰だかが英語の『アイラブユー』をそう訳したってやつね。別にそんな意味で言ったわけじゃないよ>

「なあんだ、ただの誤用ですか」

<誤用じゃねーよ君の誤解だよ。こっちは純粋に月が綺麗だったから言っただけだ>

「つまんないです.....。まあこの表現、最近いろんなところで使われ過ぎて手垢がついちゃってる感じしますが。正直さっきもロマンチスト気取りかよニワカが、と思って引きました」

<嘘つけ。めちゃくちゃ顔赤くしてただろうが。夢見る乙女全開だったろうが>

「どんな含蓄ある名言や逸話も聞かされ過ぎると陳腐になっちゃうの、どうにかなりませんかね。私がここぞというときに使えなくなります」

<そもそも最初から使わなきゃいいんじゃない？ ああいう言葉はひとかどの人物が狙わずに言うからかっこいいんであって、君がほいほい引用したところで虎の威を借る狐ってもんだろ>

「なるほど、自分で作ってしまえばいいわけですか」

<話聞いてた？>

「では『月が綺麗ですね』に代わる美しいアイラブユーを作しましょう」

<もう勝手にやってろ。僕は月見しながらビールでも飲む>

「『月が明るいですね』……『月が丸いですね』……『月がボールみたいですね』……？」

<君の見てる月は日によって六面体だったり八面体だったりするのか>

「うーん……『今日のブルーツ波は1700万ゼノですね』？」

<もう何が言いたいのかわからないよ。アイラブユーの別表現考えるんじゃないのか>

「大猿になってあなたを襲ってしまいそうです、みたいな意味も込めて」

<込めるな。例え事実だとしてもやだよ、そんな下心満々のアイラブユー。……あー、最近だんだんビールのうまさがわかってきた>

「あ、そうです！ 『ビールがうまいですね』！」

<何がそれなんだ。愛云々の前に労いたくなるだろ>

「なかなか良いと思いますけど。そう考えると月にこだわる必要もありませんでしたね。逆に『太陽がまぶしいですね』とか」

<殺されそう>

ストレス発散

「遅くなりましたーっと。今日はちょっと奮発してケーキなど買ってみました」

<ああ、いいんじゃない。たまにはそういうストレス発散もありだと思うよ>

「この一週間はかなり頑張りましたから、自分へのご褒美というやつですね。普段はこんなことしないんですけど、あなたはします？」

<思い切って何か買うってことはあんまりないかな。でも夕食に一品買い足したり、おやつ買ったりとかならたまに。何か買って無理やりテンション上げて憂鬱な気分を吹き飛ばすって、オーソドックスだけど効果的だよ>

「これでまた明日頑張れるって思えますよね。まあ明日は休みですが」

<土日祝日休める優良企業は羨ましいな。前の職場はそんな感じだったけど、こっちに来てから休日出勤が当たり前になった>

「何か自分にご褒美買ったらいいいじゃないですか。アダルトティックな本とかビデオとか」

<いらない。なんでそれがご褒美になるんだよ>

「ならないんですか？ たまにはそういうストレス発散もありだと思います」

<君とこうして話してれば十分発散できるよ>

「え、私と話してて興奮するんですか？ 気持ちわるい……」

<……やっぱりストレス溜まるみたいだ>

「冗談ですよ。私も、あなたとこうして話してると良いストレス発散になります」

<君の場合は僕を貶すことで発散してるよね。タチ悪いよね>

「いつもありがとうございます」

<感謝するな。否定しろ>

「でも実際あなたとの会話に救われてる部分は多くありますよ。昼間どんなに嫌なことがあっても、あなたとこうして夜に会えると思えば頑張れます」

<.....うん、まあ、僕もそんな感じかな。君がいなかったら今頃目の色がない人間になってたと思う>

「ボロクソに貶せる人がいればストレスなんて無いに等しいですね」

<ただのサンドバッグじゃねーか！ 返せよ僕の感動！ 一瞬最終回っぽい雰囲気ですらなったのに！>

「もうちょっとだけ続くんじゃ」

<亀仙人出てくん！ えっ、じゃあストレスが多い日ほど僕への風当たりが強くなるの!?!>

「はい。仕事で失敗した日はあなたの失敗を笑い、理不尽な怒られ方をした日は理不尽なジョークを飛ばし、生理中はあなたへの言葉の暴力が増えます」

<最低だな。自分がされて嫌なこと人にするなよ。生理は仕方ないとして.....>

「ちなみに生理前は下ネタが増えるようです」

<君は年がら年中生理前なのか>

「すごく面白いネタを思い付いた気がするんです」

<ふーん、どんなの？　っていうか、そんな大見得きって面白くなかったらどうするんだ>

「いえ、思い付いたはずなんですけど、忘れちゃいました。とっても面白くなりそうだったことだけは覚えてます」

<意味ないなあ。っていうか忘れるなよ。慢性的ネタ不足なんだから>

「何かとっかかりがあれば思い出せるかもしれません。私もせっかくのネタをみすみす逃したくないので、適当にヒントになりそうなことを言ってみてくれませんか？」

<わかった。まず可能性が高いものとして……下ネタ？>

「いえ、違います。馬鹿にしないでください。年がら年中エッチなことばかり考えてるわけじゃありません」

<どの口が言うんだ。あと君のはエッチじゃなくてただの下品>

「どっちにしろそういう方向じゃなかった気がします」

<じゃあ、行事ネタ？>

「行事……？　うーん、なんか少しキテる気がします。でもあんまり大した行事でもなかったような……」

<行事に近いのか。なんだろ。6月の行事と言えば……父の日？>

「それじゃないですね。父の日は特に意識してもいなかったの」

<日頃からお父さんにはお世話になってるんだから、何かしてやれよ>

「ん？　何かしてやる……その言葉、引っ掛かりますね。そう、何かしなきゃいけない感じがします」

<面白いネタじゃなかったのか>

「いえ、ネタだったはずですよ。ネタ自体は面白くないんですけど、そのネタを生かして面白い話ができる、みたいな」

<でももう思い出してもやらないほうが良さそうだな。あまりにも面白い面白い言い過ぎてハードルの高さが半端ないことになってる>

「それを飛び越えられるくらい面白いネタでした」

<マジか。そういうの忘れるなよ>

「なんとしても思い出さねば。他に何かヒントありませんか？」

<他にねえ……。いくつかあるネタのパターンから挙げてくとすれば、下ネタ以外にメタネタ、料理ネタ、言葉ネタ、君の会社ネタ、僕を貶すネタ、記念日ネターー>

「んっ？　なんか今きましたよ？　あなたを貶すってところで」

<よりによってそこかよ！　他人貶めて面白がってんじゃねえよ！>

「記念日っていうのも……あっ！　思い出しました！」

<もう言わなくていいよ。ろくでもないこと請け合いだから>

「あなたの誕生日、昨日ですよね!?　それです！」

<おい、面白いネタって>

「ハッピーバースデーチューー！　梅雨だけに！　ブププーっ！」

<……いろいろ文句言いたいんだけどいいかな？>

労働のシステム

「今日は児童労働反対世界デーです。あなたは子供の頃どんな労働義務を課せられていましたか？」

＜その言い方やめろ。皿洗いとか玄関の掃き掃除とか洗濯物の取り込みとか、家の手伝いとかは当然してたけど、ああいうのは別に労働じゃないだろ＞

「強大な権力の下、低賃金で使役されることのどこが労働じゃないと言うんですか？」

＜仕事内容的にそんな辛いもんじゃないだろ＞

「あなたの家はそうだったかもしれませんが、もっと肉体的精神的にキツイことをさせられる家もありますよ」

＜そうになったら確かに労働だけど……君んちはそうだったの？＞

「いえ、私はもっぱら勉強してましたね。お手伝いなんてさせてくれたこともありません」

＜なんだ、僕より勞せず子供時代過ごしたんじゃない＞

「私はお駄賃をもらってる周りの子達が羨ましかったです」

＜ああ、そういう風に思ってた子もいたのか＞

「そのかわり、おねだりすればなんでも買ってもらえましたけどね。だから一時間近く働いて百円もらって大はしゃぎできる子達の無邪気さが、本当に羨ましかった」

＜ただの嫌味かよ！　なんてやな子供だ！＞

「お手伝いしても何ももらえない子達の場合は心の底から気の毒に思っていました」

＜上から目線の同情って本当に頭にくる＞

「でも私は私で遊び暮らしてたわけじゃありませんよ？　さっきも言った通り勉強していたんです。それだけでお父さんは喜んでくれましたから、安いものですけど」

<小さい頃から打算的だったのか>

「今思えば、小学生の頃にはもう世の中の仕組みが分かってましたね。懸命に働くよりも、媚を売ること長けたほうが得をするんだって」

<ませガキって呼び方がとてもしっくりくるな。今でもその考えは変わってないの？>

「当然です。魚を貰うことと釣りの仕方を学ぶこと、後者のほうが効率が良いのは一目瞭然。純粹にお金を稼ぐより、お金を稼いでくれるシステムを作ったほうが楽チンです」

<確かにそうなんだけど.....受け入れがたい考え方だよ。それこそ子供達に強制労働させるみたいな話になってきちゃうじゃん>

「そうですね。だから自分と相手が納得できるようにシステムを作るんです。あなたと私みたいに」

<なるほど.....じゃない。ちょっと待って。まさかとは思うけど、お金を稼いでくれるシステムって>

「え？ あなた以外に誰かいますか？」

<当然のように!?>

「もう、それは既に双方納得して」

<ねえよ！>

結婚報告

「でっひゃっひゃっひゃっひゃ！」

「マンガ読んで爆笑してるとこ悪いんだけどさ……っていうかなんだよその笑い方」

「はい、なんでしょう？」

「いま母さんからメール来て気づいたんだけど、結婚報告の手紙出してないよね？」

「あー、そういえばそんな因習もありましたね」

「因習言うな。結婚式しなかったから僕もすっかり忘れてたよ」

「別にやらなくていいんじゃないですか？ もうだいぶ時間経っちゃいましたし、改まって報告するような相手もないですし」

「君はそうかもしれないけど、僕はいるから。学生時代の友達とか」

「私的には他人の結婚なんてどうでもいいです」

「そんなんだから友達できないんだと思うよ」

「年賀状でもいいでしょう、時期的に」

「全然時期じゃないよ。正月までまだ三ヶ月もあるから。婚姻届の提出自体三ヶ月近く前なのに。さすがに半年も経って『結婚しました』とか言われても」

「普通ですよ。ケンちゃんラーメンだってずっと新発売でしたもん」

「一緒にするな」

「じゃあ表現を変えましょう。『結婚してました』とか」

「なんで本人たちも気づかないうちに、ってニュアンスなんだ。いつの間にか結婚せざるをえない状況に陥ってたみたいだろうが。誤解される」

「お互い自分の気持ちに気づいてなかったんですね……」

「青春か。結婚してから気づくとか鈍感どころの話じゃないぞ」

「飲み会の王様ゲームで命令されて」

「絶対王政過ぎる」

「そしたら案外しっくりきた、と」

「お前の人生そんなんでもいいのか」

「上手くいったなら別にいいと思います。試しに結婚してみてしっくりきたらそのまま続け、ダメだったら別れる。試婚制度とか、あったら面白いんじゃないですか？」

「結婚率は上がるだろうけど、離婚率も同じくらい上がる気が」

「それは仕方ありません。敷居を下げるんですから、入りやすくもなれば出やすくもなります」

「プロポーズや告白の言葉に何の重みもなくなるな」

「『離婚を前提に結婚してください』」

「予想以上に軽う……」

「『明日お味噌汁作ってください』」

「ただの注文じゃねーか。やっぱり、結婚の価値って重みにこそあると思うよ。自分以外の誰かの荷物も持つってことだし、ときにはその誰かも背負わなきゃいけないんだから」

「果たしてあなたにその覚悟がありましたか？」

「お前が言うな」

「ちょっと涼しくなったと思ったらまた暑くなってきました」

「夏に戻ったね。季節の変わり目は体調も崩しやすいから気をつけないと」

「勘弁してほしいです、残暑なんて。一度倒したはずのボスが終盤に雑魚キャラとして出てきたようなウンザリ感があります」

「何の話だ」

「もしくは人類最後の切り札が炸裂して『やったか!?'』ってなったときもうもうと立ち込める煙の中から姿を現す敵みたいな」

「喩えが余計わかりにくいんだけど」

「そのくらい辟易してるということです。どうしてこんなフェイント的な現象がおこるんですか？ 季節って太陽と地球の角度で決まってるんですよね？」

「よく知らないけど、太陽だけじゃなくて潮の関係とかもあるんじゃないの？」

「ああ、てじな一にゃとかいう」

「ラニーニャだ。懐かしいな山上兄弟」

「早く地球の気象を完全に操作できるようにならないものでしょうか」

「それはそれでいろいろ問題あるだろ。だいたい、君は一日中エアコンの効いた部屋にいられるんだからいいじゃん」

「買い物が大変なんです。重いし暑いし遠いしで」

「車を運転できない君が悪い。あ、そうだ。日中暇だって昨日言ってたけど、だったら自動車学校通ったら？」

「え、いやぁそれは、無駄にお金がかかるだけというか」

「そんなこと気にするなって。君が運転できるようになってくれれば十分費用対効果あるし」

「でも免許取っても結局車はあなたのダサイ軽自動車一台しかないじゃないですか」

「謝れ」

「私じゃすぐペーパーになっちゃいますよ」

「職場が近いおかげで僕今ほとんど乗ってないから。君が出かけるのに使ってよ。ダサイのは我慢しろ」

「無理です。死にたくありません」

「どれだけトラウマ抱えてるんだ。最初は簡単な練習から始まるから大丈夫だよ」

「ちょっと待ってください。残暑の話をしていたはずがいつの間に免許の話になってるんですか」

「君がスーパーに行くの大変だとか言うから」

「でも歩いていける距離です。この程度で車なんて使ってたらそれこそ環境破壊ですよ！　そういう姿勢が地球温暖化を招くんです！　残暑が厳しくなるわけですね！」

「無理矢理話を戻すな」

「はい、今日の晩御飯はペヤングです」

「おい」

「いやあすみません。教習で疲れるとどうしても家事をする気が起きなくて」

「だからってこの落差はないだろ……」

「でしたらたまには外食行きましょうよ。っていうか連れてってください」

「こないだ食材買ったんだし、悪くならないうちに使わないと」

「一日くらい大丈夫ですって。明日は教習お休みですし、ちゃんと作りますから」

「……どこ行きたいの？」

「コース料理が食べられるレストランならどこでも」

「どこでもと言いつつわりと融通利かないな」

「かつデザートが美味しければ言うことなしです」

「注文が多いよ」

「ぶっちゃけさっきネットで見つけたここがいいです」

「最初から外食する気満々だったんじゃないか」

「最近行ってないなあと思ひまして。ほら、自分の料理ばかり食べてると美味しいのかそうじゃないのかわからなくなるじゃないですか。勉強の一環ということでここは一つ」

「昔に比べたらずいぶん料理上手くなったよ、君。僕は外食より君の手料理のほうが好きだな」

「そういうのいいんで早く行きましょう」

「一直線か。あれ、でもそのレストラン今日定休日みたいだけど」

「んなっ!? アアアッ! そんな馬鹿な! 私のお腹はもうこのお店のお料理モードだったのに！」

「気持ちはわかるけど、定休日じゃ仕方ないよ。他の店にしよう」

「だ、ダメです。ここの以外もう胃が受け付けません」

「わがまま言うな。そこってそんなに美味しいの？」

「知らないです」

「行ったことないくせにモードとか受け付けないとかよく言えるな」

「お料理の写真と過去に食べた類似品からだいたいのを想像し、仮想的な満足感を作りだすんです」

「どういうシステムだ。同じ要領で他の店のモードに切り替えられないのか」

「一度マウントすると実物が入力されるまでアンマウント不可です」

「面倒くさ。もはやバグじゃんか」

「仕様です。一つ解決法があるとすれば、このお店よりも美味しそうな料理があるお店を探すこと」

「じゃあ探してくれ」

「そこで提案なんですけど、ここなんてどうでしょう? さっきのところより少し高いですけど」

「.....そこも定休日だけど」

「グアアッ! なんてことでしょう! もっと良さそうなところを探さねば! おお、ここなら先ほどより値は張りますがとても美味しそうです」

「ちょっと待って」

ワープロ

「今日はワープロ記念日です。東芝が日本語ワードプロセッサを初めて発売した日だそうで」

「.....ワープロとか久しぶりに聞いたよ。今の十代は見たこともないんじゃない？ 僕だって使ったことないし」

「私は小学校のころよくお父さんのワープロで遊んでましたね。Windows95が入ってたので」

「ワープロなのに」

「さすがに動きがカックカクで、フリーズやブルースクリーンなんて日常茶飯事でしたけどね。メモリ16メガバイトとかCPU数十メガヘルツとかの時代でしたから」

「今じゃ考えられないな.....。むしろそんなのでよく作業できるだけ動いてたもんだ」

「パソコンを持ってる人が羨ましかったです。そんなワープロも十年以上前に生産終了。オーパーツになりつつありますね」

「オーパーツで。でも確かに、このままだと『ワープロの日』が一体何の記念日なのかわからなくなりそうだな。ワープロってそもそも何の略？ みたいな」

「ワーキングプロの略です」

「ワーキングプアっぽい新語を作るな」

「一応プロなんですけど収入が安定なくてバイトでも兼業もしないと生活できない、そんな立場の人々」

「生々しいよ。わりとよくあるケースだから」

「でもそんなプロフェッショナルが身の回りに潜んでいるかと思うと、少しワクワクしませんか？」

「ああ、コンビニ店員が実は新人作家だったとか？」

「そんな感じです。家庭教師の先生が実はプロの俳優さんだったとか」

「まずあり得ない話だろうけど、夢があるかも」

「雇ったお手伝いさんが実はプロの殺し屋だったとか」

「それ雇い主がターゲットだよね絶対」

「少年野球チームのコーチが実はプロのサッカー選手だったとか」

「どんなイレギュラーだ。ネタにしてるけどさ、どんな種類のプロフェッショナルでも最初は大変だと思うよ？」

「でも第一の目標は達成できたわけですから贅沢は言えません。これから大成するか路頭に迷うかはその人次第。がんばれワープロ！ という応援の気持ちがこもった記念日にしましょう」

「そういえばワープロの日について話だった……。そうやって別の意味になることはまずないだろうから、自然消滅するんだろうな。この記念日」

「なんらかの形で残ったりしませんかね？ ほら、フロッピーディスクなんか『保存』のアイコンとして健在ですよ？」

「歴史の一ページとして伝えていけたらいいね」

「まあぶっちゃけ知らなくても問題ありませんが」

「ひどいちゃぶ台返し」

愛を囁く日

「今日、十月八日は『愛を囁く日』です」

「えっ、なんで？」

「カリフォルニア州に住むある夫妻が百八日間におよぶ喧嘩の末、愛を囁きあうことの大切さに気づいたからだそうです」

「記念日の話か、びっくりした。っていかどうしてそんな超個人的な経験が君の耳にまで届くほどの一大イベントになってんの？」

「さあ？ Wikipediaにチラッと載ってただけなのでそこまで詳しくは知りません」

「百八日間喧嘩しつつ別れないって、そのへんの夫婦より強い絆持ってるだろ」

「そんな人たちに愛を囁くことが大切だとか言われても逆に説得力ないですよ。喧嘩によって一日一つずつ煩惱を消し去っていったとか言われたほうがまだ」

「除夜の鐘か。確かに仏教の説話に出てきそうな数だけでも……あ、十月八日に喧嘩を止めたんじゃないくて、108日間喧嘩し続けたから今日なのか。やっと気づいた」

「132日目とかだったら記念日にできませんでしたね」

「一月でも無理だな。どうでもいいけど」

「愛を囁くことの大切さに気づいたきっかけは、一体なんだったんでしょう？」

「うーん、記事の書き方だと百八日間喧嘩したあと気づいたって感じだけど。そもそも実話なのかあやしいな」

「牛丼屋の名前を偶然口ずさんだら相手が勘違いしたとか？」

「カリフォルニア州にすき家はねえよ、たぶん。しかもなぜ関西弁」

「やっぱり毎日囁きあってたのかもしれませんが。喧嘩しても寝る前に一回は『愛してる』と言いましょう、みたいに」

「それだと百九日目にして喧嘩しなくなった理由がわからないけどな」

「すごいツンデレです。ほんの五分前まで大喧嘩してても愛してると言わなきゃいけないんですから」

「白々しくないのかな。僕はあんまり愛してるとか好きだとか口に出すのは趣味じゃないな」

「行動や発言による精神状態の変化って、心理学や認知科学の分野で効果が認められてますよ」

「最初は特別な感じがして良いかもしれないけど、そのうちマンネリ化しそうじゃないか？」

「セックスもノーマルなプレイだけじゃつまらないですもんね」

「僕がそのうちアブノーマルな方向に走り出すような喩えはやめろ」

「口に出すようになるかもしれません」

「やめろ」

「まあ、『愛してる』にもいろんな形がありますから、現状それらができてる夫婦は囁く必要もないでしょうね。抱き合うとか歌うとか踊るとか陰茎を見せつけるとか」

「どんな夫婦だ。動物の求愛行動みたくなってるぞ」

「あと、話すとか」

「.....じゃあ、今日は思う存分話そうか」

とどのつまり

「とどのつまり、って言葉があるじゃないですか」

「うん」

「とどってなんなんでしょうね？」

「またそんなどうでもいいことを……。僕にきかないでグーグル先生にきけよ」

「いや、別に答えを知りたいとかではないんです。調べればすぐわかるんですけど、その前にいろいろ想像してみるのが面白いんじゃないですか」

「そのワードで話を広げるのは難しいと思う」

「とどと聞くと、真っ先に思い浮かぶのは寒冷地にいる大型のアザラシみたいなやつですが」

「うん、それで終わるよね。あとトドはアザラシじゃなくてアシカ科だ」

「我が科はアシカ科！ 北の果てよりこの地へ来た！」

「アシタカっぽく言うな」

「そのトドのことなんですか？」

「違うと思う。とどのつまりって、つまりの強調表現だろ？ 結論みたいな。だったら『とど』も最後の意味を持つ何かなんじゃない？」

「とどのつまりは、そういうことですか」

「うっさい。早く答えを調べろ」

「ふむふむ……魚のボラが成長するとトドになるから、だそうです。あなたの予想で正解ですか」

「お、ホントに合ってたんだ」

「ただの魚があんな巨体に!？」

「そのトドじゃねぇよ。超進化にもほどがある」

「ああ、成長すると名前が変わる出家魚ってやつですか」

「出世魚な。仏門に下る魚ってどんなだ」

「ハク、オボコ、スバシリ、イナ、ボラ、トドの順で名前が変わるみたいですね」

「ふうん、結構何段階もあるんだね」

「でも地域によって違うみたいです。関西だとさっきのですけど、関東だとオボコ、イナッコ、スバシリ、イナ、ボラ、トド」

「へえ」

「関東はすぐオボコじゃなくなると。なるほど確かに」

「何が確かになんだ。関係ないから」

「東北や四国だと四回しか名前が変わらないらしいです。地方のほうが出世しやすいってことですか」

「だから関係ねぇよ」

「あなたはいつ出世するんですか？」

「いきなり変化球を放ってくるんじゃない。まだ社会人三年目なんだけど」

「強い望みがあれば若くして出世することもきっとできます。偉くなりたい、給料を上げたい、マイホームが欲しい、子供が欲しい、新しい服が欲しい、美味しいものをたくさん食べたい、書斎を作りたい……」

「途中から君の願望じゃねぇか」

「あなたはそう思いませんか？」

「特に強い望みなんてないなあ。わりと今の生活で満足してるし」

「いけません。そんなことでは社会という大海原であつという間に淘汰されてしまいますよ？
周りの人間を蹴落としてでも這い上がるくらいやってのけてください」

「なんでわざわざ波風立てるようなことを……。そもそも僕にそんな度胸あると思う？」

「いえ全く」

「即答か」

「だからこうして焚きつけてるんです。じゃあ、もし出世したら別の名前と呼んであげます」

「嬉しくない」

朝食

「朝ご飯というものの大切さを考え直してみましょう」

「またろくでもないこと思いついたのか」

「ろくでもなくないです。朝起きるとテーブルの上にトーストとコーヒーとトマトサラダがのっ
ていて、あなたがおはようと笑いかけてくる。今朝、そんな夢を見たんです」

「君ってそういうのに簡単に影響されるよね。でもなんで僕に朝ご飯作らせてるの？ 君の仕
事じゃないの？」

「あくまで夢ですから。願望です」

「そもそもそんな願望持たないでほしいんだけど」

「それで現実はというと、朝起きたらあなたは既に出かけていますし」

「今さらながらマイペースに話を進めるの、どうかと思うよ」

「朝ご飯は昨日の残りですし……。ある程度夢を再現しようと頑張ったんですけど、トーストと
お味噌汁って、なんか違うんですよね」

「その取り合わせにそんな漠然とした違和感しか覚えないあたり相当寝ぼけてるな。素直に白米
食え」

「あなたは和風朝食派なんですね」

「パンじゃ大してエネルギー補給にならない上に、焼きたてじゃないと美味しくない。その点ご
飯は炊きたてが食べられるから」

「うーん、私的にはトーストを片手にコーヒーを飲むというスタイルが、大人の朝食って気がし
て好きなんですけどね」

「休日ならそれもいいけどさ」

「ヤマザキ春のパン祭りのような雰囲気を醸し出すのが……ジャムです」

「ミソって単語が雰囲気崩すからって言い変えるな。意味がわからん」

「まあ和食洋食のいずれにしても、今のいい加減な朝食はよくないと思うんです」

「うん、それは僕も前から思ってた。なにより君の起床が遅いと思ってた」

「それはだって、あなたが前日なかなか寝させてくれないから……」

「毎晩サカってるみたいに言うな」

「まあ確かに、私ももう少し早起きするべきですね。10分くらい」

「誤差の範囲内じゃねーか」

「そんなことはありません。有意水準30%で検定すれば」

「統計学に謝れ」

「でしたら逆に、あなたがもう少し出勤時間を遅らせてくれれば」

「お前を中心に世の中回ってないんだよ。今夜から少し早く寝ろ」

「それでも起きられる自信がないです。あなたが起きるとき、ついでに私も起こしてください」

「ええ？ 君、起こそうとしてもぐずついて起きないじゃん」

「二、三発ペロチューかませば起きますって」

「ふざけんな。朝っぱらからどんだけ血圧高める気だ」

「全ては大人の朝食のため」

「隠語にしか聞こえなくなってきた」

「ちょっとすみません、このポテトサラダの匂い嗅いでみてくださいか？」

「えっ、これだいぶ前に作ったやつじゃない？ うっ！ ダメだろこれ……」

「冷蔵庫の奥にしまいこんで忘れてました。やっぱりダメですか」

「むしろなんでその異臭で僕にお伺いを立てようとした。鼻でも詰まってなきゃわかるぞ」

「だって、私だけ嫌な匂いを嗅がなきゃいけないなんて不公平じゃないですか」

「そんな理由で無駄に被害者を増やすな……」

「まあ私は嗅いでないんですけどね」

「鼻にサラダ突っ込んでいい？」

「やめてください。無駄に被害者を増やさないんじゃないんですか」

「それは加害者が言っているセリフじゃない」

「でも捨てるには結構量があるんですよね、このサラダ」

「例によってスルーしやがって。そんなこと言っても捨てるしかないよ。だいぶ酸っぱい匂いしたぞ」

「きっと火を通せばなんとか……コロッケにできませんかね？」

「君が食べるなら好きにすれば。ただ熱で殺菌はできても生成された毒素は除去できない、とだけしておく」

「いけませんか。うーん、食べ物を粗末にするのはなんとも言えない罪悪感があります」

「これを教訓にして次から腐らせないように気をつければ、それが一番の供養だよ」

「クックパッドとかに『材料：腐った芋』とかでレシピが」

「ない」

「お隣さんにお裾分けするというのは」

「お裾分けのタイミングがおかしい。なんでゴミ押しつけてんだ。関係ない人達まで巻き込むな」

「『ポテトサラダ作りすぎて余っちゃったんですけど、もらってくれますか？』」

「余っちゃったじゃなくて腐っちゃっただろ」

「『ちょっと酸っぱい匂いしますけどレモンとか入れたので』」

「お隣さんに何の恨みが」

「こないだ小学生のガキンちょにお尻触られました」

「それはその場で怒れ」

「食べてみたら意外と美味しいってこともあるかもしれないじゃないですか。科学の世界では偶然の失敗が大発見に結びついたりするんですよ？」

「まず腐ったポテトサラダはそんな壮大な話に結びつかない。そういえば、君まだその匂い嗅いでないんだったよね。嗅いでみて自分で判断しなよ」

「.....捨てましょう」

「即決か」

「本当に残念です。ワンちゃんでも飼ってれば食べてもらえるんですけどねえ」

「お前に動物を飼う資格はない」

「あっごめんなさ……ありゃ」

「すみま……って、なんか聞き覚えのある声だと思ったら、君か」

「見覚えのあるシルエットだと思ってたら、あなたでしたか」

「どんな着眼点だ。別にアニメキャラみたいな独特な体型も髪型もしてないだろ僕。こんなところで何してるの？」

「ここスーパーですけど、買い物以外にすることあると思います？ あなたこそ、こんなところで何を……はっ！ まさか会社クビになったんですか!？」

「なわけないだろ。君が弁当作ってくれないから昼飯買いに来たんだよ」

「まあ、狭い街ですもんね。スーパーも他にないですし。逆に今まで会わなかったのが不思議なくらいです」

「嫌味に対する反応は無しか」

「普段会わない時間帯にこうして会うって、なんだか新鮮な感じがしていいですね。ふふ」

「おい、微笑みながらさりげなく最後の焼肉弁当を取っていくな。僕が先に手をつけてただろうが」

「え？ 手を引いたってことは、譲ってくれるつもりだったんでしょう？」

「君じゃなかったらな。それにそっちが先に離してなかった？」

「謝ったのは私が先ですが、手はあなたのほうが先でした。記憶力には自信があります」

「謝ったってことは、自分が譲るべきだと思ったんだろ？」

「いえ、ごめんなさいこの焼肉弁当私がもらいます、って言おうとしたんです」

「なんて図々しい謝罪……。家に晩御飯の残りがあるでしょ？ それを食べなよ」

「私だってたまには別のものが食べたいです」

「僕の弁当作ってくれてたら難なく焼肉弁当が手に入ったのに残念だったね。今度からそうしようね」

「はい今度からそうします。では申し訳ありませんが、あなたはそっちの秋の味覚松茸風味弁当で我慢してください」

「文脈ガン無視か。今回は譲ってよ。午後は長時間の会議があるから焼肉弁当食べて乗り切るって決めてたんだ。だいたい秋の味覚弁当だかに入ってるの、松茸じゃなくておもっくそ椎茸じゃん」

「風味ですからね。それじゃ」

「待て待て待て。さすがに冷たくない？ 僕たちそんな関係じゃないでしょ？」

「ちょっ、なに手まで掴んで引き留めてるんですか。やめてください変態。悲鳴あげますよ？」

「お前は僕をなんだと思ってるんだ」

「少なくとも今は私の焼肉弁当を奪おうとする暴漢です」

「いつから君のに.....わかった。仲良く半分こしよう！ 夫婦らしく！」

「夫婦を強調して周りの人に状況を理解してもらおうとしないでください。あなたと結婚した覚えなんてないです！」

「都合いい記憶力だなおい！」

「焼肉弁当の前では愛なんてゴミクズ同然」

「お前の人生それでいいのか！」

「あ、あれ？　なんだかおかしいですね」

「どうした？　自分の滑稽さに今ごろ気づいたか？」

「そんなの前から知ってます。やっと寒くなったので、去年着てた服を引っ張り出してみたんですが、ちょっと息苦しいというか」

「ああ、それは太っ……睨むなよ」

「そんなはずありません。今まで成長以外で体重が増えたことなんてありませんから。きっとこれはまた胸が大きくなったんでしょう。最近あなたに揉まれまくってましたからね」

「まくってないし、揉むと大きくなるとか都市伝説だろ。まあサイズは上がったんじゃない？
太ったおかゲブッ！」

「いやいやいやいや、私には太らないという特殊設定がありますから」

「……そんな不自然な体質あってたまるか。だいたい君、最近食べる量増えてたじゃん。大した運動もしないでずっと家の中にいれば太って当たり前だろ」

「ちっ、ネタがないからってとうとう定番のダイエットネタにまで走り始めましたか」

「どうしても自分に責任があると思いたくないのか。前に体重計のったのっていつ？」

「忘れました。そもそも体重計なんてウチにないじゃないですか。え、なんですかいきなり。どわあっ！」

「悲鳴に色気の欠片もないな。そして確実に重くなってる」

「お姫様抱っこで体重の変化を知られるってなんか嫌ですね……じゃなくて、単にあなたの筋力が落ちただけでは？」

「元々筋トレとかしてないから、普通に過ごしてれば変化しないよ」

「地球の自転速度が落ちて遠心力が弱くなり、そのぶん引力が強まっただけでは？」

「どんだけ現実から目を背けたいんだ。で、ダイエットするの？」

「.....不本意ですが、せざるをえないでしょうね」

「別に僕は君が太っててもいいけど」

「嬉しいお言葉ですが、私からビジュアルを抜いたら面白さしか残らないじゃないですか」

「自分で言うな。そしてそれが残るかは微妙なところ」

「実際太った私をあなたが愛してくれるかどうかは太ってからでないとわかりませんし」

「疑り深いな。外見に惚れただけで結婚するほど僕も馬鹿じゃないって」

「中身に惚れたんですか？」

「.....」

「何か言ってください」

「ごめん」

「なんで謝るんですか！」

「適度な脂肪は必要だと思うよ」

「心なしかさっきより言葉に思い切りの良さを感じないんですけど」

「いや、あんまり僕が痩せろ痩せろ言うのもおかしいし、それで倒れられたりしたら嫌だし」

「なんだ、ただの自己保身ですか」

「聞こえが悪い」

「でも運動不足はあなたの言う通りだと思います。運動、しないといけませんね」

「珍しく素直だね」

「なので運動不足解消のためにもセッ」

「ランニングしろ」

ダイエット

「ダイエットの方法をいろいろ探してみました」

「四の五の言わず、食べる量減らして運動すればいいんじゃないかな？」

「太った原因に合わせ、より効率的なダイエット方法を取れば時間も無駄にしないで済みますし、健康を害することはありません」

「運動不足以外の何が原因として考えられるんだよ。何かを始めようってときに方法論から入って結局何も始まらないタイプの人間だな」

「ぶっちゃけなるべく楽しんで痩せたくて」

「楽をしたいって発想がすでに太る人間のそれだと気づけ。生活習慣から変えなきゃすぐまた元の体重に戻るぞ」

「元はと言えばあなたと結婚して生活パターンが変わっちゃったせいです。あなたがなんとかしてくださいよ」

「離婚しようか？」

「.....自分でなんとかします。朝バナナダイエットとかどうでしょう？」

「僕の分の朝ごはんが確実に手抜きになるからやめてくれ」

「元から手抜きです」

「開き直るな。今以上に酷くなるのが容易に想像できるって言ってるんだよ」

「仕方ないですねえ。では別の方法として、痩せるツボというものがあるらしく.....」

「それより頭が良くなるツボを押したほうがいいと思うよ。マユツバな情報を鵜呑みにするな」

「それじゃよくネット上の広告にあるダイエット薬などもダメですか。一ヶ月でマイナス30kgの激やせ！　みたいなやつ」

「寿命が縮んだりおかしい副作用が出てもいいなら試してみたら？　君がそんなの使ったら二ヶ月くらいで反重力物質になりそうだけど」

「うーん……」

「迷うな。そんな急激に体重落ちるとか毒物でもなきゃありえないだろ」

「あ、そういえば昔私が提唱した下痢便ダイエットっていう」

「なぜ積極的に健康を害して痩せようとするのか。身を削って主人公を打倒しようとする敵キャラかお前は」

「何かを得るのに代償は付き物です。でもなるべく努力はしたくないというか」

「ダイエット以前にまずその腑抜けた根性を叩き直すべきじゃないだろうか」

「そういえば、ダイエットも周りを巻き込むと成功率が上がると聞きます。あなたも一緒に運動しましょう」

「お前は次に下ネタを言う」

「性交率も上がりますし」

「予想通り過ぎて逆に悲しい」

「期待に応えてあげたのに……」

「変な気を回さなくていい。まあ、一緒に運動すること自体は構わないよ。健康には良いだろうし」

「では今夜から一ラウンド追加で」

「何もかも隠喩にしか聞こえないのか。そういう意味では言ってないし、それだと君より僕のほうがキツイし」

「夜が無理なら朝でもいいです」

「お前は次に」

「これぞまさしく朝バナナダイエットですね」

「と言う」

「通帳見つめてどうかしました？ お給料の振り込みはまだ先でしたよね？」

「いや、家賃の引き落としがさ、目玉飛び出るくらいの金額だったから」

「どれどれ……ぬわおっ！ あとちょっとで二桁に届くじゃないですか！ 惜しいっ」

「惜しくない。食費も合わせれば僕の手取りすら越えかねないぞ。このままだと家計が火の車だよ」

「まだ貯金があるから大丈夫ですって」

「破産フラグ立てるな。将来のための積み立て今使ってどうすんだ」

「普通に暮らしてるだけなのに、不思議ですね。いったい何がそんなに圧迫してるんです？」

「家賃は固定なんだから、光熱費と水道代に決まってるだろ。三万以上かかっている」

「ほお、それはそこそこ……」

「いやおかしいでしょ。一人暮らしが二人になってなんで三倍以上膨れ上がるんだよ。むしろ効率よくなる部分じゃないの？」

「ここらへんはガス代高いみたいですし、水道代も定額じゃありませんから、まず間違いなくお風呂のせいでしょうね」

「風呂か……。結婚してから毎日入ってるもんね、そういえば。今度からなるべくシャワーで済ませよう」

「ええー、清潔のためにお風呂は毎日入りたいです。他のところで節約しましょうよ」

「他だと大した効果ないような気がするけど、例えば？」

「おしっこのときはトイレの水を流さないとか」

「きたなっ。風呂には毎日入りたがるくせに、どうしてそういうところは不潔なんだ」

「冬季なら菌も繁殖しにくいですから、匂いもそんなに」

「問題はそこじゃない。君の尿が溜まった便器とか目撃したくないから」

「好きな人のと自分のを混ぜるとか、興奮しません？」

「.....」

「冗談ですから、そんなドン引きしないでください」

「そこはかたなく冗談に聞こえなかった」

「じ、じゃあ、お風呂の残り湯を有効活用するなんてどうです？」

「洗濯のときとか？ 前から疑問だったんだけど、あれって汚くないの？」

「確かに、ポンプを通して濾過しないのはマズイかもしれません」

「それだけじゃなくて、一晩経てば菌も繁殖するし、匂い付きそうじゃない？」

「洗剤入れるんですからそんなの気にしなくても.....。あなたって案外潔癖ですよ」

「君がガサツ過ぎるんだろ」

「なら逆に考えましょう。残り湯を洗濯に使うから汚く感じるんです。洗濯機の排水を沸かしてお風呂に」

「肌がガッサガサになる。とにかく残り湯の再利用はやめてくれ」

「食器洗いに使うとかもダメですか」

「話聞いてた？」

「お味噌汁を作るとき」

「それやったら二度とお前の料理を口にしない」

「新婚生活を始めてもう二ヶ月が経過したわけですけど、そろそろ慣れてきました？」

「うん、まあ、慣れたというか、いろいろわかってきた。少なくともこの調子だと僕の収入だけじゃ全く貯金が増えていかないってこととかが」

「まずいですねー、節約しないといけないですねー」

「惰性的に今の生活が続けそうな返事するな。もう少し危機感を持とうよ。先立つものがなきゃ子供だって作れないぞ？」

「うーん……それはちょっと心配です。でも節約だけで貯金なんてできるもんですか？」

「そうだなあ、仮に頑張って削減したとしても、毎月五万くらいしか貯金できない」

「一年で六十万。多いんでしょうか？ 少ないんでしょうか？」

「多くはないよ。相対的な感覚だからなんとも言えないけど、全体的に見れば少ないほうじゃない？」

「でも三十年経てば千八百万円ですよ？ あなたの収入も増えるでしょうし」

「子供一人育てると千三百万円かかるらしいよ」

「……家一つ建てるくらいの意気込みで作らないといけませんね。クリスマスとかバレンタインの空気に毒されてノリで作っちゃう人とか、ちょっと信じられません」

「具体的な金額聞いちゃうと、そう感じるようになるんだよね。出来ちゃったとかのほほんと言ってもらえない」

「あゝ、あゝー……千三百万円ローン、組んじゃい、まし、た……」

「うん、そのくらいのテンションになるよね、普通」

「だとすると独身時代に貯めた分が頼りな感じですか」

「それもあるけど君、やっぱり仕事やめないほうが良かったんじゃない？　　というか、結婚すること自体早すぎた気が」

「そんな今さら……いえ、すみません。私のせいですよ。無計画なまま嫌がるあなたを押し切って」

「ああいや、そこは拒否しきれなかった僕も悪いから。なんか変なこと言って、ごめん」

「――あはは、珍しくしんみりしちゃいましたね！　　お金のことは私もちゃんと考えます。アルバイトとかも改めて検討してみましょう」

「そうしてくれると助かるよ。僕の収入がもう少し増えればいいんだけど……」

「水くさいこと言わないでください。助けるもなにも、私たちは二人で一つです」

「ああ」

「お金に困って旅立つときも一緒ですから」

「やめて」

アルバイト

「今日は私向きなアルバイトをいろいろ探してみました」

「なにか良さそうなやつ見つかった？」

「いやぁ、なかなか見つからないものです。個人的にはあまり人と関わらないやつがいいんですけど」

「うん、君に接客業は無理だろうね」

「お客だけじゃなく従業員とも関わりたくないです」

「よく一度でも社会に出られたな。大学生のときにバイトとかしてなかったの？」

「特に何も。豊富な仕送りでお金には不自由しませんでしたから」

「なんか腹立つ」

「せっかく両親に買ってもらった高等遊民権モラトリアムをアルバイトに費やすなんて愚の骨頂です」

「大学をなんだと思ってんだ」

「教育機関の皮をかぶったテーマパークですよ」

「違う」

「ユニバーシティ・スタジオ・ジャパン」

「やかましい」

「なににせよ、アルバイトなんて必要ない人がわざわざするものじゃありません」

「それも一理あるかもしれないけど、一回バイトで社会勉強しといたほうがタメになることもあるぞ。就活に直接生かせなくてもさ」

「そんなこと今言われても。あなたは大学時代、何かバイトしてたんですか？」

「飲食系の店で接客してたよ」

「ああ、だから料理できるんですね」

「接客だっつってんだろ」

「それで、そのバイト経験は役に立ちましたか？」

「ああ。飲食業界には就職しないほうがいいという素晴らしい知見を得た」

「……参考にします」

「客層にもよるけどね。とりあえず安さが売りの居酒屋チェーンは絶対やめとけ」

「逆にオススメのアルバイトってありますか？」

「別に僕、さすらいのフリーターだったとかじゃないんだけど。家庭教師とか、いいんじゃない？」

「ませたガキの相手なんてしたくないです」

「子供好きじゃなかったのか」

「男子中学生は子供じゃなくて小さいおっさんですから」

「偏見だ」

「美人人妻家庭教師と二人っきりで勉強だなんて、思春期の男の子には刺激が強すぎます」

「官能小説の読みすぎだ。君自身がやりたいバイトはないの？」

「私が探した中では、治験とかが労せずたくさん稼げるみたいですね」

「安全性の確認されてない薬を投与されたり、医療機器の実験台になったりするやつか。さすがに命のリスクがあるようなものはやめようよ」

「やりませんよ。私だって己の身を削ってまで家庭に尽くそうとは思いませんから」

「あ、うん、そっか。それは良かった……のか……？」

世界トイレデー

「今日は世界トイレデーです」

「また妙ちきりんな記念日を引っ張りだしてきたな。どんな日だよ」

「2001年の今日、初めて世界トイレサミットが世界トイレ機構によって開催されたことから設けられた記念日らしいです」

「そんな同語反復みたいな説明されても。ゲッターチームという名はゲッター線をエネルギー源とするゲッターロボに乗って戦うことに由来する、みたいな」

「まあ要するに重要なイベントがあった記念すべき日なんですよ。語呂合わせではなく、サラダ記念日的な」

「トイレにそれと同じ制定理由を当てはめるの、なんかやだな」

「『この匂いがいいね』とあなたが言ったから」

「やめろ」

「ちなみに日本では十一月十五日がトイレの日ということになっています。こちらは『良いトイレ』の語呂合わせですね」

「そんなのばっかりだな、日本の記念日って。ところで、その世界トイレ機構っていうのはなにをしてる組織なの？」

「調べてみないとわかりません。でも世界規模ですからね。きっと世界に名だたるトイレの専門家たちが日夜トイレに関する最新情報を集め、未来のトイレ事情を議論している画期的なオーガニゼーションなのでしょう」

「勝手な想像だけで語るな。生産性を全く感じない」

「あ、検索したら出ましたよ。世界中で起こっている水不足による公衆衛生悪化の問題に取り組んでるんだそうです」

「予想以上に真面目な組織じゃなか。謝れ」

「まあ考えてみれば確かに、トイレに上水をジャバジャバ流せる国って、そんなにないかもありませんね」

「世界的に見れば日本の衛生水準って上の上だもん。当たり前だと思って忘れちゃうけど、病気や寄生虫の心配をしなくていいっていうのはすごく幸せなことだ」

「一回流すのに十リットルくらい使っていると、それが一日最低三回として、一年で一人あたり千リットル超えてることになりますね」

「人口一億人の国なら毎年千億リットルの水をトイレに費やしてるわけか。間違いなく何ヵ国か分の飲料水になるな」

「単純にそれらを寄付寄贈できるかと言えばまた別の話ですけども。湯水のようにって慣用句も日本くらいでしか通じないんでしょうね」

「むしろ全く逆の意味になりそう」

「世界トイレ機構にはぜひ頑張ってほしいです」

「そしてこの絶妙な他人事感」

加湿器

「最近空気の乾燥を感じます」

「冬だからね。風邪とかインフルエンザに気をつけて、外から帰ってきたらうがいと手洗いを忘れないようにしないと」

「それより空気が乾いているという根本原因から解決するべきです。そういえばうちって加湿器ありませんよね。買いませんか？」

「うーん、加湿専用の家電って必要なの？ 狭い部屋だし、お湯沸かすなり室内に洗濯物干すなりすれば十分効果あると思うけど」

「加湿器とヤカンの湯気は全然違うんですよ。最近の加湿器は超音波使うんですから。きっとマイナスイオンも出ますし」

「出たよ、マイナスイオンへの絶大な信頼……」

「マイナスイオンというより、プラシーボ効果を信賴してるんです。これによりプラシーボ効果に対してプラシーボ効果が働き、それに対してさらにプラシーボ効果が働き、そこへさらに」

「狂信者ってこうやって出来上がるのか……。超音波使おうがマイクロ波使おうがプラズマ使おうが念導力使おうが、加湿器は加湿器だろ。結局湿度上げるのに変わらないじゃん」

「はぁ……。嫌ですねえ、これだから未開の地から這いずり出てきた田舎者は」

「けたぐるぞ。お前の地元も僕んとことたいして変わらないだろ」

「ふっ、自惚れないでください。私のところは高速道路が通ってるんですよ？」

「インターチェンジはないけどな」

「……部屋干しなんてしたら服が臭くなるじゃないですか」

「だいぶ前の話題まで戻ったなあ。服はすぐ乾けば匂わないよ。湿度も増やせて一石二鳥じゃん」

「キレイな部屋なら匂いもつきにくいかもしれませんが、汚いですから、この部屋」

「汚いのは専業主婦の人がちゃんと掃除しないからだよね」

「加湿器があればちゃんと掃除します」

「どんな条件だ」

「空気が乾燥してると掃除機をかけたそばから埃が舞って、掃除できてる感じが全然しないんです」

「それっぽい理由をこじつけて……」

「いやいやホントですよ。なんでしたら試しにやってみますか？」

「おう、君が下手くそなだけってことを証明してやるよ」

「じゃあこの部屋に掃除機かけてみてください。塵ひとつ残さないレベルまでどのくらい時間がかかるか、私が計測してます」

「よーし、見てろよ。ものの三十分でピカピカにしてやるから」

「頼もしいですね。終わったら寝室のほうもお願いします」

「よーし……あれ？」

洗濯間違い

「ああ〜」

「どうした、捕れば試合終了のフライを落球した一塁手みたいな声出して」

「いやあ、手洗いでないとダメなニット、間違えて他の洗濯物と一緒に洗濯しちゃいまして……」

「失敗したな。あーあ、ちょっと伸びちゃってる」

「うう……持ってる服の中で八番目くらいにお気に入りだったのに」

「そこまで上位でもない」

「でもこの子の気持ちを思うと可哀想でなりません。流水強でも洗える粗野な衣類たちにもみくちゃにされて、さぞ恐ろしかったでしょう。ごめんなさい……」

「どんな感情移入だ」

「『ゲヘヘ、お嬢ちゃんなんでこんなところにいるんだい？』『わ、わたし、こんなはずじゃ』」

「なんか始まった」

「『へへ、キレイな体してんじゃねえか』『や、やめて！ 汚いところ押し付けないで』『汚れるのは俺たち服の宿命だろうが。お前もいずれそうなる。だったら今ここで汚してもいいよな……』『い、いやあ！』」

「もうわかったから僕の下着で茶番劇するのやめてもらえるかな」

「こんな感じのやり取りが洗濯機の中で行われたんでしょう。可哀想な私のおしゃれ着」

「間違えたのは君なのに、勝手に悪者にされたうえ汚いと言われる僕の下着のほうで可哀想じゃないかな」

「いずれにせよ、あなたの下着と一緒に洗った服なんてもう外で着られませんね」

「思春期か。冗談だとしても傷つくんだけど」

「冗談じゃないです」

「塩を塗り込むな」

「しかし勿体ないことをしてしまいました。この服、このまま伸ばしていけば袖あまりがチャームポイントなニットワンピになりませんか？」

「ならないと思う。襟のところもダルンダルンになるから」

「胸元開いてる感じで、そこはかたなくセクシーじゃないですか。外行き服から勝負服に二階級特進ですね」

「勝負服って外行き用じゃないのか」

「表勝負服は外行き服の一階級上で、かつ外行き服に含まれますが、さらに一階級上の裏勝負服は床行き服なので」

「いや君の中の衣類カーストは知らんけど。あと床行き服って何？ パジャマ？」

「部屋着の床行き服ならパジャマですが、裏勝負服は戦闘用」

「戦闘ってなんだ」

「あなたもこういうの着てるときのほうが好戦的になるじゃないですか」

「もうこの話題やめよう」

「ひゃあんっ！」

「突然変な声出すな。どうした」

「お、お風呂に入ろうとしたらドアの取っ手で静電気が……」

「ああ、冬の風物詩だね」

「最近頻繁に不意打ちをくらうようになりました。どうにかありませんか、これ。ビククリし過ぎてそのうち心臓麻痺を起こしそうです」

「元々心臓弱いならなきにしもあらずだろうけど、心臓に毛が生えてそうなやつが言ってもなあ。僕も今日玄関のドアでパチッとなったよ」

「私なんて1日に十回はパチッてる気がします。元々静電気を溜めやすい体質なのかもしれません。もしくは雷系の異能力者」

「まず前者だろう。後者だとしても才能無さすぎる」

「湿度が五十パーセント以上だと起きにくいそうです。やっぱり加湿器買しましょうよ」

「一瞬びっくりするだけだろ。静電気くらい我慢しなよ」

「そりゃあびっくりするだけなら問題ありませんけど。帯電した状態でUSB端子にでも触れたりしたら、と思うと気が気でなりません」

「心配し過ぎだと思うけど……あり得ない話でもないか。あといま気づいたけど、君の服装にも問題あるんじゃない？ 最近そういうモコモコしたやつしか着てない気がするぞ」

「いや、さすがにこの時期ハダカで過ごすというのはちょっと……」

「0か100しかないのかお前は。もっと帯電しにくい服を選べって言ってるんだよ」

「ポリエステル百パーセントのスクール水着とか？」

「スクール水着である必要性はないよね。そうそう、金属は電気を逃がしやすくなるって聞いたことがある」

「それは良いことを聞きました。下着代わりにアルミホイルを巻きましょう」

「お前がそれでいいなら好きにしろ。金属ならなんでもいいから、普通にカギやらスプーンやらでも握ってるだけで違うんだけど」

「ではあなたの金玉を」

「そうそう、男は股間についてるこれをずっと握っておけば安心……って金属じゃねえよ！」

「……………」

「……………」

「……あなたのノリ突っ込みは静電気以上にインパクト強いですね」

「慣れないことするんじゃないかった」

「はい、はい、そういうことで、よろしくお願いします。では、よいお年を」

「ん？ 誰と電話してたの？」

「浮気相手です」

「不愉快な冗談はやめろ」

「不愉快に思ってくれるんですね。本当は実家に電話してました。年末そちらには帰省しませんと」

「あ、帰らないんだ。なんで？ 僕も雪が凄そうだから実家帰るのやめて、君んちにだけ挨拶しに行こうと思ってたところなんだけど」

「挨拶ならこないだ行きましたし、結婚一年目くらいはあなたと二人っきりのお正月をまったり過ごすのも良いなあと思ひまして」

「こたつでゴロゴロするだけの行為がずいぶんと美化されたもんだなあ」

「故郷でのお正月ネタは去年やりましたし」

「変な気を回さなくていい」

「それに今は少々時期が悪いですよ」

「どういうこと？」

「新婚夫婦が実家に帰ったらまず言われるであろうワードがあるじゃないですか」

「……ああ、『孫はまだか』口撃のことか」

「いかにも。その程度ならまだいいレベルで、『結婚してからどのくらいの頻度でしてるのか』とか」

「下世話過ぎる」

「ぶっちゃけ人に言えるほどしてませんし」

「どんな頻度だろうと人に言うことじゃない」

「他にも『前に生理がきたのはいつか』とか『気持ち悪くないか』とか」

「それはないだろ。どんだけ生々しいとこまで突っ込んでくるんだ」

「うちの母ならありえます。さっきも電話で帰らないと伝えたら『せっかくお父さんと私があなたを作った部屋貸してあげようと思ってたのに』って」

「勘弁してくださいお義母さん」

「ビシッと言ってあげれば止まりますかね？ 納期は再来年の予定です、短縮申請の受諾は祝い金次第ですと」

「なんの取引だ」

「軽いジョークのつもりなんだというのは分かるんですけど、妙なプレッシャーを感じるんですよね。言葉の重みほど相対的なものはありません」

「一人っ子だとプラスアルファで重いよな。独身時代は『いい人いないのか』って言葉に苦笑いするしかなかった」

「そして恋人ができれば結婚、結婚したら孫、孫ができたら次の孫、と一つ目標を達成しても自動的に次の目標が発生するという理不尽さ。人間の欲は底が知れません」

「そのうち『曾孫はまだか』ってきいてきそう」

「もうお父さんったら、さっき食べたでしょ？」

「食うな」

アラーム

「.....」

「.....ん、なんだこの音。目覚ましか？　おい、君のスマホ鳴ってるぞ」

「むにゃ.....もうお腹いっぱいです.....いくらなんでも性欲旺盛過ぎますよぉ.....」

「一瞬ベタと思わせて最低な寝言ほざいてんじゃねえ。起きろ」

「ん.....んんっ！　んがっ！　――ちょ、なんですかいきなり!?　寝てる時に鼻つまんだら息できないでしょうが！」

「ケータイ鳴ってるから止めて。掛けたの君だろ？」

「ああ、そういえば早起きして朝御飯作る予定でしたっけ。すっかり忘れてました。ええと.....」

「なんでケータイ持って固まってるの？　早く静かにしてよ」

「いやぁ、実はこのアラーム、算数の問題を解かないと鳴り止まない設定になってるんです」

「なんでまたそんな面倒なことを.....」

「昨日見つけて面白いなぁと思ったんです。それにこれならちゃんと起きられるじゃないですか。5+7×6=73と」

「おい、計算順序間違ってる上に計算そのものまで間違ってるぞ。小学校からやり直せ」

「あはは、寝ぼけてました。47ですね」

「しっかりしろ.....って鳴り止まないじゃんか！　さっきより音量大きくなってるし！」

「そういえば問題3つ出すように設定してました」

「余計な保険かけるなよ。スヌーズ使えば一問でもいいのに」

「早起きは三問の解く、ってね」

「やかましいわ！ いろんな意味で！ ドヤ顔やめろ！」

「次の問題は $5 \times 33 \times 18$ 」

「めんどっ！ いきなり三桁と二桁の掛け算入ってくるの!？」

「2970ですね」

「計算早一よ！ なんでさっきの間違えてそれに即答できるんだ」

「ですから寝ぼけてただけですって。パソコンだって起動直後はもっさりでしょう？」

「もうなんでもいいや。さっさと次の問題解いてアラーム止めちゃってくれ」

「任せてください。もう完璧に目覚めましたからどんな問題でもどんとこいです」

「僕も朝から突っ込みの連続で血圧上がりっぱなし。まゝ確かに目覚ましとしては優秀かもね、これ」

「では最後の問題。『2より大きな偶数は2個の素数の和で表せるか?』」

「数学上の未解決問題出してくんな！」

喫茶店

「雰囲気の良い喫茶店というやつに憧れを抱いているのです」

「喫茶店？ ス〇バとかドト〇ルとか？」

「いえ、そういう人口に膾炙してしまったお店ではなく、なんと申しますか.....こう、構えが小さくてJazzが流れててカウンターの奥でちょび髭のマスターがコップ磨いてる感じの」

「水出しコーヒー出してくれるような町の喫茶店ね。にしてもずいぶんレトロなイメージだな」

「スパゲッティナポリタンが美味しい感じの」

「その要素は必須なのか」

「インベーダーゲームの筐体が置いてある感じの」

「いまどきないよ」

「探偵とか漫画家とか大学教授とかよくわからない肩書きの人物たちがたむろしてる感じの」

「注文が多い。どこの世界の店だ。そこまでキーワード挙げたら一軒も引っかけられないよ。まあそういう自称〇〇な連中が集まってる喫茶店なら、ひょっとしたらあるかもね。僕絶対行きたくないけど」

「そんな場所でゆったりと本を読めたら最高だなあと」

「喫茶店にいいイメージ持ちすぎだろ。値段は高いし、近所のおばちゃんたちがうるさいし、普通そういうところは禁煙化してないから煙草臭いし」

「それがいいんじゃないですか。私、煙草の匂いってそこまで気にならないです。おばちゃんたちだって年中無休でいるわけじゃないでしょう。値段は場所代だと思えば安いものです」

「ほとんど働いてないやつが出費の高い安いを語るな」

「そんなおしゃれで落ち着いた雰囲気のお店、近くにはないでしょうか」

「少なくとも僕は見たことないな。図書館じゃだめなの？ 静かだし雰囲気も悪くないし、何より本がたくさんある。もってこいじゃん」

「図書館は飲んだり食べたりできないので」

「もう家で大人しくしてろ。君が考えてるような喫茶店って、ほぼ確実に赤字経営だろ」

「そうですか？ 喫茶店ってそんなに維持費がかかります？ 初期費用さえなんとかすれば、あとは適当にやってて大丈夫な気が」

「貯金がそれなりにあるならね。生活費はどうにもならないし、従業員雇ったりすればやっぱりお金かかるよ」

「夫婦でやれば従業員費は無料ですよ。ああ、喫茶店を経営してみるのも良いかもしれません。私は店主をやるので、あなたはウェイトレスを」

「マニアック過ぎ」

「どうして私は私なんでしょう？」

「えーと……『誰がなんと言おうと、君は君だよ』。はい」

「いえ、そんな落ちてすらいらない落としどころ的な回答が欲しいわけではなく」

「なんだよ、寝る前に変な話しないでくれ。寝られなくなる上に無益だから」

「気になっちゃうんですから仕方ないです。あなただって考えたことあるでしょう？　自分が自分である必要性というやつを」

「子供の頃はよく考えたけど、最近はめっきりだ。そういう問題は考えるだけ時間の無駄だってわかった」

「そんなことはありません。一見解けなさそうな問題に挑むことというのは、その人の思考力を上げてくれるものです」

「妄想力は上がるかもしれないな」

「実はこの世界で意識を持っている存在は自分しかなくて、他の人はみんな機械みたいに自動で生活してるんじゃ……、という仮説はまず最初にみんな考えますよね」

「簡単に思いつけるわりに確かめようがないからね」

「それだと怖いので次は全人類を自分の意識が順番に輪廻転生しているんだと考えるように」

「ならんわ。それじゃ結局一人ぼっちだし。しかも、不幸な目にあったり嫌な最期を迎えたりした人の一生も味わわなきゃいけないじゃん」

「でもこの考えに基づいて行動すれば、誰に対しても優しくなれそうじゃないですか？　他の人は転生後もしくは転生前の自分なんですから」

「なんか怪しい宗教みたいな世界観だな」

「私はわりとこの考え方が好きで、あなたに対しても転生後の私だと思って接しています」

「そのわりに思いやりを感じないんだけど」

「私のくせに文句言わないでください」

「言ってることと違う」

「現世では前世来世の私に厳しくしようと思ってるんです」

「正真正銘の本末転倒だ」

「んーと、確か前世ではしっかり他人のために尽くしていたような.....そういうマザー・テレサ
ないしマハトマ・ガンジー的な人道的存在だった気がするんですよねー」

「完全に気のせいっていうか都合のいい妄想してるだけだろ」

「そして来世ではあなたとして、今の私に優しくしよう決めました、たった今。ですから、こ
の私でいる間は好き勝手振る舞っていいですよ？」

「ふざけんな」

「思い出すのです、来世の私よ。前世の私、つまり今の私だったときの記憶を。さあ！」

「前世がこんな奴とか最悪」

「あなたは運命って存在すると思いますか？」

「運命？ 必然性ってこと？」

「はい。私とあなたの出会いとか、今ここでこうして話してることとかが、最初から決まっていたと思いますか？」

「んー……最初からってというのがよくわからないけど、全部が全部、自然法則に従って動いてるならそうなんじゃない？ その因果律を運命っていうなら、運命なんだろうね。どうしてそんなこと聞くの？」

「もし最初にあなたに声をかけてなかったら、今みたいな関係にはなってなかったのかと思うと、少し寂しくなってしまったんです」

「元々川辺ですれ違う程度のご縁だったわけだしね。もし君と会ってなかったらか。君はそれでも誰か別の人と話してそうだけど」

「もしかしたらもっと良い人と出会えてたかもしれませんね」

「そっすね」

「最近あなた露骨に拗ねるようになりましたね。私もあなたくらい寛容な人でなければ、結婚なんて暴挙には出てないと思います」

「僕みたいな男なんてそこら中にいるよ」

「私みたいな女の子もゴマンと存在します。あなたはあなたで、私がいなくとも充実した毎日を送ってますよ」

「どうだろうなあ。まあ、いちおう君と話すようになってから、それまでより日常に潤いというか、楽しみができたような気がしないでもない」

「そんなコンビニで売ってる果汁1パーセントの〇〇ウォーターみたいな薄い実感を述べられても全く嬉しくありません」

「もう君がいない人生っていうのを想定できないから、比較しようがないだけだよ。っていうか、なんで初めて会話したとき、僕に話しかけてきたの？ なんの脈絡もなかったよね」

「さあ？ 理由なんてもうよく覚えてないですね。夕日が綺麗だったので、なんとなく誰かとお話したくなったとか、そんな適当な感じだったと思いますが。少なくともこんなに長続きするとは思ってませんでしたよ」

「じゃあ運命としか言いようがないな」

「そもそも一目惚れするようなビジュアルじゃないですから」

「やかましい」

「でも運命の一言で片づけちゃうのもそれはそれでつまらない気がします。他に上手い言い方ないですか」

「……愛の力とか」

「はい？ ちょっとよく聞こえなかったです。もう一回言ってくれませんか？」

「義務感とか」

「さっきと全然違うじゃないですか！」

「聞こえてるじゃん！」

彼と彼女の千文字会話 吉日選集（初）

<http://p.booklog.jp/book/82082>

本作品は小説投稿サイト『小説家になろう』にて連載中の作品『彼と彼女の千文字会話』から何話かをピックアップし、加筆・修正・再編集したものです。

著者：江見村元素

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gennso/profile>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/82082>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ